

西南学院大学博物館研究紀要

第 13 号

— 論 文 —

- 授業教材としての『鬼滅の刃』— 試論 片山 隆裕 3
- アオテアロア・ニュージーランドの博物館都市
ダニーデン (Dunedin) 伊藤 慎二 17
- 南島原市深江町のいわゆる
「かくれキリシタン」墓標についての検討 馬場 紀聡 49

+-----+-----+

— 資料紹介 —

- 西南学院大学博物館所蔵の
キリシタン関係虚構系資料について 鬼束 芽依 61

2025 年 3 月

 西南学院大学

Research Bulletin of Seinan Gakuin University Museum

Vol.13

MONOGRAPH

“Kimetsu no Yaiba” as a Teaching Material

Takahiro KATAYAMA

Dunedin: the Museum City of Aotearoa New Zealand

Shinji ITO

Consideration of “Kakure-Kirishitan” (Hidden Christian) Grave Stone
in Fukae-cho, Minamishimabara City, Nagasaki Prefecture

Kisato BABA

† ————— † ————— †

RESEACH on Museum Collection

Kirishitan (Japanese Christian or Hidden Christian) related Fake Artifacts Clection
of the Seinan Gakuin University Museum

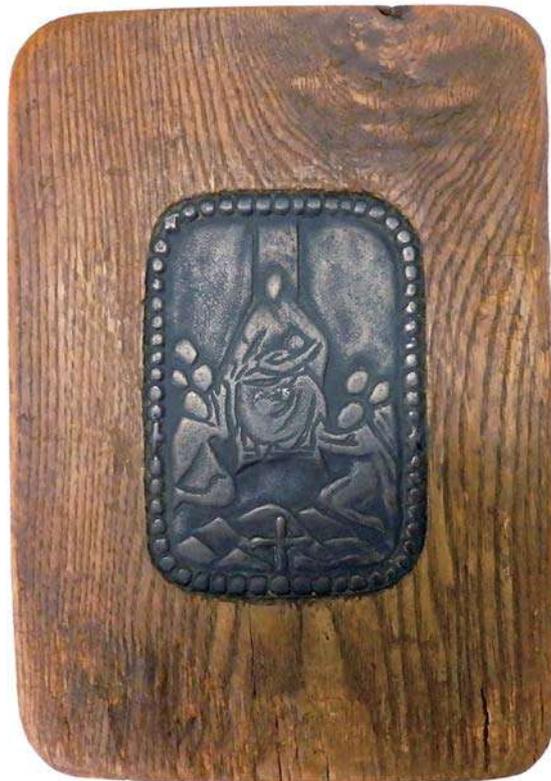
Mei ONITSUKA

March, 2025 edited by

SEINAN
GAKUIN UNIVERSITY

執 筆 要 項

1. 西南学院大学博物館（以下「博物館」という。）は、西南学院大学博物館研究紀要（以下「研究紀要」という。）を毎年1回刊行する。
2. 研究紀要の編集については、『西南学院大学博物館研究紀要』編集委員会（以下「編集委員会」という。）が、これに当る。
3. 編集委員会は、次の者をもって構成する。
 - (1)博物館長（委員長）
 - (2)博物館教員（学芸員）
 - (3)学芸研究員
 - (4)その他、館長が委嘱する者
4. 研究紀要に投稿できる者は、博物館に所属する教職員、学芸研究員、学芸調査員及び編集委員会が認めた者とする。
5. 研究紀要に投稿できる種別は、論文、研究ノート及び資料紹介とする。
6. 原稿字数の目安は、次のとおりとする。
 - (1)論文 16,000字程度
 - (2)研究ノート 8,000字程度
 - (3)資料紹介 特に定めない
7. 投稿希望者は、題名（英文タイトルを含む）及び種別を明示し、毎年12月20日までに編集委員会宛に原稿を提出すること。
8. 提出原稿の体裁は、A4版、40字×30行、二段組みとする。ただし、編集委員会において整えることがある。なお、形式は、縦書き・横書きを問わない。
9. 註は、末尾に通し番号で一括すること。
10. 図表・写真等は、掲載場所を指示すること。なお、論文への画像掲載に伴う利用申請等の手続は、すべて著者自身が行うものとする。
11. 編集委員会は、査読したうえで、投稿者に修正を求めたり、編集委員会の責任において、文言、体裁等を統一するために原稿に修正を加えたりすることがある。



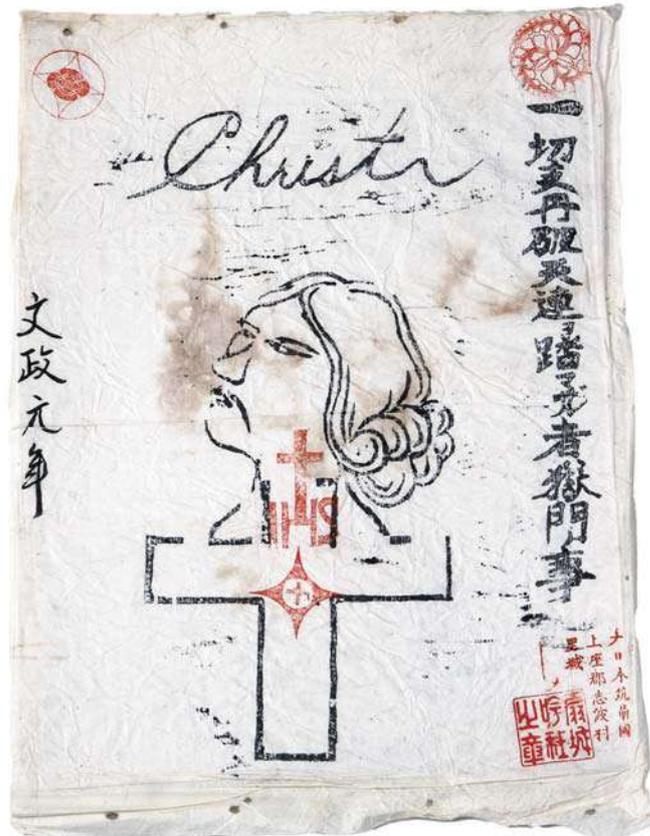
(上) 仏像付き十字架

1945～1950 (昭和20～25) 年頃 / 愛知県海部郡美和町 (あま市) / 伝 林擁国 / 鉄 / 西南学院大学博物館蔵

(下) 板踏絵 (偽造品)

20世紀 / 日本 / 制作者不詳 / 木、真鍮 / 西南学院大学博物館蔵

関連：資料紹介 鬼束芽依「西南学院大学博物館所蔵のキリシタン関係虚構系資料について」(61～79頁)



紙踏絵

20世紀／日本／制作者不詳／木版、墨書／西南学院大学博物館蔵

関連：資料紹介 鬼束芽依「西南学院大学博物館所蔵のキリシタン関係虚構系資料について」(61～79頁)

授業教材としての『鬼滅の刃』一試論

片山 隆裕

1. はじめに

『鬼滅の刃』は吾峠呼世晴^{ごとうげ こよはる}氏のマンガ作品を原作としている。『週刊少年ジャンプ』（集英社）の2016年11号で連載が開始され、2020年24号まで続いた人気作品である。日本の大正時代を舞台に、主人公の少年・竈門炭治郎^{かまど たんじろう}が鬼と化した妹・竈門禰豆子^{ねずこ}を人間に戻すために鬼たちと戦う姿を描いたこの作品（単行本全23巻）の累計発行部数は、2021年12月時点で1億5000万部を突破した。2019年にはテレビアニメ化され、物語の序章を描く「竈門炭治郎立志編」（全26話）が放送された。2020年には物語の中盤を描く劇場版アニメ「無限列車編」が公開され、国内での興行収入は403.2億円に達し、日本映画の歴代興行収入第1位となった。2021年12月5日には、劇場版の続編となるテレビアニメ「遊郭編」（全11話）の放送が開始された。2023年2月からはワールドツアー上映『鬼滅の刃』上弦集結、「刀鍛冶の里編」が



写真1 『鬼滅の刃』(全23巻+外伝)(筆者所蔵)

放送・配信された。また同年4月からは、テレビアニメ「刀鍛冶の里編」（全12話）が放送・配信され、さらに2024年4月からは前作を超える145以上の国と地域でワールドツアー上映「鬼滅の刃」絆の奇跡、そして柱稽古へ」を公開、同年5月よりテレビアニメ「柱稽古編」（全8話）が放送された。そして、2025年には劇場版「鬼滅の刃無限城編」（全3部作）の公開が予定されている。

筆者はなぜ『鬼滅の刃』に惹かれたのだろうか。それがどのような理由なのか最初判然としなかったが、単行本23巻すべてを買いそろえて何度も読み返し、劇場版を観るために映画館に足を運び、テレビアニメを繰り返し観ているうちに、その理由が少しずつわかってきた。筆者は文化人類学を専門として、授業で日頃から国内外の歴史、社会、文化などについて話をしているが、その内容と『鬼滅の刃』がオーバーラップしているように思えたからである。

そこで筆者は、勤務する大学の国際文化学部で開講されている「基礎演習A」（対象1年次生）の一部で2020年度から『鬼滅の刃』を材料として授業を行い始めた。『鬼滅の刃』は学生たちすべてが知っており、中には非常に詳しい、いわゆる『鬼滅の刃』オタクもいることで、少なからず受講生たちの興味を引くことができた。

では『鬼滅の刃』がわが国において一大ブームを巻き起こし、一種の社会現象となったのはなぜだろうか。こうした疑問から出発し、本論文では、多くの日本人が関心を持つ、魅力的なマンガでありアニメ作品である『鬼滅の刃』を材料として、大学の授業で何をどのように教えることができるのか、についてまとめてみようと考えた次第である。まだ「試

論」の域を出ないが、『鬼滅の刃』に含まれる諸要素と主として日本の歴史・社会・文化とを関連づけながら、その可能性について述べていきたい。

2. 『鬼滅の刃』の概要

物語は大正時代の日本を舞台に展開する。雪深い山里に住む主人公・竈門炭治郎は、家族を鬼に惨殺され、唯一生き残った妹の禰豆子も鬼に変えられてしまう。この悲劇をきっかけに、炭治郎は妹を人間に戻し、家族の仇を討つために、人食い鬼を狩る力を持った剣士たちや彼らを支える者たちからなる非政府組織「鬼殺隊」に入隊することを決意する。この世界には、人間を襲う鬼と、それに立ち向かう鬼殺隊が存在しており、鬼は人間を食らうことで強さを増し、普通の武器では倒すことができない。一方、鬼殺隊は「日輪刀」や「呼吸法」といった特別な技術を習得、駆使して鬼と戦う。

物語の中心となるのは、竈門炭治郎とその仲間たちである。炭治郎は15歳の少年で、非常に優しい性格である。鋭い嗅覚を持っており、この能力が鬼との戦いにおいて大いに役立つ。また、彼の強い意志と優しさは、仲間や周囲の人々を勇気づける。炭治郎の妹、竈門禰豆子は、鬼に変えられてしまったものの、人間の意識を保ちながら炭治郎を支える存在である。禰豆子は、鬼でありながら人を襲うことはなく、時には炭治郎とともに鬼と戦う。彼女の存在は、炭治郎にとって大きな支えであり、この鬼と人間という両義的存在としての禰豆子が物語の重要な要素のひとつとなっている。また、炭治郎の仲間として、我妻善逸と嘴平伊之助が登場する。善逸は臆病者でありながら、いざという時には「雷の呼吸」という技で驚異的な力を発揮する。一方、伊之助は猪の被り物をした野性的な少年で高い戦闘能力を持っている。彼らの個性や戦い方は物語に多様な魅力を与えている。

鬼殺隊を率いるのは産屋敷耀哉で、その下には「柱」(煉獄杏寿郎、時透無一郎、富岡義勇、胡蝶しのぶ、甘露寺蜜璃、伊黑小芭内、宇髄天元、悲鳴嶽

行冥、不死川実弥)と呼ばれる特殊な能力をもつ男性7人、女性2人の強い隊員たちがいる。これに対して、鬼たちの頂点に君臨するのが鬼の始祖で1000年以上の時を生きる鬼無辻無惨である。無惨の下にはその能力の高い順に「上弦の壱」から「下弦の伍」まで、黒死牟、童磨、猗窩座、半天狗、玉壺、妓夫太郎・堕姫(以上が上弦の鬼)、厭夢、軀軀、病葉、零余子、累、釜鵺(以上が下弦の鬼)という鬼がいる。これらのキャラクターたちが織りなす激しい戦いとその背後にある人間ドラマが、物語を深く豊かなものになっている。そして、それぞれの登場人物の成長や関係性の変化も、物語を通じて大きな見どころとなっている。

「竈門炭治郎立志編」では、炭治郎が鬼殺隊に入隊し、初めての鬼との戦いや修行を通じて、鬼狩りとしての基礎を築いていき、鬼との戦いに必要な技術と精神力を養っていく。劇場版として話題になった「無限列車編」では、炭治郎たちが無限列車に乗り込み、上弦の参・猗窩座との戦いが描かれる。この戦いで炭治郎は新たな力を手に入れるが、炎柱・煉獄杏寿郎が猗窩座との壮絶な闘いで命を落とすという悲劇的な結末を迎える。「遊郭編」では、遊郭を舞台に音柱・宇髄天元と上弦の鬼・妓夫太郎と堕姫の兄妹との戦いが展開され、炭治郎たちの成長と共に、鬼の過去や鬼となった背景が深く掘り下げられている。「刀鍛冶の里編」では、炭治郎たちの刀を作ったりメンテナンスをしたりする刀鍛冶たちの里で、炭治郎たちは上弦の鬼・半天狗と玉壺との戦いに挑む。新たな武器を手に入れるための戦いが描かれ、炭治郎たちのさらなる成長が見られる。最後に、「無限城編」では鬼舞辻無惨との最終決戦が描かれ、物語はクライマックスを迎える。この編で全ての因縁が収束し、炭治郎たちの旅が終わりを迎える。最終回では鬼殺隊と鬼舞辻無惨との長きにわたる戦いが終結し、生き残った者たちのその後が描かれる。最終決戦では多くの犠牲者が出る中で、炭治郎、禰豆子、善逸、伊之助、カナヲの5人が最後まで生き残る。エピローグでは現代編が描かれ、炭治郎や善逸、伊之助の子孫たちが登場するが、鬼

との戦いが終わった後も、彼らの意志や絆が現代に引き継がれていることを示唆している¹。さてそれでは、『鬼滅の刃』が大学の授業教材としてどのような話題を提供してくれるのか、そしてどのような可能性をもつのかについて考えてくことにしよう。

3. 社会反映論 — アニメと社会の関係

2019年に発生した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2020年1月15日に国内で初めて感染が確認された。2020年に入ってから世界中で感染が拡大、2022年8月までに世界の感染者数は累計6億人を超え、世界的流行をもたらした。未知のウイルスに対する有効な治療法やワクチンの開発が遅れる中、日本でも2020年4月7日に東京、埼玉、千葉、神奈川、大阪、兵庫、福岡の7都府県に緊急事態宣言が出され、4月16日にはその対象が全国に拡大、人々は制限された生活を余儀なくされた。その後、幾つもの「波」による新型コロナウイルス感染者の増減があったが、2023年5月5日、世界保健機関(WHO)はワクチンの普及や治療法の確立によって新規感染者数や死者数が減少していることを踏まえ、2020年1月30日に宣言した「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(PHECIC)」を終了すると発表した。

『鬼滅の刃』のヒットが爆発的に加速するのは2020年になってからであり、新型コロナウイルス感染症が流行し、人々の心の中に未知の感染症への潜在的な恐怖と不安が渦巻いていた時期と符合する。2020年4月7日の「緊急事態宣言」以降、連日新型コロナウイルスに関する報道が続く中で、『鬼滅の刃』の発行部数も伸びていった²。新型コロナウイルスの感染拡大と『鬼滅の刃』の爆発的ヒットは時を同じくするが、これは単なる偶然なのだろうか。

認識は客観的実在の意識への反映であるとするマルクス・レーニン主義の認識論を基本とした考え方に社会反映論がある。例えば、1990年代のサブカルチャーは、社会に蔓延する世紀末の雰囲気为背景として、終末をテーマとしたものが激増した、といっ

たような見方である。これに従えば、マンガやアニメなどの作品の内容は社会の実態を反映しており、作品の内容を通して現実の社会の実態を知ることができると思うことができる。こうした視点は映画やドラマの分析などにも応用可能となり、日本のアニメや韓国のドラマの分析で卒業論文を書こうとする学生が多い私のゼミでも参考にもなるだろう。

『鬼滅の刃』の連載が開始されたのは2016年であるが、社会にブームを巻き起こしたのは2020年になってからのことであるため、新型コロナウイルスの感染拡大という客観的事実が、その流行以前に書かれた『鬼滅の刃』に反映しているというわけではもちろんない。しかしながら、『鬼滅の刃』が社会現象となった背景には、鬼を新型コロナウイルスのメタファーとしてとらえ、鬼を退治するという物語に人々が惹かれていった状況があるという点で、『鬼滅の刃』と新型コロナウイルス感染症は相互に関係している可能性があると思うことができるだろう。

日本社会の中で、疫病と鬼は古くから深いつながりがあることが知られている。聖武天皇の治世下にあたる735(天平7)年・737(天平9)年、深刻な被害をもたらした天平年間の疫病、藤原道長の栄華を崩壊させる一因ともなった平安時代の麻疹、江戸時代の文政年間に最初に流行し、明治時代になると数年ごとに大流行を繰り返す、明治時代の45年間の死者が全国で約37万人にもものぼったと言われるコレラなども鬼と関連づけられてきた。節分に行う豆まきは病気や災害を鬼に見立てそれを追い払う儀式だが、豆をまくことで邪気を祓い、家から鬼を追い出し、福を招き入れることを目的としている。

『鬼滅の刃』でも「鬼=疫病」とする描写が多くみられ³、新型コロナウイルスに対する潜在的な恐怖と不安感が日本人の精神的土壌として息づいている「鬼」と結びついたことは容易に想像できる⁴。鬼の始祖である鬼無辻無惨との最終決戦では、鬼でありながら人間の側についた^{たまよ}珠世によって薬が投与されるが(第23巻第197話)、この薬は、①(鬼を)人間に戻す、②分裂を阻害する、③細胞を破壊する、④1分で50年老化させる、などの効果があり、ある

意味、抗生物質や抗がん剤のメタファーのようにも考えられる。無惨によって鬼化した炭治郎が人間に戻れたのは、鬼から人間に戻れた禰豆子を噛んだ際に、無惨の細胞に対する抗体をもつようになった禰豆子の血を接種したことが一因だと語られているが(第23巻第204話)、このエピソードは免疫の獲得とその血による血清治療を想起させる⁵。

当初、治療法が見つからず、ワクチンの開発にも時間がかかると考えられる状況において、コロナを恐れていた人々の中で「鬼」と「コロナ」とがリンクしていく様、そして、「コロナウイルス」に擬せられた「鬼」たちが炭治郎ら鬼殺隊の隊士たちによって退治されていくプロセスが、コロナウイルス感染症が無くなることを切望する人々の共感を呼び覚ましたと考えられる。歴史学者の磯田道史は「昔の日本人にとって鬼は祓うものだったが、今の鬼ブームでは鬼は滅びるものとして人気を博しており、鬼に対する考え方が変わってきている⁶」ことを指摘しているが、「滅びるものとしての鬼」を「消滅するものとしてのコロナウイルス」に見立てたであろう人々の願望が『鬼滅の刃』の人気の背景にあったと言えるかもしれない。

4. 文学理論 — 「モンスター理論」から見た『鬼滅の刃』

日本の代表的な妖怪である「鬼」は、昔から現在に至るまで日本の文化と強く結びついたモンスターであり、日本文化を理解するには不可欠な存在である。『鬼滅の刃』の主人公たちの「鬼」に対する見方や、作品に描かれた「鬼」の表現の複雑さを通して、これまでの「鬼」の性格を踏まえつつ、日本の歴史や文化との関連で「鬼」の存在を教材として語ることが可能になると考えられるが(この点については後述する)、同時に『鬼滅の刃』に出てくる鬼には現代的な要素が加わっており、その意味について学生たちに考えさせることができるだろう。

英米文学者のJ.コーエンは「モンスター文化(7つのテーゼ)」において「モンスター理論」という文

学理論を提唱している。コーエンはモンスターや怪物的存在を理解することが自分自身を理解するために不可欠である、という視点から「モンスターから何を学べるのか」を考える。そして、基礎となる「7つのテーゼ」によって作品の理解をより深めることができるという⁷。

一般的な鬼のイメージとしては、巨大、邪悪、人食い、角、もじゃもじゃ毛、トラ柄パンツ、棍棒、牙、ギョロ目、雷……などが挙げられる。赤鬼、青鬼など肌の色はさまざまで角、目、指の数も様々である。かつて、日本のマンガ作品に描かれてきた鬼たちを見てみても、永井豪の『鬼-2889年の反乱』(1970年)、『白い世界の怪物』(1971年)、『夜に来た鬼』(1978年)、手塚治虫の『どろろ』(1967~68年)、アニメ『まんが日本昔ばなし』(放送期間 1975~94年)、高橋留美子の『うる星やつら』(放送期間 1981~86年)など、デザインのバリエーションも多い。日本における鬼のイメージは固定的な面があるが、『鬼滅の刃』に登場する鬼も牙があったり角はあったりなかったり、目の数も様々である。『鬼滅の刃』の鬼はまた、人を食うといったような古典的な鬼の要素が入っているが、人を食べないと上に認めてもらえない、体を斬られても再生する、首を切り落とされると死ぬ、など『鬼滅の刃』の鬼特有の特徴もみられる。

鬼の始祖で鬼たちの頂点に君臨する鬼無辻無惨を理解するのに役立つのが、コーエンの「7つのテーゼ」の中のひとつである、モンスターはカテゴリークライシスの兆し(1つの枠にはめられない、下線部筆者、以下も同じ)というテーゼである。無惨は子ども、女性、男性など複数の性別や複数の年齢を行き来する。こうした流動性はカテゴリーを超えているので分類ができなくなり、行動が読めなくなり、人間側の恐怖心が高まる。人は分類できない境界上のもや境界を行き来するものに不安を抱きがちである。例えばリーチは、人間による分類においてはどうしてもどっちつかずの「曖昧」な部分が出てしまうが、その曖昧な部分が人間に不安をもたらし、人間から危険視され、曖昧であるがゆえに人

は不安感を覚える、指摘している⁸。

曖昧なもの、どっちつかずのものは、特徴づけがしにくく、頭の中で抱えているイメージを揺るがすような不安な材料になるというので、人間は分類しようとしたり排除しようとしたりしてしまう。人間による分類というのは、当事者が特別な意味づけをしていない限り、恣意的で単なる固定概念やイメージにすぎないのだが、そこに当てはまらない人が排除されたり、受け入れられなかったりということが現実に起こっている。

第2に、モンスターに対する恐怖心は実は好奇心というテーゼがある。モンスターが人気である理由は、モンスターを構成する要素の中心にある嫌悪と魅力の両義性と考えられる。人はタブーに興味があるので、モンスターの力を恐怖すると同時にその力や自由に憧れる。『鬼滅の刃』の鬼は「人間が入りにくい隙間などに隠れ、姿かたちも自由に変えられるからこそ逃げるができる。これは、モンスターは必ず逃亡する、という第3のテーゼと合致する。消したくても消せない存在として終わりなき復帰を果たす。逃亡は繰り返され、モンスターは変わっていくが、『鬼滅の刃』においても主人公・炭治郎の成長とともに鬼はより複雑化していく。

複雑化した鬼は空間をゆがめて鬼殺隊を翻弄する。鬼殺隊の隊士たちが鬼たちと戦う最後の決戦の場である「無限城」は足場が不安定極まりない。この場面については、モンスターは可能不可能の境界線を巡視する、『モンスターは〈差異の入り口〉に宿る、という第4、第5のテーゼが応用できる。自分の運命を決める社会への信頼度や自分と社会との関係性が不安定になってしまった現代だからこそ、私たちにとって世界の何もかもが不安定に見えてくる。そのとき、人はどうすればよいのだろうか。まずは、自分を取り巻く境界を認識し「外」という新しい世界、『鬼滅の刃』でいえば鬼の世界に踏み込むことでモンスターを理解することができる。そうすると今度は「内」の世界の「異常性」が見えてきて、「内」の世界をどう変革すべきかが見えてくる。外の世界へ踏み出せない人は永遠に無知ということに

なる。炭治郎が善良な鬼と悪い鬼の区別がつかない柱のひとりに「柱なんてやめてしまえ！」(第6巻第45話)と叫ぶシーンがあるが、これは鬼殺隊の世界にも変革の必要性があることを意味している。境界の外側の世界を知ることで、内側の世界の問題点を知ることになる。そのため、鬼でありながら人間の側に与する禰豆子と珠世の存在は物語の分岐点として重要となるのである。

モンスターが人間らしくなる瞬間もあれば、人がモンスターになる瞬間もある。この点には、モンスターは〈生成の分岐点〉に立つという第6のテーゼが当てはまる。何かを「怖い」、誰かを「嫌い」と感じたとき、問題は対象の中にあるとは限らず、自分の側にあるのかもしれない。「モンスター理論」によって「他者」という概念を見直すことができ、また「自分」をも見直すことができる。物語の最初のほうで、鬼殺隊の水柱である富岡義勇が「生殺与奪の権を他人に握らせるな！」(第1巻第1話)と炭治郎に言い聞かせるシーンがある。自分が無知、無力、力不足と思い込んでいた炭治郎は、義勇の言葉を聞いて想像力を巡らせ、斧のスキルを使って禰豆子を救う。こうした想像力や思考力を駆使して炭治郎は「学習性無力感」という自身の中の「障害物＝モンスター＝鬼」と戦って困難を乗り越えていく。このように、鬼は私たちの中に存在していることを『鬼滅の刃』は私たちに問いかける。こうした点は、モンスターの身体は文化を表現する体系、という第7のテーゼから考えることができるだろう⁹。

5. 神話学 — 『鬼滅の刃』に見られる神話のプロット

J.キャンベルは世界の神話に共通する英雄譚ストーリーの典型例として、「何かを奪われた人物」あるいは「大切なものが欠けていると感じている人物」が「失ったものを取り戻すため」あるいは「生命をもたらす霊薬を見つけるため」に日常生活を超えた冒険の旅に出て、そして「どこかへ行ってまた戻ってくるというサイクル」を形成する、と述べて

いる¹⁰。『鬼滅の刃』では、家族が鬼によって惨殺され、鬼にされた妹・禰豆子を人間に戻すための治療法を探して、竈門炭治郎が鬼退治をする組織に所属して、鬼が出没するスポットに繰り返し出動する物語となっている¹¹。

また『鬼滅の刃』では、英雄譚に共通する重要な要素が組み込まれているが、それは英雄が道半ばで非業の死を迎える点である。非業の死と言え、40年の流浪の旅の果てに「約束の地の目前で亡くなったモーゼ、各地で奇跡を起こしながら磔刑に処せられたイエス・キリスト、悟りを開きながら、出身国の滅亡を目の当たりにする悲劇に遭い、その後、激しい腹痛にあって亡くなったゴータマ・シッダールタなどの例が思い浮かぶ。日本の歴史においても、源義経、織田信長、坂本龍馬などが非業の死を遂げた¹²。劇場版として上映され人気を博した「無限列車編」の終末では、十二鬼月の上限の参・猗窩座との死闘に敗れ、命を落とした炎柱・煉獄杏寿郎の最期は人々の涙を誘わずにはいられなかった。鬼殺隊の「柱」たちも、そのひとりひとりが英雄譚のプロットで描かれ、道半ばで非業の最期を迎えたり、再起不能となったりするが、その意志は主人公・炭治郎たちによって受け継がれていくのである。

日本神話の特徴のひとつは、善と悪の二元論ではない点である¹³。日本神話には八百万の神々が登場するが、人間と同じようにときに悩み、ときに失敗し、ときとして過ちを犯す。こうしたプロットが『鬼滅の刃』においてもみられる。『鬼滅』では「悪」であるはずの鬼たちの過去も丁寧に描かれており、鬼たちの悲しい過去を知った炭治郎が鬼たちに同情を寄せるシーンが多い。例えば、「遊郭編」に登場する上弦の陸「妓夫太郎と堕姫」はもともと血の繋がった兄妹であった。鬼となってからも兄妹の絆は強く、片方の首が斬られただけでは死なないのが特徴である。人間だった頃、兄の妓夫太郎は、遊郭の最下層の家庭に生まれる。遊郭では化け物のように扱われながら生活をし、周りからいじめられていたため、恵まれている人間を恨み妬むようになり、性

格もかなり歪んでいた。そんな中、妹の梅（堕姫の人間の頃の名前）が生まれ、妓夫太郎の生活は一変する。梅は非常に美しく周囲から評判だったため妓夫太郎は妹を誇りに思い、次第に自身の劣等感も取り除かれていく。しかし、梅が13歳になった頃、遊郭で働いていた際、客の侍の目玉を突いて失明させてしまい、その報復として梅は縛り上げられ生きのまま焼かれてしまう。瀕死の梅を背負って歩く妓夫太郎の前に十二鬼月の童磨が現れ、鬼へと勧誘。2人は鬼となり、堕姫はおよそ10年ごとに顔や年齢や店を変え、遊女を続ける¹⁴、という具合である（第11巻96話）。確かに鬼は「悪」だが、「悪」という属性だけでは語りつくせない過去を鬼たちは背負っており、そこに心優しき炭治郎は同情する。そうした鬼たちの境遇や炭治郎の同情が『鬼滅の刃』の読者のさらなる共感を呼び覚ますことになるのだと考えられる。

6. 時代性 — 「大正」という時代

『鬼滅の刃』は主人公の竈門炭治郎が山を下りて町まで炭を売りに行っている間に家族が惨殺されることから始まる。妹の禰豆子だけは一命を取りとめるが、半分「鬼」に変えられ、炭治郎に襲いかかる（第1巻第1話）。こうした物語の始まりは、柳田國男の『山の人生』を想起させる。その第1章「山に埋もれたる人生あること」は、西美濃、つまり、岐阜県での一家心中事件についての物語的な叙述になっている。

ある貧しい炭焼の男が、13歳になる自分の息子と、やはりそれくらいの歳の拾い子の娘を山奥で育てているが、生活に困窮していく。ある秋の日、寝入ってしまった男が夕方に目を覚ますと、夕日に照らされたこの兄妹が一心に男の商売道具である斧を研いでいる。そして、「阿爺おとう、此でわしたちを殺して呉れ」と言って仰向けに寝る。こうして、この男は斧で一家心中を試みる。結局、男は子供2人を殺したものの自分は死にきれず、逮捕されて服役し、やがて特赦される段階になって

その資料が法制局の官僚であった柳田の目に触れることになったという経緯になっている¹⁵。

家族を殺した主体が「鬼」であることと「男」である点は異なるが、西美濃の山奥での一家心中事件が物語のプロットとして使われた可能性は否定できない。このように『鬼滅の刃』の始まりは柳田の「山の人生」との関係が考えられるが、こうしたところから、民俗学の面白い見方を学生たちに伝えることができるのではないだろうか。

また、『鬼滅の刃』の最初の描写から、授業の中で柳田國男の『山の人生』について語り、柳田が生きてきた明治期、大正期の世相について学生たちに語ることも可能となるだろう。『鬼滅の刃』が大正期を舞台として展開する点は、以下のエピソードから推察することができる。炭治郎は師匠である鱗滝左近次の下で2年間の修行を積み、「鬼殺隊」に入るための「最終選別」に臨むのだが、これが大正の初めだと推定される。というのは、最終選別が行われた藤襲山ふじかざやまに登場した「手鬼」が「今は明治何年だ？」と問い、炭治郎が「大正時代だ」と答えると手鬼は「年号が変わっている、俺を捕まえたのは鱗滝左近次だからなあ、忘れもしない47年前、江戸時代の慶応の頃だった。」と言うセリフからも明らかである（第1巻第7話）。

大正時代は明治と昭和のはざまにあり、それまで信じられてきた迷信や古い慣習が捨てられつつある時代でもあるが、「大正デモクラシー」と呼ばれる民主主義運動が起き、「女性解放運動」が盛んになり、「大正ロマン」と呼ばれるようにファッションその他に新しいブームが起きた、いわゆる平和な一時期であった。明治の激動期から、新たな激動期である昭和へ至る、いわゆる「はざま」の時代だったのである。

M.D.フォスターの『日本妖怪考』には、大正時代に入る直前の蒸気機関車と狸の衝突話が出てくる¹⁶。明治期、鉄道が敷かれ始めた初期の頃、人を化かす狸が出るので気を張り詰めて運行していた機関士たちは、近代化の象徴としての鉄道の威力の下、狸の変身力を信じるのをやめ、全力で機関車を

前進させるようになる。社会や人々の意識の変化が超自然的存在であった妖怪（変身する狸）を線路脇の轢死体に変えてしまう、大正時代はそういう新しい時代であった。しかしそれでも人々の意識の奥底から妖怪や鬼の存在が無くなったわけではない、『鬼滅の刃』にはそうした「間（はざま）」として大正期という時代背景があったことを忘れてはならない。

7. 日本史 — 「鬼」を通して学ぶ

小松和彦は「鬼たちがいかにして私たち日本人の精神世界に住み続けてきたのか。鬼とはいったい何者なのか」について興味深い著書を著している¹⁷。『鬼滅の刃』にも実に多種多様な鬼が登場するが、これらの鬼たちが日本の歴史に登場する鬼たちとどのような関わりをもっているのかを考察しながら、学生たちの興味を刺激する材料を提示できる可能性について考えてみたい。

(1) 阿用郷あよのさとの鬼

『出雲国風土記』（733年完成）には、出雲の大原郡阿用郷は鬼が出没して、人を食い殺した話が記録されている¹⁸。「あるとき里に住む男が山の中の畑で野良仕事をしていると、そこにひとつ目の鬼が現れ、この男をとらえて食べ始めてしまった。一緒にいた男の父母は生い茂る藪に身を潜めたが、捕食される息子を見て動揺したため、竹がカサカサと動いてしまう。これを見た男が「動く（あよ）、動く（あよ）…」と声を出したため、それ以来、そこは阿欲（後に阿用と改称）と呼ばれるようになったという¹⁹。『鬼滅の刃』には、3対の目をもつ上弦の壺・黒死牟、手に目がある矢薙芭や はば、阿用郷の鬼と同じくひとつ目をもつ鳴女なきめ（半天狗が敗死した後、上弦の肆となった）など目に特徴をもつ鬼が多い²⁰。鳴女は最終決戦において無限城を自在に変化させ鬼殺隊士たちを苦戦させているが（第21巻第183話など）、いずれにしても鬼の持つ「目」は注目に値する。

(2) 抵抗勢力としての鬼 — 土蜘蛛

馬場あき子は『鬼の研究』の中で土蜘蛛の衰亡と復讐について述べている²¹。土蜘蛛は上古の日本において大和朝廷に従わない在地土着の首長および住民に対する蔑称である。各地に存在しており、ヤマト政権は自分たちの信仰と異なる信仰をもつ集団を「土蜘蛛」と呼んで差別していた。平安時代に入ったあたりから、土蜘蛛が異形の鬼と混同されるようになっていく²²。土蜘蛛は、人間でありながら社会の構造や秩序から外れ、人間社会に対する抵抗者として描かれる『鬼滅の刃』の鬼と同じ悲哀と特徴を持っている。『鬼滅の刃』に登場するに最も近い存在として「正史で鬼とされた抵抗勢力」というわけである。

『古事記』や『日本書紀』に登場する「土蜘蛛」は、神武天皇の「東征」に対する土着の抵抗勢力で、彼らは人ならざる形質をもつ異形の集団として描かれる。『清水寺縁起絵巻』(16世紀)における坂上田村麻呂の「蝦夷征討」についても、「蝦夷はざんばら髪に粗末な衣のまさに鬼のような姿に描かれている」と指摘されている²³。

(3) 鈴鹿の鬼・大嶽丸^{おおたけまる}

桓武天皇(在位781~806年)から征夷大將軍に任じられた坂上田村麻呂(758~811年)は、東北の蝦夷を征伐するなど様々な武功を残した。「平安京の守護神」「將軍家の祖神」として称えられた田村麻呂には様々な怪異退治伝説がある。例えば、『田村の草子』に描かれる大嶽丸という背丈10丈(約30メートル)の鬼を田村麻呂が退治した物語がそのひとつである。田村麻呂は朝廷から大嶽丸の討伐を命じられたが、大嶽丸は三明の剣に守護されていた。そこで鈴鹿御前が大嶽丸に近づき、三明の剣を騙し取った。隙ができたところで田村麻呂が大嶽丸を討伐し、魂魄となった大嶽丸は天竺へと逃れた。その後、生き返った大嶽丸は陸奥国霧山を拠点にして世の中を乱し始めたが、再び田村麻呂に討たれた。そして大嶽丸の首は、宇治の平等院にあったとされる「宇治の宝蔵」に収蔵されたという²⁴。

『鬼滅の刃』に出てくる、いわゆる身体能力を向上

させる「呼吸」はすべて「日の呼吸」から派生したものであるが、この「日の呼吸」の使い手だった最強の剣士・継国縁壺^{つぎくによりいち}がほかの剣士に技を伝えたことで、様々な「呼吸」が生まれた。坂上田村麻呂は死後、立ったまま棺に納められて埋葬されたが、『鬼滅の刃』では継国縁壺は直立したまま絶命している(第20巻第174話)²⁵。こうした共通点を通して、学生たちに歴史を学んでもらうのもまた楽しい。

(4) リアル黒死牟・百目鬼^{どうめき}

平安時代中期の貴族・豪族・武将であった藤原秀郷(生没年諸説あり)が下野国宇都宮大曾あたりを通りかかった時のこと。老人が現れ、ここから北西に行った兎田に百の目を持つ鬼が出ると言った。秀郷が兎田に向かうと、両腕に百の目、全身から刃のような毛を生やした、身の丈10尺(約3m)もの大鬼・百目鬼が現れた。そこで、秀郷が鬼の急所に矢を射ると、百目鬼は明神山(白が峰)へ逃げた。翌朝、明神山に行くと、百目鬼は致命傷を負いながら、炎と毒煙を吐いてのたうち回っている。秀郷が困り果てていると智徳上人が通りかかった。上人が経文を唱えると百目鬼は鬼から人の姿になり、秀郷はその亡骸を丁重に埋葬した。現在でも、宇都宮市塙田には「百目鬼」という地名があり、百目鬼が関わる伝説が残されている。いくつか別々のかたちの話が伝えられているが、どれにも鬼が登場しているという。

『鬼滅の刃』の上弦ノ壺・黒死牟は鬼舞辻無惨の最古参の配下にして最強の鬼である(第12巻98話)²⁶。かつては鬼殺隊に所属していた元鬼狩りでもあり、鬼となった現在も全集中の呼吸を扱える。またその経歴から鬼殺隊の内部事情にもある程度精通している。元々は戦国時代に武家の長男として生まれており、それは同時に室町、安土桃山、江戸、そして明治を経て大正に至る約400年もの間、最強の座に君臨していた事を意味する。黒死牟は、金色の瞳の赤い六つの目を持っており、右目には「壺」、左目には「上弦」の文字が刻まれている。多数の目をもつ鬼として前出の百目鬼を想起させる存在ともいえるだろう。

(5) 鬼の首魁・酒呑童子^{しゅてんどうし}

日本の歴史上、数ある鬼退治伝説の中でも最も有名なものが、源頼光とその家臣たちによる大江山の酒呑童子退治であろう。酒呑童子は、茨木童子をはじめとする多くの鬼たちを従え、大江山を拠点としてしばしば京に出現し、若い貴族の姫君を誘拐して側に仕えさせたり、刀で切って生のまま喰ったりした。あまりにも悪行を働くので帝の命により、摂津源氏の源頼光（948～1021年）と、嵯峨源氏の渡辺綱（953～1025年）を筆頭とする頼光四天王（渡辺綱、坂田公時（生没年不詳）、碓井貞光（954?～1021年）、卜部季武（950?～1022?年））により討伐隊が結成され、長徳元年（995年）に酒呑童子の討伐に向かった。彼らは酒呑童子に姫君の血の酒や人肉をとともに食べ安心させたのち、頼光が神より兜とともにもらった「神便鬼毒酒」という毒酒を酒盛りの最中に酒呑童子に飲ませ、酒呑童子の体が動かなくなったところを押さえて寝首を搔き成敗した。しかし首を切られた後でも、酒呑童子は頼光の兜に噛みついたと言われている。

『鬼滅の刃』における鬼の首魁である鬼舞辻無惨は、永遠の命に対して執着が強いが、頼光の兜に噛みついた最強の鬼・酒呑童子の姿と重なる。また、炭治郎が鬼の総大将である鬼舞辻無惨と邂逅した際、無惨はハイカラな紳士姿だったが、これは南北朝時代の絵巻『大江山絵詞』に登場する酒呑童子を彷彿させるという。彼もまた、美しいお稚児（ちご）姿で人前に出たという逸話が残されているのだそう²⁷。

8. 日本の社会と文化 — 炭治郎と禰豆子、善逸と伊之助

『鬼滅の刃』には魅力的な登場人物が数多く登場する。優しく素直な心をもつ主人公の竈門炭治郎はじめ、鬼を退治する鬼殺隊の隊士たち、特に特集能力をもつ「柱」の面々のみならず、上弦、下弦を問わず鬼たちにもそれぞれの過去があり、その過去へ思いを馳せることで物語をより一層楽しめるのである。

(1) 炭を治める男 — 竈門炭治郎

主人公の竈門炭治郎は、鬼殺隊に入る前は炭焼きをして一家の暮らしを支えていた（第1巻第1話）。木炭は古くから使われていたと考えられ、奈良時代には大仏造営のために多くの木炭が使われたという。日常生活で木炭の需要が増えたのは近世以降だが、当時の炭はまだ高価だったので、江戸城内や大名屋敷、裕福な町屋や料亭、遊郭などでの使用に限られていた。近代になると一般庶民の生活にも浸透した。『鬼滅の刃』の冒頭に描かれているように、大正時代には山住みの人が焼いた炭を町へ売りにいくのが冬の風物詩だったようだが、こうした私たち日本人の生活に関わりが深かった炭を売りに行く描写、そして雪が降っているという季節描写は、物語の導入として非常に魅力的に映る²⁸。

炭治郎の姓である「竈門」は、『鬼滅の刃』の作者吾峠呼世晴氏が福岡県出身であると言われていることから考えると、福岡県太宰府市の宝満宮竈門神社に由来している可能性を考えることができる。宝満宮竈門神社は673年に創建され、古くは大和朝廷の出先機関だった大宰府政庁の守護のため鬼門除けとして、また、大陸へ渡る人々がこれから進む航海の安全と事業の成功を祈願したことからも『鬼滅の刃』と関係あることが推察される²⁹。また、福岡県筑後市には溝口竈門神社があり、『鬼滅の刃』とこの神社との関りも考えられる。この神社は1014年の創建とされ、玉依姫命、その左右に春日大明神と住吉大明神を祀っており、創建当時、溝口300戸の氏神として祀られた。玉依姫命は良縁の神なので、縁結びのご利益があると言われる。また「かまど」にかけて古くから台所の火事火難除けのご利益があると言われている。『鬼滅の刃』の劇場版「無限列車編」の中で、無限列車内において炎柱・煉獄杏寿郎が炭治郎に向かって、唐突に「溝口少年」と語りかけるシーンがあるが、『鬼滅の刃』ファンの間ではこれが「溝口竈門神社」が物語の聖地だとする根拠となっている。竈の神は火の神であると同時に水を支配する神である。炭治郎という名前にも火と水を治めるという意味が反映されていると考えられ、炭は火加減を操るもの、治は河川の氾濫を抑え、水をやわら

げるものという意味から成り立っていることから、名前に火と水を操る力を持つ者という意味が込められていると考えられる。

(2) 女の霊力 — 禰豆子

『鬼滅の刃』は竈門炭治郎が鬼と化した妹・禰豆子を人間に戻すために奮闘する物語である。「禰」は神が宿る場所や人の代わりになるものを意味する漢字で、「豆」は「魔を滅す」すなわち鬼除けとされる食物である。また、禰豆子のトレードマークは「竹」の口かせをしていることである。日本では、正月の門松が年神を迎えるための依代であることから明らかのように、竹や笹は古代から神が降りる神聖な植物とされた。神聖な竹で結界をつくることで禰豆子に宿る、人間を超えた力を抑える効果がある。日本神話においても、アメノウズメがスサノオの乱暴に恐れを抱いて天岩戸に隠れたアマテラスを外に出すために、天の香具山に生える笹葉をとって舞ったと伝えられる(古事記、日本書紀)。『竹取物語』で月の世界から追放されたかぐや姫が竹から生まれることも、「竹の神聖性」を表している。現在でも、竹は正月の門松に用いられ、地鎮祭などの神事に用いられ、四方に竹を立ててしめ縄を張り結界を作る³⁰。

炭治郎と禰豆子は兄妹である。男女きょうだいのペアは日本の神話や古代によくみられるパターンでもある。日本神話においてはアマテラスの弟がスサノオであり、また邪馬台国の卑弥呼には弟がいて、卑弥呼が祭祀を、弟が実質的な政治や軍事を取り仕切る体制がとられてきたとする説がある³¹。これは、きょうだい関係にある男女の首長が「聖」と「俗」をそれぞれ担当するという考え方で「ヒメヒコ制」と呼ばれる。柳田國男は『妹の力』において、古代日本における女性の霊力に関する一種の呪術的な信仰について論じている³²。ここでいう「妹(いも)」は、生物学上、社会学上の定義における妹ではなく、母、姉妹、伯母や従姉妹等の同族の女性、妻、側室、恋人など近しい間柄の女性に対する呼称をさす。女性のほうが目に見えない世界(神や死者の世界)と近い存在であり、神を人々とをつなぐ巫女的

な役割を担ってきた³³。人間と鬼の両義的存在であり、昼間は眠り、夜に起きるという特性を備える禰豆子は、炭治郎が危機に陥ったとき、度々、兄を助けるが、ここには日本社会における男女のきょうだい関係の特性が反映しているとも考えられる。

(3) 捨て子 — 我妻善逸・嘴平伊之助

炭治郎の鬼との戦いは、我妻善逸、嘴平伊之助というユニークなキャラクターをもつ友人たちとともに繰り広げられるが、善逸と伊之助はともに捨て子だったという過去をもっている。善逸は師匠で剣士を育てる「育て手」の一人であり、現役時代は「柱」の一人、鳴柱だった桑島慈悟郎に育てられ、一人前の鬼殺隊剣士として育てられた(第19巻第163話)。また、伊之助は幼い頃から野生の猪に育てられ、好戦的な野生児になった(第10巻番外編)。

日本社会において、赤ん坊を捨てる行為は近世以前においては珍しいものではなかった。平安時代の『日本霊異記』には、男遊びに精を出す母親が子どもを放置し、乳を与えずに飢えさせた話がある。かつては乳幼児死亡率が高く、幼児の人権が相対的に軽視されていた。一方で、捨て子を拾って我が子のように育てることも珍しくなかった。また、「捨て子は育つ」という言い伝えもあり、親の厄年に生まれた子や体が弱い子は、一旦、形だけ捨ててすぐに拾うと丈夫な子に育つと言われていた。明治期には年間5000人以上の捨て子がいたが、大正、昭和と時代を経るごとに減少し、昭和50年代には200~300人程度にまで減少した。しかし、一方で身寄りのない子どもたちを育てる孤児院(児童養護施設)が設立されるようになった。『鬼滅の刃』でも鬼殺隊の「柱」のひとりである悲鳴嶼行冥は、寺院で身寄りのない子どもたちを育てたことが描かれている³⁴(第16巻第135話)。

(4) 兄妹?、それとも、男と女? — 炭治郎と禰豆子、妓夫太郎と墮姫

日本近代文学においては、妹という存在が啓蒙・欲情・凌辱の対象になってきた歴史があり、日本の近代文学者たちが妹に「萌え」てきたと言われてい

る³⁵。こうしたことから考えると、炭治郎が「頑張れ、禰豆子」(第1巻第1話)、「辛抱するんだ、禰豆子!!」「兄ちゃんが誰も傷つけさせないから、眠るんだ、禰豆子」(第10巻第84話)といったように声をかけるシーンについても、単純に恋愛関係に発展しないような清い関係というよりは、妹に対する何らかの欲望の発露と見ることもできるかもしれない。

十二鬼月の上弦の陸・墮姫は基本的に兄の妓夫太郎のおんぶにだっこで、自分が首を斬られると「皆で邪魔してアタシをいじめたの!!」(第10巻第86話)、「お兄ちゃん何とかして」(第11巻第94話)と泣き喚く。無惨も「案の定、墮姫が足手纏いだっただ」(第12巻第98話)と、妓夫太郎と墮姫をペアにしたことを後悔するような発言をしている。墮姫は兄を支えられず、男に依存することしかできない。墮姫が鬼に「堕ちた」ということと遊郭に「堕ちた」ということが二重に描かれているのが「吉原遊郭編」である。なお、妓夫太郎が「お兄ちゃん」と呼ばれている点については、泉鏡花の『黒百合』(1898年)における「芸妓の兄さん、後家の後見、和尚の姪にて候ものは、油断がならぬ」という一節を踏まえるとなかなか味わい深い³⁶。芸妓は間夫のことを兄と呼ぶ。女の鬼が遊郭に潜んでいるという設定から考えても本当に単なる「お兄ちゃん」なのか、という含みがあるとも考えられる³⁷。

9. アニメ・ツーリズム — 宝満宮竈門神社と溝口竈門神社

『鬼滅の刃』ブームが高まるにしたがって、先述した宝満宮竈門神社や溝口竈門神社の参拝客が急増した。「竈門」という神社名が『鬼滅の刃』の主人公竈門炭治郎の姓と同じなため、「この神社が作品のルーツでは？」と話題になったのである。宝満宮竈門神社は「鬼門封じ」として建立され、『鬼滅』作品の鬼退治というテーマと重なる。また背後にある宝満山は古くから修験道で知られ、現在も修験者(山伏)が修行を行う。修験者は「市松模様」の装束を着ているが、これも炭治郎の羽織の柄と合致してい

る。作者の吾峠呼世晴氏のプロフィールは非公表だが、過去の公開情報によると福岡県出身で、これも「『鬼滅の刃』の由来は竈門神社」説を盛り上げる一因となっている。この神社で目を引いたのは、絵馬を飾る「絵馬掛所」であるが、ここには『鬼滅』の登場人物のイラストが描かれた絵馬がずらりと並ぶ。「炭治郎のように前向きに努力できる人間になりたい」「推(お)し(筆者注:好きな登場人物)が幸せでありますように」などのメッセージも添えられていた³⁸。

溝口竈門神社は、福岡県筑後市の田園地帯の矢部川沿いに位置する小社であるが、『鬼滅の刃』ブームの前と後とでは、参拝者の数が約100倍になったという。「竈門」という神社名に加えて、劇場版「無限列車編」の最初の部分で「柱」の一人である煉獄杏



写真2 溝口竈門神社に奉納された『鬼滅の刃』関連の絵馬 (2020年11月23日 筆者撮影)



写真3 溝口竈門神社境内での『鬼滅の刃』グッズの販売 (2020年11月23日 筆者撮影)

寿郎が炭治郎に向かって脈絡なしに発した「溝口少年」というセリフから『鬼滅の刃』ファンの中で注目された。2020年10月末には『鬼滅』ファンたちによるコスプレのイベントも開催され、多に賑わった。境内には、2020年11月末に新しい社務所やトイレが設置され、御朱印の取り扱いもスタート。静かだった地域の氏神様が、突如として脚光を浴びる観光地になったわけである³⁹。

アニメやマンガの作品の舞台となった土地や建物などを訪れる旅行はアニメ・ツーリズムの名で呼ばれ、「聖地巡礼」とも呼ばれる、近年多様化してきた観光の一形態である⁴⁰。SNSが普及し身近なものとなり、SNSを通じて大量かつ多様な情報が次々と拡散される現代社会において、特に注目すべきツーリズムの一形態となっている。筆者が勤務する大学（福岡市内）の学生たちにとって、比較的身近な場所と『鬼滅の刃』とが結びつく状況を学ぶことによって、彼らは例えば、『君の名は』の岐阜県飛騨高古川、『けいおん』の京都南禅寺、『ゆるキャン』の静岡県浜名湖など、人気アニメに出てくる、自らは訪れたことのない場所に興味を持ち、その世界を広げるのに役立つと考えられる。

日本のマンガやアニメはクールジャパン・コンテンツとして世界的に注目され、海外にも多くのファンが存在する。こうした海外の日本マンガ・日本アニメファンたちは、日本に行く機会があれば、アニメの聖地を訪問したいという希望を持っており、そうしたニーズは急速に高まりを見せている。『鬼滅の刃』はタイでも「無限列車編」が2020年12月9日に劇場公開された。タイでのタイトルは『ダープ・ピカート・アスーン』（英語タイトル：Demon Slayer、悪魔を滅する刃）で、タイでの日本アニメ興行収入第1位を記録している。タイ語では「鬼」は「ヤック」（*ยักษ์*)⁴¹と訳されるが、いわゆる日本の「鬼」という概念とは異なっており、それが理解されがたいため、「アスーン」（*อาสูน*)（悪魔、悪霊、悪鬼）⁴²というタイ語が使われている。こうした点から、『鬼滅の刃』は「文化を翻訳すること」の難しさを学生たちに教えることのできる材料にもなりうるのである。

10. おわりに

筆者が大学生だった1970年代後半頃は、マンガやアニメが研究の対象になるなどあまり考えられない時代だった。その後、マンガは社会学独自の視点から研究対象となり、その視座も多様化すると同時に社会学における地位も向上したが、カルチュラルスタディーズをはじめとする多様な学問領域の発展と相まって、マンガやアニメは多様な領域との関わりの中で論じることが可能になっていった。

本論文で取り扱った『鬼滅の刃』ブームは、奇しくも私たちを未曾有の不安に陥れたコロナウイルスの感染拡大の時期と軌を一にする。私たちは未知のウイルスであるコロナと『鬼滅の刃』に登場する奇怪かつ邪悪な鬼たちとを重ね合わせながら、意識するとしなやかに関わらず、「人を食う鬼がない世界になった」（第23巻204話）と作品の最後で描かれるような、すなわち、コロナウイルスが無くなる世界が来ることを願っていたのかもしれない。コロナウイルスの感染拡大によって多くの人々が犠牲になり、あまりにも多くのものが失われたが、「それでも俺たちは生きていかなければならない。この体に明日が来る限り」（同巻204話）という炭治郎のセリフのとおり、現実には生きている私たちも前を向いて進んでいかなければならない中の『鬼滅の刃』ブームなのであった。

筆者が所属する国際文化学部の学生たちのように歴史、社会、文化を多様な角度から学ぶ学生たちにとっても示唆に富む作品であることを確信し、『鬼滅の刃』を通して学生たちに何をどう学んでもらうかを考えてみたいと思ったことが、本論文のテーマを思いついたきっかけであった。ただ、これはあくまでも一つの試論にすぎない。筆者がまだ論じていない、あるいは気づいていない、多くの素材が『鬼滅の刃』には含まれている。さらなる研究を通して、学生たちがマンガやアニメから多くのことが学んでくれること、そしてその学ぶ楽しみを理解し、柔軟な思考や視点を養ってくれることを望んでいる。

註

- 1 マンガ愛読者の部屋「鬼滅の刃 あらすじ ざっくり解説 | 各編のストーリーと結末のまとめ」を参照しつつまとめ直した。https://mangaloversroom.com/kimetu-arasuji/ を参照 (2024年11月23日閲覧)
- 2 小和田 2020 p.141
- 3 小和田 前掲 p.139
- 4 一条 2021
- 5 小和田 前掲 pp.143-4
- 6 フジテレビ「所ジャパン」(2020年7月20日放送)における磯田道史の発言。
- 7 Cohen, J. Jeffrey 2021
- 8 リーチ, E. 1981
- 9 井島 2021を参照
- 10 キャンベル & モイヤーズ (飛田訳) 2010
- 11 滝音 2021 p.73
- 12 前掲 p.74
- 13 前掲 p.76
- 14 一部、MOVIE★PARADICE (https://www.mamemimi.com/kimetsu-demon-sad-past) を参照した。(閲覧日、2024年12月14日)
- 15 『定本柳田國男集 第四巻』筑摩書房 1968年 p.59
- 16 フォスター, M.D. 2017
- 17 小松和彦 2018
- 18 これが「鬼」が認識された最初だという。(小和田 前掲)
- 19 小和田 前掲 p.22
- 20 前掲 pp.22-3
- 21 馬場 1971
- 22 「歴史人」(https://www.rekishijin.com/29798) (2024年12月9日閲覧)
- 23 小和田 前掲 pp.190-1
- 24 前掲 p.61
- 25 前掲 pp.60-1
- 26 黒死牟は継国緑壺の双子の兄である継国厳勝(みちかつ)が鬼になった姿である。
- 27 「鬼滅のラスボス『鬼舞辻無惨』と『酒呑童子』の意外な共通点とは? 語り継がれる鬼の総大将の系譜」(みんなのライフハック@DIME)における小松和彦氏談を参照 (https://dime.jp/genre/1062096/)
- 28 滝音 前掲 pp.22-23
- 29 宝満竈門神社公式ホームページによる。(https://kamadojinja.or.jp/history/ 2024年12月9日閲覧)
- 30 滝音 前掲 pp.80-1
- 31 高群逸枝が『母系制の研究』(1938年)において提唱した仮説によれば、ヤマト王権が成立する前後の古代日本では、祭祀的・農耕従事的な女性集団の長のヒメと軍事的・戦闘従事的な男性集団の長のヒコが共立的あるいは分業的に一定地域を統治していたとされている。
- 32 柳田國男『妹の力』創元社 1942年
- 33 滝音 前掲 pp.78-9
- 34 前掲 pp.26-7
- 35 大塚 2011

- 36 泉鏡花 1941 p.270
- 37 滝音 前掲
- 38 以上、『西日本新聞(福岡都市圏版)』(2020年1月29日)を参照した。
- 39 KBC九州朝日放送「ふるさと Wish」(2020年12月8日放送)を参照した。また、2020年11月23日に筆者が溝口竈門神社を訪れた折にも、祝日だったこともあり多くの参拝客で賑わっていた。境内にはテントが張られ、『鬼滅の刃』グッズが売られ、地元の年配女性たちが「鬼滅の刃」のキャラクターを描いてお参りするための絵馬を販売していた。
- 40 岡本 2015
- 41 タイ語で鬼は「ヤック」と言う。ヤックは、もとは古代インド神話に登場する「ヤクサ」という鬼神だったが、仏教に取り入れられ、護持神となった。バンコクにある王室寺院ワット・プラケーオでは、魔除けのために巨大なヤック像が安置されている。
- 42 松山納『タイ語辞典』大学書林 1994年 p.1190

参考文献

- 池上 賢 「社会学におけるマンガ研究の体系化に向けてーデータベースによる先行研究の整理・検討から」『応用社会学』(55号) pp.155-173
- 井島・ワッシュバーン・パトリック 「モンスター理論からみた少年マンガの「鬼」ー「鬼滅の刃」を事例として」『崇城大学芸術学部研究紀要』(第15号) 2021年
- 泉 鏡花『鏡花全集 巻四』岩波書店 1941年
- 一条真也 『「鬼滅の刃」に学ぶーなぜ、コロナ禍の中で大ヒットしたのか』現代書林 2021年
- 大塚英志 『「妹」の運命：萌える近代文学者たち』思潮社 2011年
- 岡本亮輔 『聖地巡礼ー世界遺産からアニメの舞台まで』中公新書 2015年
- 小松和彦 『鬼と日本人』角川ソフィア文庫 2018年
- 小和田哲男 (監修) 『鬼滅の日本史』宝島社 2020年
- キャンベル, J. & B.モイヤーズ 『神話の力』(飛田茂雄訳) 早川書房 2010年
- 吾峠呼世晴 『鬼滅の刃』(全23巻+外伝) 集英社 2016年~2020年
- 高群逸枝 『母系制の研究』理論社 1955(初版1938)年
- 滝音能之 『鬼滅の暗号ー解説の書』宝島社 2021年
- 馬場あき子 『鬼の研究』ちくま文庫 1971年
- マイケル・ディラン・フォスター 『日本妖怪考』(廣田龍平訳) 森話社 2017年
- 柳田國男 『山の人生』『定本柳田國男集』(第4巻) 1968年
- エドモンド・リーチ 『文化とコミュニケーションー構造人類学入門』(青木保、宮坂敬造訳) 紀伊国屋書店 1981年
- Cohen, J. Jeffrey 2021 *Monster Culture (Seven Theses) in Mittman, A.S. & Hensel, M. Classic Reading on Monster Theory, Cambridge University Press.*

アオテアロア・ニュージーランドの博物館都市 ダニーデン (Dunedin)

伊藤 慎二

はじめに

オタゴ州 (Otago region) の州都ダニーデン市 (マオリ語名 *Otepoti*) (註1) は、アオテアロア (Aotearoa: ニュージーランドのマオリ語正式名称) の多様な歴史を象徴する都市である (第1図左)。都市の規模としては、同国南島二番目の人口134,600人(2023年現在)の小さな町である。しかし、在来土着のマオリ文化と新来のヨーロッパ文化が折り重なった固有の歴史的・文化的背景 (第1図右) が、さながら「博物館都市」といえるほど多様で豊かな同国屈指の博物館文化を生み出している。本稿では、このダニーデン市域の各博物館を悉皆的に現地調査し、アオテアロアの博物館文化の特色と課題を博物館学的観点から考察する。なお、筆者の研究関心上、マオリ文化に関連する考古学・歴史学系博物館について特に多く言及する。

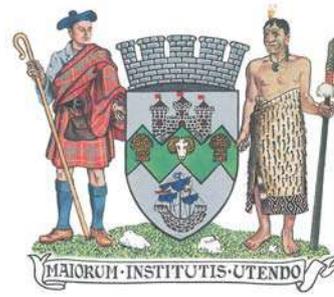
1. ダニーデンの歴史文化景観

ダニーデン市周辺地域への人類進出最古の年代は、确实なところではAD1150年頃以降とみられている (Hamel 2001)。ポリネシア系先住民族マオリ (Maori) 人の祖先がこの地域へ定着した当初は、シャグ川河口 (Shag River Mouth) 遺跡に代表されるように、飛べない大形鳥類のモア (Moa) (印東 2008) などを重要な食料資源としていた。沿岸河口部を中心に内陸各地にも石材採取や狩猟活動のための集落が営まれた (Anderson 1983, Anderson, Allingham and Smith eds. 1996)。しかし、モアの絶滅後内陸部の遺跡は減少した。寒冷でサツマイモ

(*Kumara*) 栽培が困難であったため、おもにさまざまな漁撈狩猟採集と交易を営む集落が沿岸各地に偏在した (Goodall and Griffiths 1980)。当時の集落のなかには、アオテアロアのマオリ社会全体で重要な威信材素材となった南島 (*Te Wai Pounamu*) 原産の緑色の軟玉 = ポウナムウ (*Pounamu*, Green Stone, New Zealand Jade, Nephrite) 加工と交易にかかわる重要集落ファレアケアケ (*Whareakeake*) 遺跡 (Skinner 1959) もあった (第2図a)。そして、マオリ社会の複雑化に伴い、「一族郎党」間での争いも激化し、城郭・防御性集落のパ (*Pa*) が各所に構築された。段状遺構 (切岸) や土塁・空堀が現存する例ではカリタネ (Karitane) 半島のフリアワ城 (*Huriawa Pa, Pa a Te Wera*) (第2図b) などが知られる (Brailsford 1997)。

なお、マオリ社会での19世紀頃の神話伝承によれば、ダニーデン市周辺に到来定着したマオリ人歴代の支族 = イウイ (*Iwi*) は、最初に巨人のカフイ = ティプア (*Kahui Tipua*) が登場して大地を現在のオタゴ湾周辺の地形に造りかえた。その後テ = ラプワイ (*Te Rapuwai*) 支族やワイタハ (*Waitaha*) 支族が移住してきたという。より確実な歴史としては、16世紀にカティ = マモエ (*Kati Mamoe*) 支族が定着し、さらに17世紀にカイ = タフ (*Kai Tahu, Ngai Tahu*) 支族が渡来合流したとされる (McLintock 1949, Goodall and Griffiths 1980)。

そして、ヨーロッパ人の到来期をむかえる。ジェームズ = クック (James Cook) 率いるイギリス海軍のエンデヴァー (*Endeavour*) 号が、1770年にヨーロッパからこの地に初めて来航した。その後、19世紀になると欧米人 (*Pakeha*) の捕鯨者



第1図 左：ダニーデン市中心部・オタゴ湾・オタゴ半島遠景（※筆者撮影）と右：ダニーデン市市章



a. ファレアケアケ遺跡遠景



b. フリアワ城 (Pa a Te Wera) 遠景



c. 市内中心部マオリ時代船着き場 (Toitū Tauraka Waka) 跡記念碑



d. 植民地期強制労働マオリ人犠牲者慰霊碑



e. オタクウ地区祭儀場 (Otakou Marae)



f. 市内中心部 Ko te Tuhono 記念碑

第2図 ダニーデン市周辺のマオリ系歴史文化景観 ※筆者撮影

(whalers)・アザラシ(海獣) 猟者(sealers) が次々に訪れ、地域のマオリ社会と時に抗争しながらも急速に混住が進んだ(McLintock 1949, Olssen 1984)。ダニーデン市中心部の「証券市場(The Exchange)」広場には、当時のマオリ人の集落オーテポティ(Otepoti) に接するトイトウ川河口の船着き場(Toitu Tauraka Waka) 跡記念碑がある(第2図c)。

やがて1848年には、スコットランド自由教会(長老派) による集団入植が開始された(McLintock 1949, Olssen 1984, 沢井 2003)。ダニーデンの名称は、スコットランドの首都エジンバラのゲール語古称にちなんで名づけられた。スコットランド入植団の世俗的な代表者であるウィリアム=カーギル大尉(Captain William Cargill) 関連の記念物や地名も各所に残る。「証券市場」広場には尖塔形の記念碑(第3図a) が立ち、その息子で実業家のエドワード=カーギル(Edward Cargill) が1876年に建てた豪華な城館風邸宅カーギル城の廃墟(第3図f) も市街地南端の海岸断崖上に残っている(Olssen 1984, McLean 2003)。また、ダニーデン南墓地には、故郷のケルト十字風の墓標を建てたスコットランド系入植者の墓もみられる(第3図g)。

ダニーデンの近代都市としての飛躍的發展は、その後続く出来事が決定打となった。ガブリエル=リード(Gabriel Read) により、大規模な金鉱が内陸部のガブリエルズ溪谷(Gabriel's Gully) で1861年に発見されたのである。これをきっかけに起きたゴールドラッシュは、ダニーデンを中心とするオタゴ地方に多数の移住者を引き寄せた。東アジアからも清朝末期の中国から多くの移民労働者がやってきてこの国を代表する華僑社会の礎となり、ダニーデン南墓地に中国式墓碑を残すことになった(第3図h)。

なお、同時期の19世紀の北島では、入植者とイギリス王室・政府(Crown) の圧倒的な武力による土地侵奪に対して、卓越した築城術と巧妙な戦術で各地のマオリ社会が頑強な抵抗戦(New Zealand Wars) を繰り広げていた。一転してその最終段階には、北島タラナキ(Taranaki) 地方のパリハカ(Parihaka) 村を中心にテ=フィティ=オ=ロンゴ

マイ3世(Te Whiti O Rongomai III) らの指導による植民地権力への非暴力・不服従運動が高揚をみせた(Keenan 2015, 向井 2015)。インドのマハトマ=ガンジーよりもおよそ70年早い非暴力・不服従の抵抗運動である(向井 2015)。しかし、タラナキ地方で逮捕拘束されたマオリは、1869~1881年にかけて移送収監先のダニーデンで幹線道路建設工事などの強制労働に従事させられ、多くの死者を出した。イギリスによる同様の圧政支配に故郷で苦しんでいたアイルランド系ダニーデン市民のなかには、家屋玄関にパリハカ・マオリとの連帯意思を明示したのも当時いた(Petchey and Brosnahan 2016)。市も公的に関与した強制労働犠牲マオリ人慰霊碑(第2図d) などは、ようやく2000年代になって市内3箇所に建立された(Church 2019)。ダニーデン周辺の在来マオリ社会もほとんどの土地を侵奪されたが、オタゴ半島先端部のオタコウ(Otakou) 地区は旧来の地域社会伝統が息づいている(第2図e)。市街中心の八角広場(Octagon) にも、オタコウ祭儀場(Marae) の建築装飾を題材に、マオリ時代の土地の記憶と現代のダニーデンを結ぶコ=テ=トゥホノ(Ko Te Tuhono) 碑(第2図f) が2021年に建立された。また、出身支族を問わずに市内在住マオリが参集できる現代的なアライテウル祭儀場(Arai Te Uru Maraе) が、1980年にダニーデン市中心部に創設されている(Goodall and Griffiths 1980)。

ゴールドラッシュを契機にダニーデンの人口は激増し、産業發展とヨーロッパ的都市景観の整備が急速に進んだ。19世紀末の一時期には国内随一の大都市となった。オタゴ湾口により近いポートチャルマース(Port Chalmers: 第3図d) は、ダニーデンの重要な外港機能を担って同時期に發展した。ダニーデンの中心市街にはヴィクトリア朝期(1837-1901年)・エドワード朝期(1901-1910年) のネオゴシック(Neo-Gothic) 建築様式やネオルネッサンス(Neo-Renaissance) 建築様式の豪壮華麗な建物が現在も多く残り、街並み景観の特徴となっている(Johnson 1993, McLean 2003) (第3図a・b・c・e)。そして、このような都市文化の發展が進むな



a. 「証券取引所 (The Exchange)」 広場



b. ダニーデン駅



c. ダニーデン高等・地方裁判所



d. ポートチャルマース中心部



e. オタゴ大学時計塔



f. 入植富裕層の城館風邸宅 (カーギル城)

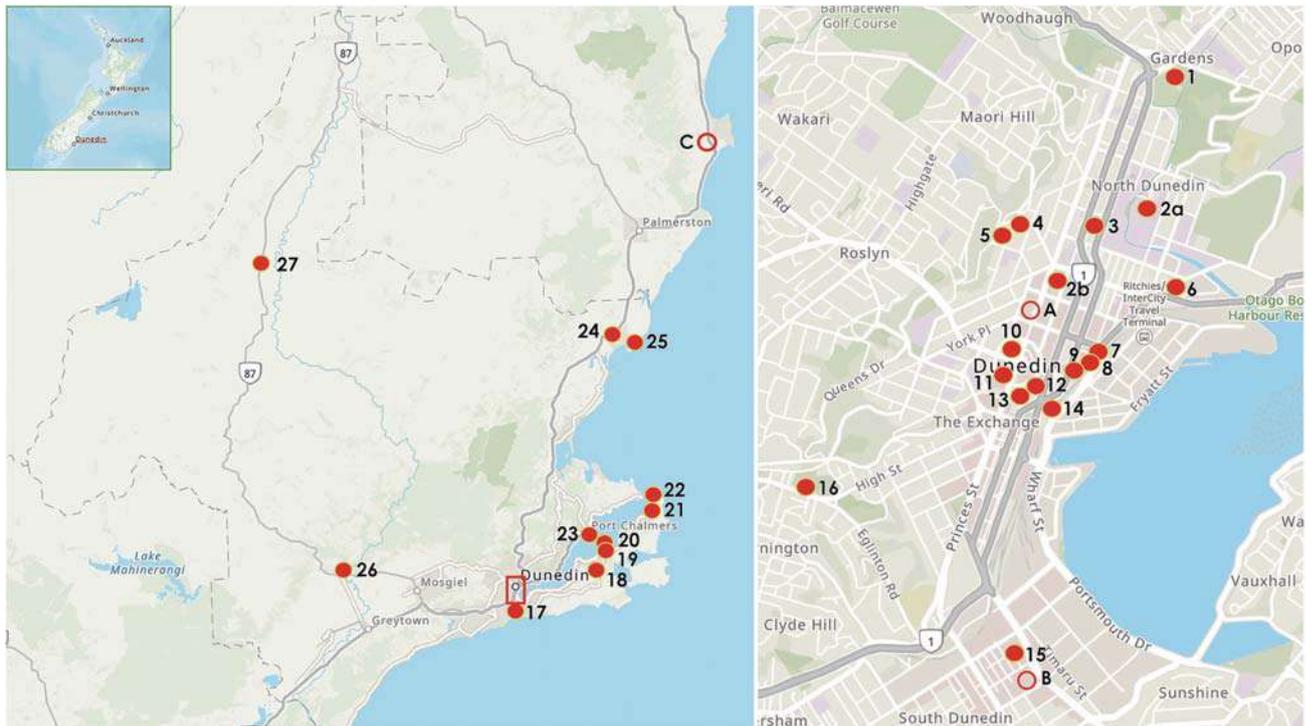


g. スコットランド人入植者の墓碑



h. 中国人移民労働者の墓碑

第3図 ダニーデン市周辺のヨーロッパ系歴史文化景観 ※筆者撮影



第4図 ダニーデン市周辺の博物館の位置 (凡例 ● : 博物館、○ : 関連施設) ※ Department of Conservation Maps を基に加筆作成

第1表 ダニーデン市周辺の博物館一覧

番号	名称	原語表記正式名称	分類	住所
1	ダニーデン植物園	Dunedin Botanic Garden	植物園	Great King Street North, Dunedin North, Dunedin 9016
2a	オタゴ大学地学博物館	Geology Museum, University of Otago	科学	Department of Geology, University of Otago, 360 Leith Street, Dunedin 9016
2b	オタゴ大学 W. D. トロッター解剖学博物館	W. D. Trotter Anatomy Museum, University of Otago	科学	Lindo Ferguson Building, 270 Great King Street, Dunedin 9016
3	オタゴ博物館	Tūhura Otago Museum	総合	419 Great King Street, Dunedin 9016
4	ダニーデン自然の不思議博物館	Dunedin Museum of Natural Mystery	美術	61 Royal Terrace, Dunedin 9016
5	オルヴェストン歴史的邸宅	Olveston Historic Home	野外	42 Royal Terrace, Dunedin North, Dunedin 9016
6	オタゴ大学ホッケンコレクション・ギャラリー	Hocken Collections and Gallery, University of Otago	美術ほか	90 Anzac Avenue, Dunedin Central, Dunedin 9016
7	ニュージーランドスポーツ栄誉殿堂	New Zealand Sports Hall of Fame	歴史	Railway Station, Anzac Avenue, Dunedin 9016
8	オタゴ美術協会ダニーデンアートギャラリー	Dunedin Art Gallery, Otago Art Society	美術	Level 1 Dunedin Railway Station, 22 Anzac Avenue, Dunedin 9016
9	ダニーデン監獄	Dunedin Gaol (Dunedin Prison)	野外	2 Castle Street, Dunedin 9016
10	ダニーデン市図書館リードギャラリー	Reed Gallery, Dunedin City Library	美術ほか	230 Moray Place, Central Dunedin, Dunedin 9054
11	ダニーデン公共美術館	Dunedin Public Art Gallery	美術	30 The Octagon, Dunedin 9016
12	ファーストチャーチ遺産・ビジター室	Heritage and Visitors' Centre (Moray Hall), First Church of Otago	歴史	415 Moray Place, Central Dunedin, Dunedin 9016
13	ブルーオイスターアートプロジェクトスペース	Blue Oyster Art Project Space	美術	16 Dowling Street, Central Dunedin, Dunedin 9016
14	オタゴ入植者博物館	Toitū Otago Settlers Museum	歴史	31 Queens Garden, Dunedin 9016
15	ダニーデンガス工場博物館	Dunedin Gasworks Museum	歴史・野外	20 Braemar Street, South Dunedin, Dunedin 9012
16	モーニングトンケーブルカーハウス・展示	Mornington Cable Car House and Display	野外	161 Eglinton Road, Mornington, Dunedin 9011
17	オーシャンビーチ鉄道	Ocean Beach Railway	野外	3 John Wilson Ocean Drive, St. Kilda, Dunedin 9013
18	ラーナック城	Larnach Castle	野外	145 Camp Road, Larnachs Castle, Dunedin 9077
19	オタゴ半島博物館	Otago Peninsula Museum	歴史・野外	17 Harington Point Road, Portobello, Dunedin 9014
20	ニュージーランド海洋研究センター (オタゴ大学海洋科学部)	New Zealand Marine Studies Centre, Department of Marine Science, University of Otago	科学	185 Hatchery Road, Portobello, Dunedin 9014
21	オタクウ記念メソジスト教会博物館	Otakou Memorial Methodist Church Museum	歴史	Otakou Marae, 25 Tamatea Road, Portobello, Dunedin 9077
22	ロイヤルアルバトロスセンター	Royal Albatross Centre	総合・野外	1259 Harington Point Road, Harington Point, Dunedin 9077
23	ポートチャルマース海事博物館	Port Chalmers Maritime Museum	歴史	19 Beach Street, Port Chalmers 9023
24	ワイコウアイティ海岸遺産センター	Waikouaiti Coast Heritage Centre	歴史・野外	200 Main Road, Waikouaiti 9510
25	マタナカ農場	Matanaka Farm	野外	51 Matanaka Road, Waikouaiti 9510
26	タイエリ歴史協会・博物館	Taieri Historical Society and Museum	歴史・野外	23 George King Memorial Drive, Outram 9074
27	ストラスタイエリ歴史博物館 (ミドルマーチ博物館)	Strath Taieri Historical Museum (Middlemarch Museum)	歴史	5 Aberafof Street, Middlemarch 9597
A	ウォールストリートモール内遺構展示	Wall Street Mall	野外	211 George Street, Central Dunedin, Dunedin 9016
B	聖パトリック聖堂遺構露出展示	St Patrick's Basilica	野外	40 Macandrew Road, South Dunedin, Dunedin 9012
C	モンテレイ博物館 (閉館)	Monterey Museum	総合	Hillgrove 9482 付近

かで、研究教育文化の基礎も整備された。1865年に「証券市場」広場付近で開催された同国最初のニュージーランド博覧会 (New Zealand Exhibition) がきっかけで1868年にオタゴ博物館、そして1869年に国内最古のオタゴ大学が創設されたのである (Peat 2004)。

II. ダニーデンの各博物館

以下に取り上げるダニーデン市内の各博物館は、日本における一般的な分類 (総合博物館、歴史博物館、美術博物館、科学博物館、動物園、水族館、植物園、動植物園、野外博物館) に該当する事例である。このうち美術博物館については、市内に関連する「アートギャラリー」が多く存在するが、アオテアロアの博物館・文書館など「コレクション」所蔵機関を網羅した web サイト「*Kōtuia ngā Kete (Kōtuia)*」紹介事例のみを含めた。それらの結果、ダニーデン市域に、現在合計28館 (オタゴ大学の学部が設置した2館をそれぞれ含む) の博物館の存在を確認できた (第4図・第1表)。また、考古学関連で遺構の現地保存展示を行っている事例や、近隣ですでに閉館している事例合計3件も関連施設として紹介する。これらのうち、郊外遠隔地にあるタイエリ歴史協会・博物館 (26) とストラスタイエリ歴史博物館 (27) を除き、すべて現地調査を行った (註2)。

なお、以下の各館に関する記述は、展示図録や解説書などが刊行されている博物館事例を除き、特にことわらない場合各館のリーフレット・展示解説パネル・ホームページを参考にした。入館料・開館日などの情報は、2025年1月時点の情報である。また、開館時間は夏季・冬季あるいは平日・週末などで変動する博物館が少なくない。

(1) ダニーデン植物園 Dunedin Botanic Garden : 第5図 (1) 1a~1d

1863年の開園当初は、現在地よりも南側の市街地の一面に創設された。しかし、洪水による深刻な

被害の結果、1869年に現在の位置に移動して再開園した。国内最古の同国を代表する植物園である (Dunlop 2002)。市街地北部の谷と丘にまたがって広大な園地が広がる。園内の標高差は25m~85mで、低地の下園 (Lower Gaden) と丘上の上園 (Upper Garden) の大きく二つに分かれる。総面積は33ヘクタールで、6800種以上の植物を育成している。

正門 (1a) がある下園部には、1908年完成のイギリス・エドワード朝期建築の温室 Winter Garden Glasshouse (1b) が現在も維持活用されており、植物園の象徴的建物である。そのすぐ東側には情報センター (1c) があり、簡単な園内解説展示や園内各見学コースの解説地図などが無料配布され、観察見学会など学習活動の拠点にもなっている。広大な園内は、高山植物園・椿園・五大陸植物園・在来植物園・バラ園・湿性植物園・鳥類観察小屋 (1d) などに分けられており、多様な生態系の違いに応じた植物の様相を見学鑑賞できる。なお、下園部には、ダニーデン市と姉妹都市関係にある北海道小樽市が提供した日本庭園がある。

園内一部施設を除き年中無休で、無料開園している。

(2a) オタゴ大学地学博物館 Geology Museum, University of Otago : 第5図 (1) 2a-a・2a-b

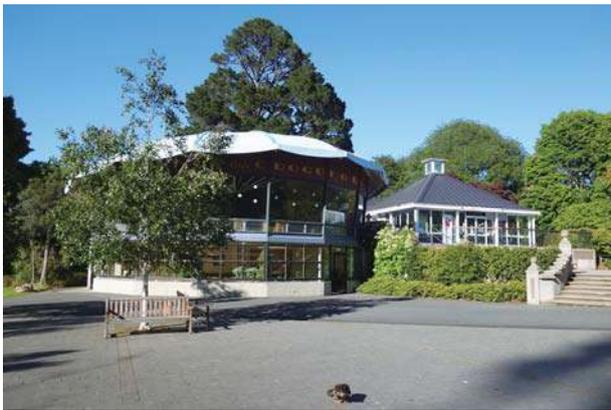
オタゴ大学でも最古級の1878年建設の地学部棟の一室にある。同国南島で最大級の重要基準資料となっている岩石・鉱物・古生物化石のコレクションを所蔵しており、学部・大学院研究教育で参照活用されている。比較的小規模の展示室内と入口廊下に合計15台の展示ケースが設置されている。それらのなかには、ダニーデン周辺の地質年代区分関連資料、カンブリア紀・三疊紀・白亜紀・漸新世の標準的な古生物化石標本と各種鉱物標本があり、ケース内はかなり密に展示されている。解説パネルなどはほとんど無い。なかでも、クジラの祖先にあたるスクアロドン科の頭骨が印象的である。隣接する作業室内での化石精査作業状況も窓越しに見学可能であ



1a ダニーデン植物園正門



1b 同温室



1c 同情報センター (右)



1d 同鳥類観察室



2a-a オタゴ大学地学博物館入口



2a-b 同展示室



2b-a オタゴ大学解剖学博物館入口



2b-b 同展示室

第5図 ダニーデン市周辺の博物館(1) ※2b-b(同博物館 Chris Smith 学芸員提供)を除き、筆者撮影

る。また、建物外にも巨大な岩石標本・化石などが屋外展示されている。

原則として学期期間中の平日に無料開館している。

(2b) オタゴ大学 W.D. トロッター解剖学博物館 W. D. Trotter Anatomy Museum, University of Otago : 第5図 (1) 2b-a・2b-b

オタゴ大学設立から間もない1875年に開設された、ダニーデン屈指の歴史の古い博物館である。開館当初は、オタゴ博物館と同じく「証券市場」広場の建物内に医学部とともにあったが、その後現在地学博物館がある建物への一時移転を経て、最終的に現在の解剖学部棟内に再開館した。現在の博物館は、学習実践活用しやすくするため各種人体模型などを旧来の重厚な展示ケース内から取り出して展示し、さらに学習スペースなどを拡大した W.D. トロッター教授時代の展示改革に基づいている。同教授の2001年の死去に際して、館名も W.D. トロッター解剖学博物館に改称された。収蔵展示資料の特色は、約3000点のカタログ化された解剖標本類のほか、19世紀後半から20世紀初頭にドイツ・イギリスなどで製作された磁器製・蠟製・石膏製を含む歴代の貴重な人体解剖模型類や古典彫像模型類である (Neuman 1993, Baillie and Smith 2018)。なお、解剖学博物館から分離した病理学博物館は、現在オタゴ大学ウェリントン校に移転している。

主として学内の教育研究参考用の施設のため、見学には事前申請などが必要である。

(3) オタゴ博物館 *Tūhura* Otago Museum : 第5図 (2) 3a~3h

オタゴ大学に隣接する市街地北部にあるアオテアロアを代表する大規模総合博物館の一つである。正式名称には、発見・調査・探検を意味するマオリ語 *Tūhura* を冠している。オタゴ博物館信託委員会法 (Otago Museum Trust Board Act) に基づき、ダニーデン市などのオタゴ州各自治体や国からの財政支出をはじめ、企業・民間団体・個人の寄付金など

を基に運営されている。

1865年に市内で開催されたニュージーランド博覧会出展の「オタゴ博物館」と名づけられた岩石鉱物標本コレクションが基となり、現在の「証券市場」広場にあった郵便局建物内に1868年に開館した。その翌年には、同一建物内にオタゴ大学も創設され、両者はその後も現在に至るまで緊密な連携関係を維持している。そして、収蔵資料の増大に対応するため、1877年に現在地に移転再開館した (Peat 2004)。当時の建物は現在も使用され続けており、旧正面入口も現存している (3b)。4階部分の動物屋根裏展示室 (3h) は、現在地での開館当初の展示室の雰囲気再現している。その後も1910年・1930年・1963年に当初建築の東側に大幅な増築を繰り返した。現在では当初規模の数倍に拡大し、正面入口も位置が変更されている (3a)。さらに、1990年代以降の逐次的な内部改装を経て、現在の常設展示の中心である3階の南島南部の土地と人々展示室や、国内で最初の試みとなった双方向的な科学体験館が2階に整備された。ちなみに、ダニーデン市と姉妹都市の北海道小樽市で、2002年にオタゴ博物館コレクション展が開催されている (小樽市博物館編 2002)。

館内の展示は、2階と3階に分かれる。2階は、マオリ民俗文化展示室 (*Tangata Whenua* = 土着の人々) とポリネシア・メラネシア文化展示室 (Pacific Cultures) の二部屋が主要な展示室である。そのほかに、特別展示室や、有料で独立別区画の蝶が舞う人工熱帯林やプラネタリウムなどを含む科学体験館 (*Tūhura* Otago Community Trust Science Centre) もある。3階は、南島南部の土地と人々展示室 (Southern Land, Southern People) ・自然展示室 (Nature) ・海事展示室 (Maritime) ・世界の人々展示室 (People of the World) に分かれる。動物屋根裏展示室 (Animal Attic) は4階に相当する。ここでは、常設展示室のみを取り上げる。

2階のマオリ民俗文化室は、マオリ地域社会 (*Kai Tahu* 支族) 有識者の監修で現在のマオリの伝統的世界観に基づいた展示構成である。歴史学・考古学・文化人類学よりも、民俗学的な観点のマオリ文



3a オタゴ博物館正面



3b 同旧正面



3c 同土着の人々展示室



3d 同太平洋の諸文化展示室



3e 同南島南部の土地と人々展示室



3f 同南島南部の土地と人々展示室



3g 同南島南部の土地と人々展示室



3h 同動物屋根裏展示室

第5図 ダニーデン市周辺の博物館(2) ※筆者撮影

化展示といえる。展示室中央にある精緻な彫刻で覆いつくされた軍舟 (*Waka Taua*) と大形の儀礼建物 (宝物庫や儀礼会所) の彫刻類が目目を引く。しかし、これらはいずれも北島のマオリ文化にまつわる資料である。オタゴ地方などの南島のマオリ文化に関しては、その左右両側の展示区画で多く扱う。特に軍舟の左側には、オタゴ地方の代表的な考古資料が多く展示されている。軍舟のすぐ左側の人頭形木彫は、南島でも古相の舟首彫刻 (*Tauihu*) として著名である。また、その近くの展示ケース内には、木柱に取り付けた特殊な展示手法で、南島特有の希少な鯨歯製山形護符がみられる。そして、その奥にはシャグ川河口 (Shag River Mouth) 遺跡関連の特集展示区画 (3c) が続く。シャグ川河口遺跡は、オタゴ地方の人類居住最古段階のモア狩猟期から長期間継続した拠点的な集落遺跡である。さまざまな文化遺物のみでなく、モアやアザラシ・クジラ・犬・魚貝類などの豊富な自然遺物も出土している。詳細な発掘調査報告書 (Anderson et al. eds. 1996) も刊行されたアオテアロアを代表する先史遺跡の一つである。中央に同遺跡のジオラマ復元展示がある。その周囲の展示ケースに釣針・銚頭などの骨器類とその未成品、穿孔されたモアの卵殻、貝製・軟玉製の装身具・威儀具類、各種磨製石斧類や、オタゴ地方で独自に発達した石刃技法とその接合復元石核資料などが展示されている。さらに奥へ進むと、先史時代後半のマポウタヒ城 (*Mapoutahi Pa*) のジオラマ模型や同時期の威儀具類、初期のヨーロッパ人捕鯨者・アザラシ (海獣) 猟者とマオリ社会の接触期の各種資料などの展示がある。

同じく2階のポリネシア・メラネシア室は、20世紀前半のヘンリー＝スキナー (Henry Devenish Skinner) 館長時代の収集資料を中心である。同館とその連携研究者の調査収集資料を含む各島嶼地域別の豊富な民族・考古資料の展示である。前室のポリネシア室では、島外での所蔵は稀なラパヌイ (イースター) 島の小形モアイ像 (3d 中央) のほかに、東ポリネシアのピトケアン (Pitcairn) 島から出土した多数の石器類の展示が目される。ピトケア

ン島の先史時代石像 (3d 中央右端) は世界で唯一の現存例である。伝統的な武具一式を装備したキリバス諸島 (ミクロネシア) の人物模型や、サモア諸島の家屋や儀礼会所情景展示なども印象的である。後室のメラネシア室では、パプアニューギニアの更新世の石器や先史時代メラネシア島嶼部のラピータ (Lapita) 式土器をはじめ、各島嶼地域別に多数の民族資料が展示されている。ニューカレドニアの首長居宅屋根上の装飾柱や装飾扉も希少な民族資料である。

3階の南島南部の土地と人々展示室 (3e) は、同館を代表するオタゴ地方の考古・歴史・自然全体に焦点をあてた総合展示室である (Peat 2002)。正面左手奥壁面には、オタゴ地方の先史時代の岩絵が再現され、その手前には軟玉 (*Pounamu*) 製品製作拠点遺跡と推測されているファレアケアケ (Whareakeake) 遺跡から出土した軟玉製の神人形の垂飾ヘイ＝ティキ (*Hei Tiki*) が多数展示されている。国内を代表する出所が明らかなヘイ＝ティキのコレクションである。ロングビーチ (Long beach) 遺跡出土の大形の黒曜石塊は、北島北部との際だった遠距離交易を証明する希少な遺物である。また、石材産地のオトゥレフア (Oturehua) 遺跡から出土した珪質岩 (Silcrete) 製の大型石刃石核や、リトルパパヌイ (Little Papanui) 遺跡など出土の骨製漁撈具類も注目される。そして、先史時代マオリ社会の地域における食料・資源獲得の歩みが、その後のヨーロッパ人の資源開発などの歴史に接続される。欧米系の捕鯨者・アザラシ (海獣) 猟者来航からゴールドラッシュ時代に向かう流れも、壁面全面の展示で駆け足気味に紹介され、隣に続く海事展示室への導入ともなっている。

3階の海事展示室では、開館初期の19世紀末からの所蔵資料である巨大なナガスクジラの骨格標本が中央に展示されている。その周囲には、19世紀後半以降のダニーデンの産業発展を支えた、ダニーデン創業のユニオン蒸気船会社 (Union Steam Ship Co.) の貨物・旅客海運関連合計62隻の船舶模型展示ケースや船鐘・船旗などが密に並べられている。

3階の南島南部の土地と人々展示室正面右手には、最古の人類が重要な食料資源とした絶滅大形鳥類モアの展示が一画を占める。特にモアの大小様々な種の全身骨格標本10体の展示(3f)は圧巻で、同館所蔵のモア関連コレクションは世界随一として知られる。そして、その奥側には、古生物化石の展示が続く斜路がある。そこでは、アオテアロア最大の前生物化石であるジュラ紀～白亜紀の海生爬虫類首長竜(マタカエア・シャグ岬発見)や、ジャイアントペンギンの化石などが目立つ。斜路を登りきると、そのまま自然展示室につながる。

3階の自然展示室では、オタゴ半島などオタゴ地方各所で見られる代表的な生物(鳥類・両生類・爬虫類・昆虫類など)に関する展示が行われている。なかでも、絶滅危惧種で飛べない鳥類のタカヘ(Takahē)、原始的な爬虫類ムカシトカゲ(Tuatara)、愛称 *Autahi* と名付けられていたヒョウアザラシの剥製と全身骨格などの展示が代表的である。

2～3階の一連の常設展示室では、古生物展示区画から自然展示室が、多数のジオラマ展示とともに随所に子供目線も意識した独創的な展示工夫が多数導入されている(3g)。

3階の世界の人々展示室では、ヨーロッパ・アジア・オーストラリア・アフリカなど、世界各地からの多様な移住者・旅行者の故郷に関わる資料を一堂に会して展示している。こうした多文化理解を促す展示は、同館への歴代の重要な寄贈品コレクション(Otago Museum ed. 2014)も組み合わせて構成している。展示資料は、衣装・装束・武具・陶磁器が多くを占め、日本美術のコレクションも含まれる。また、西洋古典文化学習用の古代ギリシア・ローマ関連資料や、ミイラを含む古代エジプト関連資料も一画にまとまっている。

事実上4階に相当する動物屋根裏展示室は、開館当初の19世紀末ヴィクトリア朝期の展示状況を再現した一室である。天井から自然光を採り入れたかつての明るい展示室を意識した照明の下に、重厚な展示ケースが四方の壁面に沿って整然と配置されてい

る(3h)。大小さまざまな生物標本・剥製類が生物分類別に展示されている。3階海事室のナガスクジラ骨格標本も、かつてはこのような展示室の中央空間で展示されていた。

1960～1970年代にかけて特に生物学や考古・文化人類学に関する館独自の調査研究成果が、紀要や報告などとして多数出版されていた。現在は同館ホームページ上でそれらの閲覧が可能である(註3)。

2階の科学体験館や特別展示室を除き、2・3階の常設展示室は無料(任意寄付制)である。クリスマスを除き、年中無休で開館している。

(4) ダニーデン自然の不思議博物館 Dunedin Museum of Natural Mystery : 第5図(3)4a・4b

中心市街地西側の急坂途中にある個人住宅を活用して2018年に開館した私立博物館である。敷地外周のラパヌイ(イースター)島のロンゴロンゴ文字風装飾が目印である(4a)。設立者で芸術家のブルース＝マハルスキ(Bruce Mahalski)氏の個人収集コレクションを展示する二室と芸術作品を展示する一室からおもに構成される。前近代ヨーロッパの「驚異の部屋(Wunderkammer)」的な展示手法が採用されている。個人収集コレクション関連は、モアの骨・卵殻を含むさまざまな動物の頭蓋骨を集めた展示室(4b)や、赤道アフリカ地域の仮面などの民族芸術や不可解な事件にまつわる品々などの展示室に分かれる。作品展示室では、さまざまな動物の骨やサンゴ片を緻密に組み合わせて制作した神秘的な人形の胸像などが展示されている。考古資料も若干展示されており、東ポリネシアのピトケアン島で1965年に発掘されたという磨製石斧類などがある。

入館料は大人10NZ\$で、原則として金土日のみが開館である。

(5) オルヴェストン歴史的邸宅 Olveston Historic Home : 第5図(3)5a・5b

イングランド出身のユダヤ系の実業家・慈善事業家のデヴィッド＝テオミン(David Theomin)とその娘ドロシー＝テオミン(Dorothy Theomin)の旧

邸宅である(5a)。テオミン父子は、後述するダニーデン公共美術館(11)などにも長年財政的支援を行っていたことで知られる。邸宅名は、故郷近くの避暑地の村落名にちなんでオルヴェストンと名づけられた。1906年に完成した邸内には、デヴィッド＝テオミン夫妻が20世紀初めのヨーロッパ旅行などで収集した多数の美術工芸品で満ちあふれている(5b)。それら20世紀前半の富裕層の美意識が結晶した美術工芸調度品と周囲の庭園を含む邸宅すべてが、1966年のドロシー＝テオミンの死去に伴い遺言でダニーデン市に一括寄贈された。現在は市などにより文化財として保存管理され、テオミン家生活当時のまま公開されている。邸内の美術工芸品は、ヨーロッパの家具・絵画・陶器などのほかに、陶磁器・七宝・根付・刀槍など日本・中国や一部西アジアを含む東洋美術も多い(Longstaff et al. eds. 2004)。

敷地内の庭園入園は無料であるが、邸宅内は事前予約制の一日6回のガイド付きツアーでのみ見学可能である。入館料は大人25.50NZ\$で、クリスマスを除き年中無休で開館している。

(6) オタゴ大学ホッケンコレクション・ギャラリー — Hocken Collections and Gallery, University of Otago : 第5図(3)6a・6b

アオテアロアを代表する同国に関する貴重史資料収蔵図書館2階の一室にある付属展示施設である(6a)。名称の由来であるトーマス＝ホッケン医師(Dr. Thomas Morland Hocken)は、1836年にイングランドで生まれ、アオテアロアに移住後ダニーデンで医院を開業した。医師としての優れた業績でダニーデンの名士として名をはせ、全国医師会会長やオタゴ大学の理事としても活躍した。そうした日々の仕事のかたわら、アオテアロア・太平洋に関する史資料・民族資料の収集保存に情熱を傾けた。やがてオタゴ大学が当時管理運営していたオタゴ博物館にそれらの収集資料を寄贈・売却し、さらに最晩年の1910年に絵画・写真・地図なども含む史料類を、無償で一般の参照利用に供するため設立されたホッ

ケン図書館に提供し、現在の同館の原型となった。展示施設では、それらのホッケンコレクションや同館の収集史資料、関連美術作品展示などが頻繁に開催されている(6b)。なお、同大学中央図書館にも貴重書展示区画のde Beer Galleryがある。

原則として火曜日～土曜日に無料開館している。

(7) ニュージーランドスポーツ栄誉殿堂 New Zealand Sports Hall of Fame : 第5図(3)7a、(4)7b・7c

市内中心部のダニーデン駅駅舎(第3図b、第5図7a)2階北側にある、同国を代表するスポーツ博物館である。ヨーロッパ人のアオテアロアへの組織的入植150周年を記念して1990年に開館した。同国のスポーツで優れた活躍をした選手の関連資料を展示して栄誉を称えている。主要な国際大会から引退後5年以上経過していることが殿堂入りの資格とされる。最初に、国技ともいえるラグビーの展示が来館者を迎える(7b)。そして、地元ダニーデン出身で1952年のヘルシンキ・オリンピックでの女子走り幅跳び金メダリストのイヴェット＝ウィリアムズ(Yvette Williams)の競技を再現した展示が続く。日本開催を含む各回オリンピックで活躍した選手に関する展示も各所にある。また、同国で盛んなクリケットに関しても展示で大きく取り扱われる(7c)。サガルマータ(エベレスト)人類初登頂で著名なエドモンド＝ヒラリー(Edmund Hillary)に関する展示などもある。

入館料は大人6NZ\$で、原則として水曜日～日曜日に開館している。

(8) オタゴ美術協会ダニーデンアートギャラリー — Dunedin Art Gallery, Otago Art Society : 第5図(3)8a・8b

市内中心部のダニーデン駅駅舎(第3図b、第5図8a)2階南側にある。1876年に同国で最初に設立された芸術家団体であるオタゴ美術協会の展示室である。同協会は、オタゴ地方における美術の研究・実践の振興を設立目的としている。1922年～1930年までは後述するダニーデン公共美術館(11)と一体



4a ダニーデン自然の不思議博物館正面



4b 同展示室



5a オルヴェストン歴史的邸宅



5b 同内部



6a オタゴ大学ホッケンコレクション・ギャラリー入口



6b 同展示室



7a・8a ニュージーランドスポーツ栄誉殿堂・オタゴ美術協会ダニーデンアートギャラリー入口



8b オタゴ美術協会ダニーデンアートギャラリー展示室

第5図 ダニーデン市周辺の博物館（3） ※筆者撮影

であったがその後分離した。1972年～2007年までは現在オタゴ博物館敷地内に組み込まれている旧北ダニーデン郵便局建物（現 HD Skinner Annex）を拠点としていたが、2007年から現在のダニーデン駅駅舎内に移転した。以前の会長を記念したショナ＝マクファーレンギャラリー（Shona McFarlane Gallery）で、歴代会員が制作あるいは寄贈した所蔵絵画コレクションの常設展示が行われている（8b）。他の展示室では、現会員の作品展などが開催されている。

原則として年中無休で無料開館している。

(9) ダニーデン監獄 Dunedin Gaol / Dunedin Prison : 第5図(4)9a・9b

ダニーデン駅前のダニーデン高等地方裁判所（第3図c）と隣り合うダニーデン監獄（旧ダニーデン刑務所）は、1898年に現在の建物が建設された（Martin 1998）。その後も増改築を経て2007年に刑務所としての役割を終えて閉鎖された。イギリスのロンドン警視庁（Scotland Yard）旧建物と似た中庭形式のヴィクトリア朝時代監獄建築としては希少な現存例とされる。現在はダニーデン刑務所慈善トラスト（Dunedin Prison Charitable Trust）が建物を管理し、文化財・博物館などとしての活用に向けた整備途中段階である（9a）。監獄内には、2007年当時まで使用されていた監房・通路仕切り檻・調理場・所員詰所などがそのまま残っている（9b）。特に19世紀末～20世紀前半頃の著名な囚人に焦点をあて、その各独居監房入口に解説案内板の設置が行われるなど、整備が進められている。当時の時代世相を反映した、ウィスキー密造者・著名な女性詐欺師・18歳の連続強盗犯などが解説対象となっている。同時に、「脱獄」を題材にした有料娯楽催事にも使用されている。

現在整備途中であるが、夏季（10月～4月末）土日に、事前予約制で大人15NZ\$のガイド付きツアー限定の公開を行っている。

(10) ダニーデン市図書館リードギャラリー

Reed Gallery, Dunedin City Library : 第5図(4)10

リードギャラリーは、かつて同国を代表する出版社の創業者であったアルフレッド＝リード（Alfred Hamish Reed）にちなむ。図書館3階の貴重書階に設けられた展示室である（10）。リードは、日曜学校用の書籍輸入などの会社をダニーデンで立ち上げ、やがてそれを基に甥とともに出版社を創業した。後年リード出版（Reed Publishing (NZ) Ltd）として知られる同国を代表する歴史・マオリ・自然・教育関係書籍の出版社となった。1975年に生涯を終えるまでダニーデンで暮らしたリードは、長年にわたり収集した中世の写本などを含む多数の貴重書コレクションを同館に寄贈した。2006年に開設されたリードギャラリーは、一般利用者が容易にそれらの文化遺産的史資料の見学を可能にするというリードの遺志を継いだものでもある。リードコレクション以外にも豊富な図書館所蔵貴重資料の中から特集的な課題を設定し、約4箇月ごとに展示替えが行われている。それらのなかには、20世紀後半の同国に多くの社会的影響を与えた芸術家で、市内（ポートチャルマース）在住者であったラルフ＝ホテレ（Ralph Hotere）の旧蔵書コレクションもある。

年末年始を除き、年中無休で無料開館している。

(11) ダニーデン公共美術館 Dunedin Public Art Gallery : 第5図(5)11a～11d

1884年に設立された国内最古の美術館である。ダニーデン在住の弁護士・画家であるウィリアム＝ホジキンス（William Mathew Hodgkins）の尽力により、最初は現在のオタゴ博物館3階の海事室部分に設立された（Entwisle 1984, Notman and Cullen 2009）。しかし、その後も現在のオタゴ入植者博物館本体建物など市内各所の建物を転々と移動し、最終的に1996年に現在地で再開館した（11a）。19世紀後半から現在までの同国の重要な芸術作品を収蔵している。なかでも、ウィリアム＝ホジキンスの娘でダニーデン出身のフランシス＝ホジキンス（Frances Mary Hodgkins）作品の充実したコレク



7b ニュージーランドスポーツ栄誉殿堂展示室



7c 同展示室



9a ダニーデン監獄



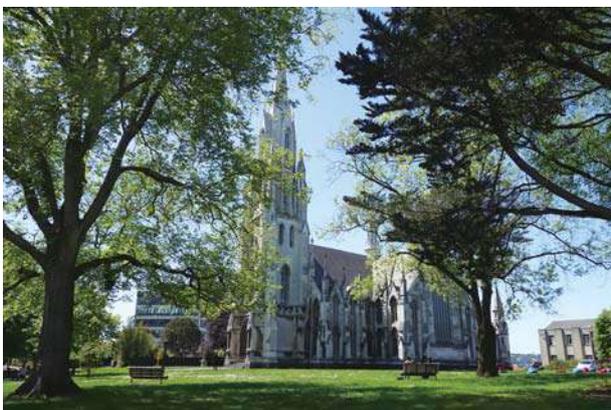
9b 同内部



10 ダニーデン市図書館リードギャラリー



13 ブルーオイスターアートプロジェクトスペース入口



12a ファーストチャーチ遺産・ビジター室 (正面右奥)



12b 同展示室

第5図 ダニーデン市周辺の博物館(4) ※筆者撮影



11a ダニーデン公共美術館正面



11b 1階第6展示室



11c 1階第3展示室



11d 2階第4展示室



15a ダニーデンガス工場博物館全景



15b 同内部



A ウォールストリートモール内遺構展示



B 聖パトリック聖堂遺構露出展示

第5図 ダニーデン市周辺の博物館(5) ※筆者撮影

ションで知られる。同国を代表する著名な画家の一人である。そのほかに、ヨーロッパの歴史的な絵画、ターナーやモネなどの著名画家の作品、さらには鈴木春信や安藤広重など近世日本の浮世絵版画も多数所蔵している。絵画以外の装飾芸術作品も体系的に収集している (Entwisle 1990, Notman and Cullen 2009)。

1階の第2～7展示室では、ヨーロッパの歴史的絵画も含みながらも、在来のマオリ文化とさまざまな新来の文化の合流を象徴的に表現する作品展示が行われている (11c)。それらのなかには、オタゴ地方の先史時代の岩絵に着想を得た作品 (11b) もある。2階の展示室は、期間限定の企画展示が多く、絵画以外にも写真・映像作品やインスタレーションアート (installation art) 作品も多い。なかでも、南島マオリのカイ=タフ (*Kai Tahu, Ngai Tahu*) 支族の神話に着想を得たゾーイ=ホール (Xoë Hall) 氏の細い通路両壁面全面に描かれた壁画芸術 (mural art) 作品 (11d) は目を引く。子供向けの芸術体験室なども充実している。

クリスマスを除き、年中無休で無料 (任意寄付制) 開館している。

なお、国内主要都市と同様にダニーデン市内も壁画芸術が盛んで、市内在住邦人画家の青島江龍氏の作品もある。

(12) ファーストチャーチ遺産・ビジター室

Heritage and Visitors' Centre (Moray Hall), First Church of Otago : 第5図(4)12a・12b

オタゴ第一教会は、スコットランドからの自由教会入植団の到着と同時に創設された市内最初のキリスト教会の系譜を受け継ぐ。ダニーデン中心部の都市建設過程の支障であった丘 (Bell Hill) を大幅に削平した場所に、尖塔が特徴的なゴシック様式の巨大な教会堂が1873年に建設された (Salmond 1983) (12a)。その主祭壇背後に付属する礼拝室モーレイホールに1998年に開設された展示室である (12b)。ダニーデン中心市街建設の歴史と重なる同教会の歴史が、多くの関連資料とともに展示されている。ス

コットランド入植団の宗教指導者トーマス=バーンズ (Thomas Burns) 牧師や、入植団を1848年にダニーデン (ポートチャルマース) まで運んだ2隻の船ジョン=ウィクリフ (John Wickliffe) 号とフィリップ=レイン (Philip Laing) 号の乗船者のことなどが詳しく紹介されている。

夏季の月曜日～金曜日に無料開館している (冬季休業)。

(13) ブルーオイスターアートプロジェクトスペース Blue Oyster Art Project Space : 第5図(4)13

実験的で革新的な芸術活動実践を支援するための芸術家自身が運営するアートスペースとして、国内でもっとも早い1999年に設立された (13)。さまざまな新進気鋭の芸術家と作品を紹介し、あわせて現代美術に関する議論の場を提供することも目的としている。なお、すぐ西側に隣接して、同様に主として現代美術作品を展示する画廊 (Milford Galleries Dunedin) もある。

火曜日～土曜日に無料で公開している。

(14) オタゴ入植者博物館 (Toitū Otago Settlers Museum) : 第5図(6)14a～14h

オタゴ博物館とならぶ市内でも最大級の博物館である。国内最古級の歴史博物館でもある。正式名称は、マオリ語地名で現在は暗渠化しているトイトゥ (*Toitū*) 川の名を冠している。ヨーロッパ人到来以前からマオリがこの付近を船着き場として使っていた長い歴史と博物館の性格を重ねている。オタゴ州設置60周年を記念して、オタゴ入植者協会が1908年に創設した。開館当初は、19世紀後半のスコットランドからの集団入植とゴールドラッシュ頃までを対象とし、名称もオタゴ初期入植者博物館 (Otago Early Settlers Museum) であった (Hinds ed. 1987)。開館当初の正面入口も現存する (14b)。しかし、その後も1922年に増築、1927年にはダニーデン公共美術館の旧展示室部分も同館に組み込まれた。さらに、1990年代には隣接するニュージーランド鉄道道路局の建物も同館の展示空間となり、2012年に正面

入口部分を含む現在の展示室がすべて完成した。もっとも北側にある船の舳先を意識した斬新な建物が現在の正面入口である (14a)。北東の入口部分から南西の出口付近まで、長さ約250mにおよぶ長大な博物館である。展示室はすべて1階のみであるが、広大な床面積に比例して展示室も数多い。ヨーロッパ人到来以前の地域のマオリ社会から、現代のダニーデン市に至る歴史が展示対象となっている。現在は、ダニーデン市が管理運営している。

展示室は14の主題で分けられている (Read and Brosnahan 2019)。最初の展示室では、「北島からのマオリの移住 (*Ara-i-te-uru*)」(14c) と、「マオリとヨーロッパ人の最初の出会い (Early Encounters)」が、取り扱われる。前半の主題は、オタゴ地方・南島マオリの代表的なカイ=タフ支族先祖の伝承上の舟アライテウル号にちなむ。北島より南島オタゴ地方に移住してきたとされるマオリ諸支族とその子孫が紹介され、復元住居などがジオラマ展示されている。また、捕鯨者・アザラシ (海獣) 猟者としてやってきた初期のヨーロッパ人 (*Pakeha*) とマオリが協業した捕鯨舟や鯨油煮出し用大釜 (try pot) などの暮らしぶりも示される。

続く展示室は二手に分かれる。左正面は「ゴールドラッシュ (Gold, Gold, Gold) 室」で、右手に進むと、「スミスギャラリー (Smith Gallery) 室」に入る。スミスギャラリー室は、膨大な数の初期入植者の肖像画・肖像写真が四方の壁全面に掲げられた同館開館以来の重要な象徴的空間である (14d)。その先には、「新エジンバラ (New Edinburgh) 室」(14e) と、「衣装文化 (Material Culture) 室」が続く。新エジンバラ室では、スコットランド集団入植団の初期の生活状況が、木小舞と泥塗壁造りの住居 (wattle and daub cottage) とともに再現展示されている (14e)。「衣装文化 (Material Culture) 室」では、19世紀末以降の入植者の様々な生活場面の衣装が並ぶ。それらのなかには、中国などヨーロッパ以外の移民の伝統衣装も含まれる。

「ゴールドラッシュ (Gold, Gold, Gold) 室」は、展示室中央の巨大な馬車の象徴展示が目を引き (14f)。

オタゴ地方のガブリエルズ溪谷 (Gabriel's Gully) の金鉱に殺到する出稼ぎ労働者とダニーデンを結ぶ駅馬車を表現している。その近くには、清代末期の中国からの移民労働者に関する展示がある。現在の中国広東省広州市番禺 (番邑) 出身で、19世紀末のダニーデンを代表する華僑商人であった徐肇開 ("Charles" Choie Sew Hoy) について取り上げている。最初は鉄くずや乾燥キクラゲなどを中国ほかに輸出し、その帰りの船で広東産の高級家具や絹などを輸入した。それらの輸出入で得た資本を基に川底を大規模に浚渫する砂金採掘工法を新たに導入して成功を収めた。

また、近代都市ダニーデンの考古学的調査を詳しく取り上げた展示区画 (14f 右端) がある。市街地中心部の百貨店ウォールストリートモール建設工事に伴う2008年の発掘調査成果である。19世紀後半から谷や湿地を埋めてほしいに市街地整備が進む変遷過程が、各種の出土遺物や検出遺構とともに詳しく紹介されている。

さらに、渡航時に移民が乗船した暗く狭い船室内の状況が再現された「大海原を越えて (Across the Ocean Waves) 室」もある。「国内初の大都市 (First Great City) 室」では19世紀末の華やかな都市の発展のみでなく、先進的なガス灯街路の陰にあった歴史にも目を向ける。たとえば、不衛生なスラム街や犯罪、薬物・アルコール中毒・売買春・ギャンブル・育児放棄などである。また、同時期にダニーデン監獄 (現存建物の前身時期) に収監され、市内で強制労働させられた北島タラナキ地方のマオリについても紹介する。イギリス植民地権力による土地侵奪に対して、非暴力・不服従抵抗運動を組織指導したテ=フィティ=オ=ロンゴマイ3世 (*Te Whiti O Rongomai III*) やトフ=カカヒ (*Tohu Kākahi*) などに関する小展示 (14g) も重要である。

ここまでの展示室がほぼ開館初期からの建物内であったが、続く展示室は1939年完成のアールデコ (Art Deco) 様式建築である旧ニュージーランド鉄道道路局バス乗降場建物とその接続部を利用している。



14a オタゴ入植者博物館正面



14b 同旧正面



14c 同先住マオリ文化展示室



14d 同スミスギャラリー室



14e 同スコットランド人入植者展示室



14f 同ゴールドラッシュ展示室



14g 同植民地期強制労働マオリ人関連展示



14h 同地域の車両変遷展示室

第5図 ダニーデン市周辺の博物館(6) ※筆者撮影

最初は、「戦争（Call to Arms）室」である。ヨーロッパ系とマオリ系の兵士が激戦地（トルコ・ガリポリ）で生死をともにしたことで事実上の「ニュージーランド国民」創出につながった第一次世界大戦など、同国が関与した諸戦争についての厳粛な展示がある。「20世紀（Twentieth Century）室」では、馬車から路面電車への変化や、多様な生活器具の急激な変化が示される。「放送文化（Dunedin on Air）室」では20世紀のラジオ・テレビ放送開始の状況が語られ、「芸術文化（Creative Dunedin）室」ではダニーデン発の音楽や美術の流行を伝える。そして、最後の広大な展示室に入る。最初は「ダニーデンのデジタル化（Dunedin Goes Digital）室」で、1960年代以降のデジタル化の発展をコンピューターの形の変化で明かされる。最後は、同館のもっとも印象的な展示室の一つである「オタゴ自動車（Otago Motors）室」（14h）である。20世紀最初の自動車の導入と「オタゴ自動車クラブ」の設立、バスや消防車などの変化を多数の実物車両で紹介している。なお、この展示室からの出口は、隣接する中国式庭園「蘭園（Lan Yuan）」（有料）入口にも通じている。同園は、ダニーデンへの中国系移民の貢献を記念して姉妹都市の上海市の協力で作庭された庭園である。

クリスマスを除き年中無休で、無料（任意寄付制）開館している。

(15) ダニーデンガス工場博物館 Dunedin Gasworks Museum：第5図(5)15a・15b

南ダニーデン地区の町工場や商業施設が密集する一画にある。平面六角形の古風なレンガ積み煙突が目印的存在である。1863年～1987年まで操業していた同国最古かつ最後のガス工場の博物館である。世界的にも希少な20世紀初期のガス工場遺構現存例として国内屈指の重要な産業遺産とされ、早くから保存整備活用計画が策定されていた（Hinds 1986）。1988年にダニーデンガス工場博物館トラスト（Dunedin Gasworks Museum Trust）が設立され、2001年に開館した。現在は、当初の工場敷地の約5

分の1が博物館として保存活用されている。

同工場のおもな役割は、ガス製造（gas manufacture）・ガス精製（gas treatment）・ガス供給（gas pumping）・ガス貯蔵（gas storage）であった。19世紀後半のダニーデンでは、ゴールドラッシュに沸き昼夜を問わずに交通や移動が盛んになった。そこで、ダニーデン市街地街路の夜間照明の必要性から、街路灯への都市ガス（town gas）とも呼ばれる石炭ガス（coal gas）の供給が、最初の重要な業務となったのである。最初の社名は、ダニーデンガス灯・コークス有限会社（The Dunedin Gas Light and Coke Company Limited）であった。その後、LPGガスの普及に伴い1987年に一般供給を停止し、1990年にガス生産も完全終了した（Dunedin Gasworks Museum 200-?, Wrigglesworth 2022）。

現在は、1907年に建設されたエンジン室・ボイラー室・煙突などのレンガ積建物や、ガス貯蔵タンクの鉄支柱列（gasholder）が残る（15a）。エンジン室内部（15b）の特に蒸気エンジン機械設備は、操業初期の例を含めて良好な状態をとどめており、見学者に作動実演も行っている。

入館料は大人5NZ\$で、日曜日のみ開館している。

(16) モーニントンケーブルカーハウス・展示

Mornington Cable Car House and Display：第5図(7)16

中心市街と西側急坂上のモーニントン地区を結んでいた1883年開通・1957年廃止のケーブルカーを保存展示するために、2018年に完成した仮設展示保管施設である。ダニーデン文化遺産路面電車トラスト（The Dunedin Heritage Light Rail Trust）が管理運営し、将来的に「動く歴史的文化遺産」および観光活用のための路線復活と、恒久的な博物館施設建設を目指している。現在、倉庫形の建物内に当時のケーブルカー車両2台が保存され、運行当時の備品や関連写真などが展示されている（16）。

日曜日にもみ無料で開館している。

(17) オーシャンビーチ鉄道 Ocean Beach Railway : 第5図(7)17

南ダニーデン地区最南端の海岸近くにある同国最古の保存・運行活用型鉄道博物館である。1961年に創設され、現在オタゴ鉄道・機関車協会 (Otago Railway and Locomotive Society) によって管理運営されている。多数の歴史的な鉄道・機関車車両を保管しているが、それらの一部を約900m 走行運用・体験乗車できることが最大の特色である。受付を兼ねた旧待合所建物内に、簡単なパネル展示がある。保有する車両は、運行可能な国内最古の1873年製造蒸気機関車 A67をはじめ、1872年に製造されダニーデンとその外港のポートチャルマース間を走行していた鉄道車両の台枠など多数である。

入館 (体験乗車) 料は大人 3 NZ\$ で、原則として夏季の日曜日のみ開館 (運行) している。

(18) ラーナック城 Larnach Castle : 第5図(7)18a・18b

同国で唯一の「城館」ともいわれるオタゴ半島中央にある19世紀後半の城館風邸宅である。城館本体の建築様式は、新ゴシック様式の塔とコロニアル様式の外縁回廊を組み合わせたヴィクトリア朝様式である (18a)。実業家で政治家のウィリアム＝ラーナック (William J. M. Larnach) が、ヨーロッパから職人も招き1871年に着工し、1874年にラーナック家が居住を開始し、1887年に内装や付属の舞踏室を含むすべての建物が完成した。当時の邸宅の愛称は「キャンプ (The Camp)」であった。事業の失敗などが理由でウィリアム＝ラーナックが国会内で1898年に自殺した後、邸宅と所有地は相続争いの対象となった。1907年のラーナック家による邸宅売却前後には、内部の家具調度品は散逸していた。その後一時期、政府所有の精神病院となり、第一次世界大戦の戦争神経症 (shell shock) 帰還兵の療養に使用された。所有者はその後さまざまに変遷し、しだいに荒廃していったが、外観は当初の姿をほぼ保っていた。そして、1967年以来バーカー (Barker) 家の所有となり、ラーナック家時代を意識した城館内の

修理復元と周囲の庭園の整備公開活用が行われるようになった (Barker and Barker 2019)。

現在の城館建物本体1階は、ラーナック家記念室や「武器庫」があり、ウィリアム＝ラーナック関係資料が展示されている。正面階段上の2階は、正面玄関や「音楽室」(18b) のほかに、「客間」・「食堂」・「朝食室」・「図書室」がある。3階・4階には、「寝室」・「子供部屋」・「乳母部屋」・「浴室」や、物見塔昇降口や胸壁内側に通じる階段がある。2024年9月現在修理中箇所が多い。2・3・4階の各部屋では、収集・復元されたラーナック家時代の家具調度品類が多く展示されている。

入館料は大人45NZ\$ で、クリスマスを除き年中無休で開館している。

ちなみに、ダニーデンにはもう一つの城館風邸宅として「カーギル城 (Cargill's Castle)」(第3図f) がある。現在廃墟化しているが、復元整備計画も検討されている。そのほかにも、富裕層の大規模邸宅では、前述の市内中心部のオルヴェストン歴史的邸宅 (5) がある。また、現在公開の有無を確認できなかったため本稿では取り上げなかったが、ラーナック城に近いオタゴ半島中央の湾岸部に、保存活用されている富裕層の別荘住宅がある。現在同国最大の建設企業創業者のジェームス＝フレッチャー (James Fletcher) が、その最初の請負業務として1909年に建設した通称「フレッチャー住宅」(Fletcher House: 727 Portobello Road, Broad Bay, Dunedin 9014) である。内部の家具調度品類は、オタゴ入植者博物館の協力により20世紀初頭の雰囲気再現されたという (Shaw 1992)。

(19) オタゴ半島博物館 Otago Peninsula Museum : 第5図(7)19a~19d

オタゴ半島中央にあるポートベッロ (Portobello) 地区の郷土博物館である。地域のオタゴ半島博物館・歴史協会 (Otago Peninsula Museum and Historical Society) の有志により管理運営されている。地区の古写真集成など研究成果刊行 (Otago Peninsula Museum and Historical Society ed. 2023, Dunn and



16 モーニントンケーブルカーハウス・展示



17 オーシャンビーチ鉄道



18a ラーナック城正面



18b 同内部



19a オタゴ半島博物館正面



19b 同マオリ文化・入植初期展示室



19c 同移設19世紀家屋内展示



19d 同移設歴史的建造物・野砲展示

第5図 ダニーデン市周辺の博物館（7） ※筆者撮影

Cameron 2023)にも意欲的である。入口にあるドーム状の旧サウンダーズ岬灯台灯籠部分が目印となっている(19a 右端)。1974年に、地区内のコロネーションホール(ジョージV世国王戴冠記念会館)内の小部屋で行った展示が原型である。その後1986年に、現在の場所に独立した展示室・事務室を設けて再開館した。ポートベック地区を中心とする19世紀以降のオタゴ半島入植者の歴史や海難事故に関する展示が多い。地域で採集された磨製石斧などの考古資料や、地域のマオリ文化に関する資料も少数展示している(19b)。同館の最大の特色は、地域の歴史的建築物・記念物を敷地内に数多く移築保存展示していることである。19世紀の移築木造住宅内では、当時の生活状況を再現展示している(19c)。また、第一次世界大戦時の戦利品であるドイツ製野砲、ポートベック派出所にあった20世紀前半の留置所、後述するティアロア要塞にあった第二次世界大戦時のレーダー監視哨などが、覆屋内で密に展示されている(19d)。

入館料は大人2NZ\$で、日曜日のみ開館している。

(20) ニュージーランド海洋研究センター(オタゴ大学海洋科学部) New Zealand Marine Studies Centre, Department of Marine Science, University of Otago: 第5図(8)20

オタゴ湾に突き出たポートベック小半島の先端にある。研究教育用展示施設を備えたオタゴ大学の海洋生物研究機関である(20)。海洋生物に関する感知操作式の各種学習機器や、食物連鎖・種別分類やその特徴を観察できる水槽展示、潜水艇を再利用した仮想海中探査体験映像展示などがある。

原則として地域の学校単位児童・生徒や団体限定で、事前予約制の展示活用教育プログラムが有料で用意されている。

(21) オタコウ記念メソジスト教会博物館 Otakou Memorial Methodist Church Museum: 第5図(8)21

オタゴ半島先端部・オタゴ湾口に近いオタコウ地区にある。同地区マオリ伝統文化の祭儀場(Otakou

Marae)内にあるキリスト教教会内博物館である。この場所が地域のマオリ首長により祭儀場に定められたのは1859年のことで、北島マオリ文化系の豪壮緻密な装飾が施された教会建築は1941年に建設されたものである。その教会建物内の前室部分が博物館となっている(21)。地域ゆかりの各家伝来の絵画・写真などを含む貴重な史資料を多数保管展示しており、ダニーデン周辺のマオリ文化に関する最重要資料を所蔵する博物館である。貴重史資料の一部は、オタゴ大学ホッケン図書館に管理委託してある。また、地域で採集・伝来・寄贈された考古資料(軟玉・鯨骨製威儀具 *Mere Pounamu*, *Patu*、磨製石斧、銛先・釣針などの骨器類、黒曜石片など)や、近隣のサンドフライ湾(Sandfly Bay)遺跡出土遺物も数多く展示されている。それらのなかには、最初期のモア狩猟期の糸巻(reel)形骨製品が1点含まれていることも注目される。

原則として一般非公開である。

(22) ロイヤルアルバトロスセンター Royal Albatross Centre: 第5図(8)22a~22d

オタゴ湾口のオタゴ半島先端プケクラ *Pukekura* (ティアロアヘッド *Taiaroa Head*)の自然保護区域内に1989年に開設されたビジターセンター・展示施設である(22a)。オタゴ半島の動植物保護・育成を目的としたオタゴ半島トラスト(Otago Peninsula Trust)によって運営されている。ダニーデンを代表する観光名所としても知られる。周辺一帯には、キタシロアホウドリ(Northern Royal Albatross)・コガタペンギン(Blue Penguin)・キンメペンギン(Yellow-Eyed Penguin)などの希少な営巣地がある。また歴史的にも、マオリ時代のプケクラ城(*Pukekura Pa*)伝承地、第一・二次世界大戦時のティアロア要塞(Fort *Taiaroa*)などの重要な文化財がある。同センターは、それらに関するガイド付き見学ツアーのビジターセンター・展示施設である。センター内では、最初にこのプケクラ地域のマオリ文化の歴史に関する紹介がある(22b)。そして、アホウドリなどの地域の希少生物に関するジオラマ・



20 ニュージーランド海洋研究センター遠景



21 オタコウ記念メソジスト教会博物館（正面左端）



22a ロイヤルアルバトロスセンター正面



22b 同展示室



22c 同展示室



22d タイアロア要塞砲台遺構

第5図 ダニーデン市周辺の博物館（8） ※筆者撮影

映像などの展示が続く（22c）。そして最後に、第一次世界大戦時のロシア帝国・第二次世界大戦時の日本帝国の侵攻に備えて構築された砲台などの要塞施設に関して解説展示がある。同センターが拠点となって、アホウドリ・ペンギンなどの観察ツアーや、1886年製のアームストロング6インチ隠頭砲（Armstrong 6-inch Disappearing Gun）砲台（22d）・営倉などの要塞遺構見学ツアーが行われている。

センターの展示は年中無休・無料で見学可能であ

るが、自然・要塞遺構見学ツアーは事前予約制で有料である。

(23) ポートチャルマース海事博物館 Port Chalmers Maritime Museum：第5図(9)23a~23d

ダニーデンの重要な外港ポートチャルマースの海運と町の歴史を主題とする博物館である。ポートチャルマース歴史協会が運営している。1877年に建設された旧ポートチャルマース郵便局建物が本館

で、2024年に新しいオタゴ港管理局建物1階に接続して新展示室が設けられた(23a)。

本館展示室中央では、1875年にダニーデンで創業し世界と結んだユニオン蒸気船会社(Union Steam Ship Co.)が大きく取り扱われる(23d)。ポートチャルマースー帯がコプタイ(Koputai)と呼ばれていたヨーロッパ人到来以前のマオリ文化についても、周辺出土の磨製石斧類とともに簡単に解説される。19世紀末以来の町の商工業の発展とダニーデン市街との鉄道輸送に関する資料も豊富である(23c)。また、港湾労働者の労働運動とその達成、近隣のアラモアナ(Aramoana)海岸でのアルミニウム精錬工場建設計画を撤回させた同国初の反公害運動(1974~1981年)の高まりなども詳しく紹介されている。新展示室では、ポートチャルマース歴史協会所蔵の多数の船舶模型などが象徴的に展示されている(23b)。

クリスマスと元日を除き年中無休で、無料(任意寄付制)開館している。

(24) ワイコウアイティ海岸遺産センター Wai-kouaiti Coast Heritage Centre : 第5図(9)24a~24d

市の北部にあるワイコウアイティ地区の郷土博物館である。オタゴ大学などの研究者の協力を得ながら、地域の有志により運営されている。1869年建設の旧ニュージーランド銀行建物を母体に、2021年に展示・収蔵機能に特化した新館が増築された(24a)。ワイコウアイティは、ダニーデンや同国の植民地時代初期に関連する重要な歴史的文化的文化財が多数残る地域である。在来のマオリ社会にヨーロッパ系(Pakeha)の捕鯨者・アザラシ(海獣)猟者が混住しはじめ、そこに参入したジョン=ジョーンズ(John JonesまたはJohnny Jones)がやがて本格的な入植地農園開発などをこの地で行った。同館は、地域の入植者子孫各家に伝来した史資料や考古資料などを合計19,000点以上所蔵し、その一部を展示している(24b・24c)。磨製石斧・石刃・骨製品(鯨骨製威儀具・鉋・釣針など)などの先史時代資料は、同館周辺のほかに南島各所からの採集・寄贈資料も多い。

そのなかにはモア狩猟期の非常に大形の有柄磨製石斧なども含まれる。また、新館建設に先立つ発掘調査で出土した19世紀後半の陶磁器・ガラス製品類も少量展示されている。

新館に隣接して同館が保存管理している旧ニュージーランド銀行建物は、1階の窓口部分(1869年完成)(24d)・2階の支配人家族居室などの内装が1927年頃の旧状を保っている。2024年現在外壁の保存修理工事が行われている。

水曜日~日曜日に無料で開館している。なお、旧ニュージーランド銀行建物内は、大人5NZ\$のガイド付きツアーでのみ見学可能である。

同館近隣には、後述する国内現存最古の農場建物であるマタナカ農場(25)や、南島南部(オタゴ・サウスランド地方)で現存最古のキリスト教教会建築といわれる1858年建設の聖ヨハネ福音伝道者教会(St John the Evangelist Church)もある。

(25) マタナカ農場 Matanaka Farm : 第5図(10)25a・25b

マタナカ農場は、ワイコウアイティ北側の見晴らしの良い海岸崖上牧草地内にある。国内現存最古の1840年代にさかのぼる農場建築で、同国を代表する重要な歴史的建築物である。実業家のジョン=ジョーンズ(John JonesまたはJohnny Jones)が南島南部各地での捕鯨権を入手する過程で、1840年からワイコウアイティでの農園開発を開始した。南島東海岸におけるヨーロッパ人の最初の組織的入植事例とされる。現在、北から順に馬小屋(Stable)(25b)、後世の木造倉庫1棟を間において、穀倉(Granary)・厠(Privy)・教室(School)の4棟の建物が現存する(25a)。馬小屋から厠までは、主軸が南北方向で、教室のみ主軸が東西方向である。いずれもオーストラリア製の建材を輸入して組み立てた1840年代の建築と推測されている。屋根は、亜鉛-錫メッキで保護されたブリキ材葺きである(Knight and Coutts 1975)。旧教室建物内前室に詳細な解説パネル展示があり、穀倉内の捕鯨舟・馬小屋内の鞍などとあわせて、建物内を見学可能である。



23a ポートチャルマース海事博物館正面



23b 同展示室



23c 同展示室



23d 同展示室



24a ワイコウアイティ海岸遺産センター正面



24b 同展示室



24c 同展示室



24d 旧ニュージーランド銀行建物内部

第5図 ダニーデン市周辺の博物館（9） ※筆者撮影



25a マタナカ農場



25b 同馬小屋内部



26 タイエリ歴史協会・博物館
 ※出典 <https://www.kotuia.org.nz/organisation-pages/org-page-3185/>
 第5図 ダニーデン市周辺の博物館(10) ※25筆者撮影



27 ストラスタイエリ歴史博物館(ミドルマーチ博物館)
 ※出典 <https://www.facebook.com/middlemarchmuseum/>

8月12日～10月1日(羊出産・育児期間)を除き
 年中無休で、無料で公開されている。

(26) タイエリ歴史協会・博物館 Taieri Historical
 Society and Museum : 第5図(10)26

今回は現地調査できなかった。アウトラム(Out-
 ram)地区のタイエリ川に面した公園内にある。
 1970年に設立されたタイエリ歴史協会・博物館に属
 する地域の有志によって運営されている。おもにア
 ウトラム地区の旧裁判所・留置所・学校・教会・蒸
 気機関車庫などの歴史的建築を移築した歴史公園と
 なっている。それらの建物内に、同地区の歴史的な
 農機具・台所用品・家具・写真・肖像画・衣類・史
 料を展示している。

入館料は大人4NZ\$で、日曜日のみ開館している。

(27) ストラスタイエリ歴史博物館(ミドルマー
 チ博物館) Strath Taieri Historical Museum (Middle-
 march Museum) : 第5図(10)27

今回は現地調査できなかった。現在は廃線となっ
 た旧オタゴ中央鉄道(Otago Central Railway)ミド
 ルマーチ駅のミドルマーチ地区にある。ストラスタ
 イエリ歴史協会に属する地域の有志によって運営さ
 れている。おもな収蔵・展示資料は、地域の歴史的
 な農機具類・台所用品・オタゴ中央鉄道関係資料・
 第一二次世界大戦関係品・各種史料類などである。
 先史時代関係では、珪質岩(silcrete)製の石器類・
 モアの骨などがある。そのほかに、ゴールドラッ
 シュ時の中国人労働者関係資料や、川底での砂金採
 取に1873年から使用された「カモノハシ(platypus)」
 と呼ばれる潜水探査器具も代表的展示資料である。

入館料は大人2NZ\$で、原則として10月～1月は
 金曜日～日曜日・2月～4月は水曜日～日曜日開館
 である。

(A) ウォールストリートモール内遺構展示

Wall Street Mall : 第5図(5)A

中心市街地にある百貨店ウォールストリートモール建設に先立つ2008年の発掘調査で、19世紀のダニーデン都市発展過程各段階の遺構が検出された。なかでも注目されたのは、地表下約130cmから発見された湿地をまたぐ丸太道 (Corduroy Causeway) 遺構である。出土遺物と層位から都市ダニーデン建設最初期の1850年代頃の遺構と考えられる (Petchey 2009)。スコットランドからの集団入植最初期・ゴールドラッシュ以前に「泥濘^{ぬかるみ}のエジンバラ (Mudedin)」と評された時期のダニーデンの状況を如実に示す非常に貴重な遺構である。そこで、出土した構成材を保存処理したうえでほぼ原位置に丸太道の一部を復元し、ウォールストリートモール屋内の小広場床面の一部を透過素材とし、その復元遺構を観察できるようにしている (A)。なお、この遺構と周辺出土遺物は、近くのおタゴ入植者博物館 (14) の「ウォールストリートの幻影 (The Ghosts of Wall Street)」と題した展示区画 (14f 右端) でかなり詳細に取り上げられている。

ウォールストリートモール営業時間中は、いつでも無料公開されている。

(B) 聖パトリック聖堂遺構展示 St Patric's Basilica : 第5図(5)B

南ダニーデン地区中心部にあるカトリック教会である。ダニーデンガス工場博物館 (15) のすぐ近隣でもある。1878年に聖パトリック教会学校が設置され、それを基に聖パトリック聖堂が1894年頃に完成した。その後も、聖堂内やその周囲建物の建設工事が続き、聖堂西南側には1896年頃に司祭館が建設された。しかし、これらの建築に耐震強度や防災上の課題があったため、改修補強や撤去が必要になった。事前に一部発掘調査を伴う建築考古学的記録保存調査が実施されることになったのである。2013年に完全撤去された司祭館は、発掘調査と史料調査の結果、多次にわたる増築過程が確認された (Cawte et al. 2018)。そこで、最初期第1段階の建築基礎遺構の

み保存整備され、現在聖堂横の旧司祭館跡緑地内に原位置で露出展示されている (B)。

一般道路に面した開放緑地部分のため、いつでも無料公開されている。

(C) モンテレイ博物館 Monterey Museum

ダニーデン市北側の北オタゴ地方カティキ (Katiki) 地区に関するすでに閉館した総合博物館である。マイケル＝トロッター (Michael Malthus Trotter) 氏が少年時代の1951年に自宅に開設した博物館であった。トロッター氏は、後年南島クライストチャーチ市のカンタベリー博物館を拠点に、アオテアロア考古学を主導した。タイプ打ち・手彩色挿絵入りの展示解説小冊子 (Trotter 1951?) も当時刊行されている。それによれば、おもに氏自身が同地区周辺で調査・採集した考古資料・歴史史料や、貝類・昆虫などの生物標本・古生物化石・岩石鉱物が展示されていたようである。ダニーデン周辺の多くの歴史系郷土博物館と異なる総合博物館型の事例であったといえる。

III. まとめ

アオテアロア国内主要都市の博物館に関して、本稿と同様の観点の調査研究が無いと厳密な比較は難しいが、ダニーデン市の博物館数または人口比に対する博物館数は、国内最多水準とみられる (註4)。また、博物館の種類別でも、最古または最古級の事例が多い。ダニーデンは、あきらかに「博物館都市」といえるほど博物館文化が根付いた都市といえる。

このように非常に多数の博物館が集中して存在する要因は、歴史的・社会的に複合的と考えられる。近代的な博物館が普及拡充した19世紀後半のイギリス・ヴィクトリア朝期に植民地化が進んだことは、重要な時代的背景といえる。しかし、これはアオテアロア全域や他のイギリス植民地系諸国に共通の要素である。地域固有の事情としては、1861年からのダニーデン・オタゴ地方のゴールドラッシュも無視

できない。急激な人口増加を受けた産業発展が、文化的な都市基盤整備を進めるうえで財政的な裏付けになったことは間違いない。しかし、これも同様に急激な産業発展・都市形成が起きたすべての場所に共通するわけではない。その点で、ダニーデン固有の歴史的背景として、入植者の基礎部分を占めたスコットランド自由教会の集団入植が重要である。特にゴールドラッシュ以降の移民増加を受けて、スコットランド系の入植者が教育・文化などの社会基盤整備を重視したことが指摘されている (Summerhayes and Hayakawa 2023)。そして、このような歴史的経緯を経て、オタゴ博物館などの初期の博物館が誕生している。

ダニーデンでは、オタゴ博物館以後も、現在まで多くの新たな博物館が誕生している。これは、ダニーデンの地域社会における文化の表現伝達手段として、世代を超えて「博物館」・「展示」という手法が広く根付いた状況を示すともいえる。そして、博物館側も変化する社会の需要に対応している。たとえば、オタゴ入植者博物館は、設立経緯として、特にスコットランド系入植者の歴史中心の博物館であった。しかし、時代の変化に対応して、ゴールドラッシュ以後の他地域からの入植者も展示対象に含めた。そして21世紀には、在来のマオリ社会についても大きく取り上げ、はじめてオタゴ地方への人類「入植者」の歴史すべてを包括する博物館になった。また、地域の歴史系郷土博物館の主要な活動で、先祖に関する家系 (genealogy) 調査依頼への協力対応が目立つ。ヨーロッパ系入植者子孫関係者の先祖や出身地に関する幅広い興味関心に応じるためである。マオリ社会では、一般的に先祖と一族の系譜 (*whakapapa*) が熟知されていることも広く知られている。あるいは、こうしたマオリ社会の文化慣習が、ヨーロッパ系入植者子孫に一定の影響や刺激を与えた可能性もあるように考えられる。

このようにダニーデンの博物館は、現代社会におけるマオリの復権に代表されるアオテアロアの多文化主義政策に対応した変化がみられる。植民地化によって深刻な被害を受けたマオリの復権は、1840年

のワイタング条約 (*Te Tiriti o Waitangi*) に基づくこの国の統合性を維持するための根本的課題である (Charters 2009)。博物館におけるマオリ文化の位置づけや展示についても、最近「脱植民地化 (decolonization)」が大きな課題になっている (村田 2020、土井 2023・2024)。近年の博物館におけるマオリ文化の展示は、地域のマオリ社会との対話や理解が不可欠である。オタゴ博物館やオタゴ入植者博物館の現在の展示でも同様の手順で改善が行われており、今後もさらに深化させていく必要がある。

そのような問題意識に基づくと、たとえば考古学・歴史学の観点からは、現在のマオリ文化の展示にまだ残された大きな課題を識別できる。それは、マオリ文化の展示では、19世紀以降の民族誌的記録や文化人類学的観点、および神話伝承的世界観が主軸となっていることである。そこに、たとえばはるかに古い12世紀頃以降の各時期の考古資料が組み込まれる例も少なくない。その逆に、19世紀以降のヨーロッパ系入植者の展示では、文化人類学的観点も故郷の神話伝承的世界観に基づく解釈もほぼ適用されていない。ヨーロッパ人が到来した植民地期以後の展示は、社会の歴史的展開が主軸・前提になっている。これは、特に一般の見学者に対して、循環・固定的な社会と躍動・変革的な社会の違いという誤解や先入観を与え続けている可能性がある。しかし、考古学の調査研究成果では、ヨーロッパ人到来以前のアオテアロアの人類社会にあった文化変遷や地域性が確認されている。現在伝わるマオリの神話伝承的世界観もまた歴史的な産物である。ヨーロッパ人到来以前のマオリ社会にも、明らかに複雑な歴史的展開過程が存在したのである。考古学的研究成果に基づくマオリ社会の「歴史の回復」も、今後の博物館展示における脱植民地化の大きな課題といえる。

これに関連して、野外博物館にも課題がある。ダニーデンにおける歴史的建築や発掘調査で検出された遺構を展示活用している例を複数紹介した。そのいずれもが、19世紀以降のヨーロッパ人到来後の事例である。ダニーデン以外の地域も含めて、原位置

の遺跡遺構を活用したマオリ文化関連の野外博物館の事例は非常に少ない。これは、アオテアロアにおける人類の長い歴史を反映していない偏った状況である。マオリ文化の考古学的遺跡の整備活用には、現在のマオリ文化における各種禁忌 (*Tapu*) への尊重対応課題がある。しかし、これも歴史的な観点から、特に埋葬遺跡を除く19世紀以前の考古学的遺跡については、いったん禁忌対象とは区別することも検討の余地があると考えられる。地域のマオリ社会との対話や理解あるいは主導のもとに、可能な範囲で遺跡遺構の復元整備活用を行うことは、視覚的にも明らかなアオテアロアの歴史の回復と脱植民地化に寄与すると考えられる。

謝辞

本稿執筆にあたり、筆者の在外研究滞在（2024年9月～2025年8月）を受け入れていただき、各種ご教示と研究上の便宜をはかっていただいたオタゴ大学 Glenn R. Summerhayes 教授をはじめ、人文学部社会科学科考古学専攻の皆さまに厚く御礼を申し上げます。また、逐一お名前を記すことができませんが、今回の調査にあたり各種懇切なご教示をいただいた各博物館関係者の皆さまにも衷心より感謝致します。

註

- 1) 本論中のマオリ語名称・地名（行政地名以外）のアルファベット表記は斜体字で表現した。
- 2) ダニーデンの博物館合計28箇所今回含めなかった関連施設が3件ある。20世紀最初の歴史建築フレッチャー住宅 (Fletcher House: 727 Portobello Road, Broad Bay, Dunedin 9014) は、開館状況と展示内容の詳細を未確認である。また、スパイツ醸造所 (Speight's Brewery: 200 Rattray Street, Central Dunedin, Dunedin 9016) は、1876年からのビール製造に関する歴史展示を有料のガイド付きツアー限定で公開しているが、試飲体験が中心で営利色が強い。大麻博物館 (*Whakamana The Cannabis Museum of Aotearoa*: 192 Princes Street, Central Dunedin, Dunedin 9016) についても、開館実態や展示状況が不明確である。
- 3) オタゴ博物館が1960～1970年代に出版した研究紀要・研究報告は、以下のオタゴ博物館 HP から閲覧可能である。
<https://otagomuseum.nz/collections/publications/>
- 4) 比較的最近出版された国内150箇所以上の博物館を紹介

した書籍 (Dench 2010) を基準に、主要都市中心市街地の博物館数と市域の全人口を比較すると、オークランド市5件 (人口約153万人)、ウェリントン市8件 (人口約42万人)、ダニーデン市5件 (人口約13万人) となる。ダニーデン市は、人口比で明らかに博物館数が多い傾向が分かる。

引用・参考文献

- Anderson, Atholl 1983 *When All the Moa-Ovens Grew Cold: Nine Centuries of Changing Fortune for the Southern Maori*, Otago Heritage Books (Dunedin)
- Anderson, Atholl, Brian Allingham and Ian Smith eds. 1996 *Shag River Mouth: The Archaeology of an Early Southern Maori Village*, The Australian National University (Canberra)
- Baillie, Louisa Jm. and Christopher L. Smith 2018 The Otago Medical School Anatomy Museum Collection: Taonga for learning in the 21st Century, *The New Zealand Medical Journal* Vol. 131 (1473): pp. 72-77, New Zealand Medical Association (Wellington)
- Barker, M. and N. Barker 2019 *Larnach Castle: New Zealand's Castle in Pictures*, Larnach Castle Ltd. (Dunedin)
- Brailsford, Barry 1997 *The Tattooed Land*, 2nd ed., Stoneprint Press (Hamilton)
- Cawte, Sheryl, Eva Forster-Garbutt, Naomi Woods, Jeremy Moyle and Peter Mitchell 2018 *Serving the Community: St Patrick's Church Complex*, New Zealand Heritage Properties Ltd (Dunedin)
- Charters, Claire 2009 Do Maori Rights Racially Discriminate Against Non Maori?, *Victoria University of Wellington Law Review* Vol. 40 (3): pp. 649-668, Victoria University of Wellington (Wellington) [角田猛之訳 2018「マオリの権利はマオリ以外の人びとを民族的に差別しているのか?」、『ノモス (Nomos)』42号: 1-25頁、関西大学法学研究所 (大阪)]
- Church, Ian 2019 *Salutary Punishment: Taranaki Maori Prisoners in Dunedin, 1869-72 and 1879-81*, The Patea Historical Society (Patea)
- Dench, Alison 2010 *Museums to Visit in New Zealand: Over 150 Outstanding Collections Open to the Public*, New Holland Publishers (Auckland)
- Dunedin Gasworks Museum 200-? *The Engine House, Dunedin Gasworks Museum: A Guide to the Museum's History & Displays*, The Engine House (Dunedin)
- Dunlop, Eric 2002 *The story of the Dunedin Botanic Garden: New Zealand's first*, Friends of the Dunedin Botanic Garden Inc. (Dunedin)
- Dunn, Laurel and Brenda Cameron 2023 *Otago Peninsula: Then and Now*, Otago Peninsula Museum and Historical Society (Dunedin)
- Entwisle, Peter 1984 *William Mathew Hodgkins & His Circle: An Exhibition to Mark the Centennial of the Dunedin Public Art Gallery, October 1984*, Dunedin Public Art Gallery (Dunedin)
- Entwisle, Peter 1990 *Treasures of the Dunedin Public Art Gallery*, Dunedin Public Art Gallery (Dunedin)
- Goodall, Maarire and George Griffiths 1980 *Maori Dunedin*, Otago Heritage Books (Dunedin)
- Hamel, Jill 2001 *The Archaeology of Otago*, Department of Conservation (Wellington)
- Hinds, Elizabeth 1986 *Dunedin Gasworks: A Plan for the Preser-*

- vation and Use as a Tourist and Information Centre on the History of Gas and NZ's Energy Future, Gasworks Preservation Team (Dunedin)
- Hinds, Elizabeth ed. 1987 *Otago Early Settlers Museum*, Otago Early Settlers Association (Dunedin)
- Johnson, David 1993 *Dunedin: A Pictorial History*, Canterbury University Press (Christchurch)
- Keenan, Danny 2015 *Te Whiti o Rongomai and the Resistance of Parihaka*, Huia Publishers (Wellington)
- Knight, Hardwicke and Peter Coutts 1975 *Matanaka: Otago's First Farm*, John McIndoe (Dunedin)
- Longstaff, Jenny et al. eds. 2004 *Oveston Historic Home*, Theomin Gallery Management Committee (Dunedin)
- Martin, Bill 1998 *Dunedin Gaol: A Community Prison Since 1851*, Bill Martin (Dunedin)
- McLean, Gavin 2003 *Dunedin: History, Heritage and Wildlife*, University of Otago Press (Dunedin)
- McLintock, A. H. 1949 *The History of Otago: The Origins and Growth of a Wakefield Class Settlement*, Otago Centennial Historical Publications (Dunedin)
- Neuman, Fieke 1993 Pots and Pieces: The Anatomy Museum of the Otago Medical School and how it came to be, *New Zealand Museums Journal* 23 (1): pp. 17-22, Art Galleries and Museums Association of New Zealand, Massey University (Palmerston North)
- Notman, Robyn and Lynda Cullen 2009 *Beloved: Works from the Dunedin Public Art Gallery*, Dunedin Public Art Gallery (Dunedin)
- Olssen, Erik 1984 *A History of Otago*, John McIndoe Limited (Dunedin)
- Otago Museum ed. 2014 *Gifts and Legacies at the Otago Museum*, Otago Museum Trust Board (Dunedin)
- Otago Peninsula Museum and Historical Society ed. 2023 *Portobello: A Brief History*, revised ed., Otago Peninsula Museum and Historical Society (Dunedin)
- Peat, Neville 2002 *Southern Land, Southern People*, University of Otago Press (Dunedin)
- Peat, Neville 2004 *Otago Museum: Collected Stories*, Otago Museum (Dunedin)
- Petchey, P. G. 2009 *The Dunedin Causeway: Archaeological Investigations at the Wall Street Mall Site George Street, Dunedin (Archaeological site I44/469)*, Southern Archaeology Ltd. (Dunedin)
- Petchey, Peter and Sean Brosnahan 2016 Finding Meaning and Identity in New Zealand Buildings Archaeology: The Example of 'Parihaka' House, Dunedin, *Journal of Pacific Archaeology* Vol. 7 No. 2: pp. 26-42, New Zealand Archaeological Association (Dunedin)
- Read, Peter and Sean Brosnahan 2019 *Toitū Otago Settlers Museum: Our Place, Our People, Our Stories*, Toitū Otago Settlers Museum (Dunedin)
- Salmond, Arthur L. 1983 *The First Church of Otago, and How it Got There*, Otago Heritage Books (Dunedin)
- Shaw, Peter 1992 *The Fletcher House, Broad Bay, Otago Peninsula, New Zealand*, Fletcher Challenge Limited (Auckland)
- Skinner, H. D. 1959 Murdering Beach: Collecting and Excavating: The First Phase 1850-1950, *Journal of the Polynesian Society* Vol. 68 (3): pp. 218-238 · Plate I-X, The Polynesian Society (Wellington)
- Summerhayes, Glenn R. and Rieko Hayakawa 2023 「Scottish Traditions in Otago Education」、『ニュージールランド研究』: 1-6頁、ニュージールランド学会 (京都)
- Trotter, M. Michael 1951? *Monterey Museum, Katiki, N. Otago*, Monterey Museum (Katiki)
- Wigglesworth, Karen 2022 *Take Me with You too!: A Self-Drive Guide to Dunedin's Engineering Heritage*, Cliff Creatives (Whanganui)
- 印東道子 2008 「絶滅した巨大な鳥モア」、『ニュージールランドを知るための63章』: 49-53頁、明石書店 (東京)
- 小樽市博物館編 2002 『豊饒の島の物語: ニュージールランド南島の自然と文化』、小樽市博物館 (北海道)
- 沢井淳弘 2003 『ニュージールランド植民の歴史: イギリス帝国史の一環として』、昭和堂 (京都)
- 土井冬樹 2023 「コロニアリティの発見と謝罪・負の遺産化・脱植民地化: 博物館の実践と舞踊の流用に対する先住民マオリの主張」、『インターセクション』 1号: 5-23頁、同志社大学都市共生研究センター (京都)
- 土井冬樹 2024 「マオリと博物館のパートナーシップ: 脱植民地化を目指すニュージールランドの先住民と博物館」、『文化人類学』 89巻 1号: 72-90頁、日本文化人類学会 (東京)
- 向井考史 2015 「パリハカ: 非暴力・不服従抵抗運動の地」、『神学研究』 62号: 121-130頁、関西学院大学神学部・神学研究科 (兵庫)
- 村田麻里子 2020 「オークランド戦争記念博物館にみるニュージールランドの多文化主義」、『関西大学社会学部紀要』 52巻 1号: 93-117頁、関西大学 (大阪)

伊藤 慎二 (いとう しんじ) 国際文化学部教授

南島原市深江町のいわゆる 「かくれキリシタン」墓標についての検討

馬場 紀聡

1. 本稿の目的と課題

長崎県の南東部に位置する島原半島は、キリシタン大名有馬晴信の治世や島原・天草一揆など、その歴史的背景からキリシタンにまつわる資料や伝承が多く存在する。その中には潜伏期のキリシタン資料だとされる例もあるが、近世墓標の分類や変遷など、考古学的検証が行われた例は存在しない。そこで、特に「かくれキリシタン」墓とされた墓標の調査・検討を行いたい。

長崎県におけるキリシタン墓碑の調査研究は、1902（明治35）年の森豊造による墓碑の発見に始まる。森は、郷土誌編纂委員に嘱託されたことを契機として、1917（大正6）年から本格的な調査を開始する。以降、1940（昭和15）年までに80基近くの墓碑が発見された。森の調査成果を基に、片岡弥吉は68基の墓碑の写真・所在地・形状・大きさ・銘文・分布状況など詳細な情報を集積した。また、森の分類方法に基づいて、墓碑の形状を「蒲鉾型・箱型・庵型・丸庵型・平庵型・平型・蒲型・自然石立石型・自然石伏碑型・石祠型」の10種類に分類している（片岡 1942：110～117頁）。この10種類中、地面に対して、長軸を平行にして、伏した状態で置くタイプの墓碑を、キリシタン墓碑の決定原則としている。この形状の墓碑は、日本にこれまで存在したことがなく、キリシタンが死者を埋葬するとき、寝棺土葬を用いたことに由来する。日本の伏状タイプの墓碑はこの寝棺を象った形式である。その一般的なものが平型であり、特に意匠をこらし、あるいは寝棺に近似したものが「庵型（丸庵型・平庵型含む）・蒲鉾型・箱型」などであったと推測している（片岡

1942：122頁）。さらに、片岡は、日本のキリシタン墓の源流を訪ねてヨーロッパへ渡り、調査成果をまとめている。特に、地面に伏した状態で置かれる墓碑の起源は、仏教式石塔とは全く異質の墓碑民俗を発展させたとし、その源流をローマにあるとしている。また、長崎県下の墓碑に対して行った分類を10種類から15種類に改定している（片岡 1976：126～133頁）。

その後、大石一久らによって長崎県を含む全国のキリシタン墓碑が『日本キリシタン墓碑総覧』として体系的に集成された（大石編 2012）。大石は、研究者によって捉え方がまちまちであったキリシタン墓碑の定義づけを行った。また、これまでの研究で提示されていた分類項目を踏まえて、再分類し、名称や語句の統一なども行った。大石はまず、立碑と伏碑に大別している。立碑は「尖頭・圭頭形・円頭形・半円形・自然石立碑」の5種類に細分している。伏碑は「柱状伏碑」と「板状伏碑」の2種類に分け、さらに柱状伏碑は、「半円柱形（西九州型）・半円柱形（関西・京都型）・半円柱形（関西・摂津型）・方柱形・五角柱形」の5種類、板状伏碑は、「切妻形・扁平形・平形」の3種類に細分している（大石 2012：10～12頁）。さらに、田中裕介は分類した各形式を年代順に並べ、第1期：墓碑の初現期1549～1587年（布教開始期から豊臣秀吉によるパテレン追放令まで）・第2期：空白期1587～1600年（豊臣政権による迫害期）・第3期：墓碑の最盛期1601～1614年（徳川家康政権による黙認期）・第4期：墓碑の衰退期1618～1622年前後（禁教令以後）の4期に分け、変遷をまとめている（田中 2012：402～404頁）。

また、今野春樹は、キリシタン墓碑を含む考古学または考古学に関連があると考えられる遺物や遺跡に関する研究に限定して、西日本地域・九州地域・東日本地域の地域別にキリシタン文化研究の展開をまとめている。キリシタン文化のさらなる理解のためには、キリシタンに関連する遺跡や遺物だけでなく、キリスト教の典礼・宣教師達の動向・当時の世相と布教などの歴史的背景、その他、周辺の様々な事象を知る必要があると述べ、その参考となる著作や論考について紹介している（今野 2003：24～32頁）。

その一方で、郷土史家や地元の研究会によっても、キリシタン墓の探索が行われた（吉田ほか編 1996）。しかし、それらの探索の中で「かくれキリシタン」墓とされた墓標などが、近世墓標として考古学的に検証された例は存在しない。

中・近世墓標の考古学的研究は、その嚆矢として坪井良平の「山城木津惣墓墓標の研究」が挙げられる。坪井は墓標を考古学の資料として捉え、考古学的観点からの近世墓標研究の可能性を説いた（坪井 1939）。坪井が近世墓標研究を考古学の研究対象として位置づけて以降、考古学的方法による墓標研究の必要性が説かれる。そして、実際に調査し報告される例がでてくる。こうした様々な観点からの報告・研究をまとめ、今後の研究の必要性・方向性・指針を示したのが坂詰秀一と谷川章雄である（三好 2021：19頁）。坂詰は1981年の調査研究で墓標を「塔形」と「非塔形」に分類した。「非塔形」には、銘文を刻んでいる面の数により「一観面」・「多観面」という分類を取り入れた（坂詰 1981：323～332頁）。谷川は江戸市中およびその周辺の墓標について、頭部と塔身の形態に着目し、A類：塔形のもの・B類：頭部が三角形のもの・C類：舟形光背に仏像を半肉彫りにしたもの・D類：頭部がかまぼこ状を呈するもの・E類：塔身が方柱形のもの・F類：笠付方柱形のもの・G類：その他の7種類に大別し、それをさらに細分している（谷川 1988：26～27頁）。

坂詰らが提示した研究の必要性・方向性を受けて以降、近世墓標の調査研究が本格的に行われるようになる。自治体が総合的な歴史調査の一環で墓標を

対象にする事例や、発掘調査に関連して墓標調査も行われる事例が顕著になる。こうした研究の多様化や拡がりを受けて、池上悟は全国各地で行われた既往の調査研究を概観し、提示されている形態分類を踏まえて、各地で汎用できる形態分類を提示した（三好 2021：21頁）。池上はまず墓塔・墓標・その他の3種類に大別し、さらに墓塔は5種類、墓標は14種類、その他は4種類に細分している（池上 2003：17～20頁）。白石太一郎・村木二郎は、国立歴史民俗博物館の共同研究として多くの研究者とともに、奈良県内で墓標の悉皆調査を行い、様々な観点から論考をまとめた（白石・村木 2004）。多様な観点からの取り組みを提起したことは、以降の近世墓標研究の在り方を大きく変容させた。さらに池上、白石らの研究により形態分類がある程度統一され、研究方法の入り口が整理された（三好 2021：23～24頁）。

長崎県島原半島でも近世墓の調査として、島原市教育委員会が実施した『島原藩主深溝松平家墓所調査報告』（宇土ほか編 2019）や、諫早市が実施したジブの墓・ビッチの墓・千々和ミゲル墓所推定地・山川内遺跡などの、キリシタン関連遺跡等の範囲確認調査及び関連調査の成果がまとめられた『諫早市キリシタン関連遺跡等調査報告書』（野澤ほか編 2024）などがある。しかし、江戸時代の庶民層の墓標調査事例は少ない。

以上の研究状況を踏まえて、本稿ではまず、調査対象墓地である南島原市深江町の妙行寺墓地・井出口（出口）墓地（図1）の全近世墓標の紀年銘と形態的特徴の調査を行った。その上で、「かくれキリシタン」墓とされた墓標について、近世墓標として考古学的に検討していきたい。本稿で検討対象とする墓標は、妙行寺墓地内にある例と、井出口（出口）墓地内にある例である。妙行寺の例は、吉田安弘らが、『島原半島の切支丹文化：かくれ切支丹の遺物と遺跡』で「T十字塚墓」と紹介している（吉田ほか編 1996：14頁）。井出口（出口）の例は、「十字は土中に隠して立っていた」と紹介している（吉田ほか編 1996：16頁）。「かくれキリシタン」墓とされるこれらの墓標が、近世墓標の中でどう位置づけられるのか、また、本当に「かくれキリシタン」墓と断定できるのか検討する¹。



図1 南島原市深江町の妙行寺・井出口（出口）墓地の位置
 ※国土地理院地図を一部改変して作成

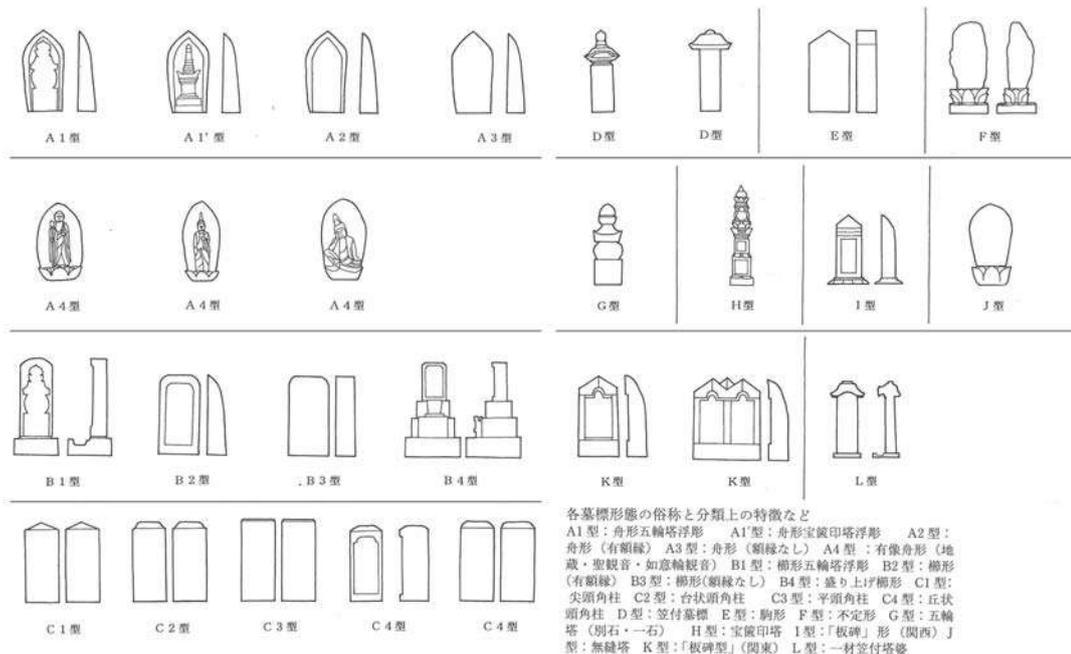


図2 朽木量による近世墓標型式分類 ※朽木 2004：図6を改変

2. 調査結果

調査の結果、妙行寺では84基、井出口（出口）では58基の近世墓標が確認できた。改葬によるものと思われるが、それらは4～10基ほどでまとめて建てられている場合が多かった。

なお、型式分類は朽木量（2004）（図2）にしたが

う。朽木は、坪井良平による「山城木津惣墓標の研究」（1939）を参考にA型：「舟形」・B型：「楕形」・C型：「角柱形」・D型：笠付墓標・E型：「駒形」・F型：「不定形」・G型：五輪塔・H型：宝篋印塔・I型：「板碑」形（関西）・J型：無縫塔・K型：「板碑」形（関東）・L型：一材笠付塔婆・

M型：その他とする上記の13種類に大別し、それらをさらに細分している（朽木 2004：65～67頁）²。

1) 妙行寺墓地

妙行寺は、1658（万治元）年に創建された浄土真宗本願寺派の寺院である。1648（慶安元）年3月5日に僧開然が開基した。本尊は阿弥陀如来である。本堂の敷地は1785m²、墓地は1390m²である。もとは、東本願寺派であったが、1756（宝暦6）年7月23日、第5世住職正好の時に西本願寺派に転属した。昔は壮大雄麗な堂宇、堂塔、楼門などがあり、それらは島原・天草一揆時に焼失したと伝えられるが年代的に疑問がある。現在は「モダンな堂」が完成している（上田ほか編 1971：268～269頁）。島原・天草一揆のあと、乱後処理を任された高力忠房らが、民心の安定策として寺社仏閣の復興・創建を行っており（上田ほか編 1971：227～228頁）、妙行寺もこの政策の一環として建てられた可能性がある。

「かくれキリシタン」墓標（写真1）は「T字型塚墓」（吉田ほか編 1996：14頁）と紹介されている。本例は最大高43.0cm・最大幅44.0cm・奥行き43.0cmと、高さ・横幅・奥行きに差のない正方形に近い形状を呈している。また、正面には「明和七寅天 釋□仙位 八月十六日」と刻まれている。墓標頭部が屋根状の形態になっており、大棟に相当する部分から垂直に分岐して、前方に向かってのびる棟状の表現がある。そのため上面観が「T字」状になる（写真2）。吉田安弘らは、これを十字架の一種としてみなしたと考えられる。妙行寺の一般的な近世墓標の中ではやや異なる形態であるが、法名や銘文配列、全体としての彫り窪みは一般的な近世墓標と変わらない。



写真1 「T十字塚墓」（筆者撮影）



写真2 上面観に「T字」（筆者撮影）

2) 井出口（出口）墓地

井出口（出口）墓地は、共同墓地であり、宣教時代から禁教時代前期（五野井 2021：22～56頁）頃のキリシタン墓碑があることでも知られる（大石編 2012：153～163頁）。

「かくれキリシタン」墓標は「十字は土中に隠して立っていた」（吉田ほか編 1996：16頁）と紹介されている。たしかに、墓標下部（基礎部）に縦8.5cm、横9.5cmの十字状の記号が陰刻されている（写真3）。本例は最大高77.0cm・最大幅27.3cm・奥行き23.5cmである。宝暦3（1753）年銘で、正面に「宝暦三巳天 □□釈□順位 四月十四日」と刻まれている。型式は、朽木分類のE型：駒型（形）に該当する。十字状の記号以外は一般的な近世墓標の外観である。



写真3 「かくれキリシタン」墓とされた墓標(左)と十字状の記号拡大(右)(筆者撮影)

本墓地の角柱型は延享4(1747)年に初出するが、その最古例の大きさは、最大高61.0cm・最大幅19.5cm・奥行き17.5cmであり、妙行寺の他の角柱型(背高平均65.9cm・幅平均30.5cm・奥行き平均28.7cm)に比べ、幅と奥行きが11.0cm程短い。

また、妙行寺では朽木分類のD型：笠付墓標を13基確認変遷をみることができた(図3)。年代順に並べ形態的特徴をみていくと、時代が下るにつれて笠の反り方が大きくなる。最終的には笠の先端が丸まり蕨手のようになる例がでてくる。明和8(1771)年銘の墓標以降、笠に唐破風のような装飾を施す例が優勢になる。紀年銘や法名などの銘文については、正面だけでなく、右側面か左側面またはその両方に刻む「多観面」で、1基につき2人以上の法名を刻む例がほとんどであった。

妙行寺では、楕型・角柱型・駒型・花燈型・笠付以外の型式が6つ確認できた(図4-1~8・写真4)。1つ目は正面観が長形状の墓標である。7基確認できた。ただ、そのうち3基はほとんどが土に埋まっており、紀年銘や法名などは確認できなかった。それら以外の4基(図4-1~4)は、延享4(1747)年銘(図4-1)、寛延2(1749)年銘(図4-2)、明和6(1769)年銘(図4-3)、安永3(1774)年銘(図4-4)である。4基の大きさは、図4-1は最大高40.0cm・最大幅23.0cm・奥行き17.8cm、図4-2は最大高50.5cm・最大幅

3. 両墓地における近世墓標の型式

1) 妙行寺

妙行寺でみられた主な近世墓標の形態は、朽木分類におけるB型：楕型(形)・C型：角柱型(形)・E型：駒型(形)である。その他に、墓標頭部が、花燈窓の頭部に類似した墓標を識別した(以下、花燈型と呼ぶ)。これらの型式については、第4項「両墓地における近世墓標の変遷」で詳しく述べる。

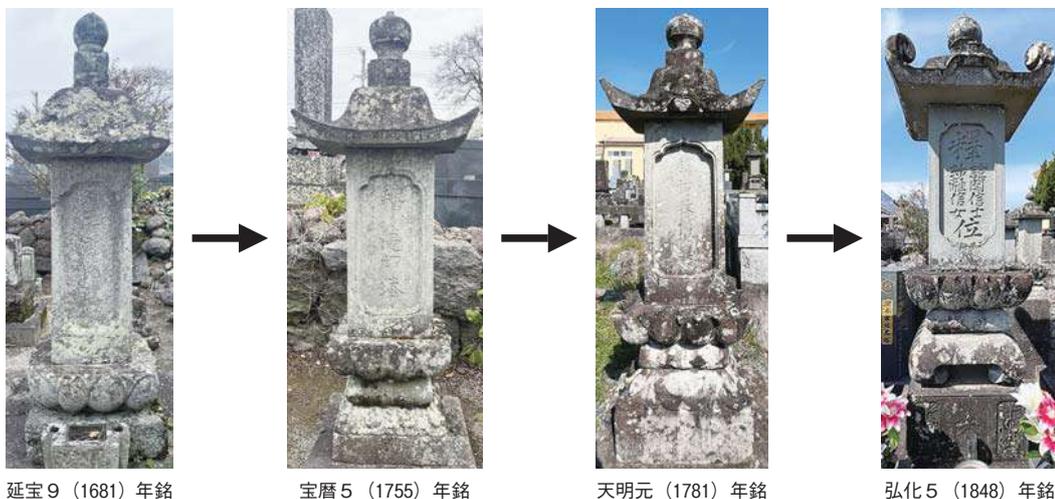


図3 妙行寺墓地の笠付墓標の型式組成変遷



図4 妙行寺墓地の櫛型・角柱型・駒型・花燈型・笠付以外の墓標型式例

27.0cm・奥行き18.3cm、図4-3は最大高46.8cm・最大幅23.5cm・奥行き18.0cm、図4-4は最大高36.7cm・最大幅27.0cm・奥行き23.5cmであり、現代の一般的な直方体の竿石に比べると背が低い。寛延2（1749）年銘の例（図4-2）のみ、墓標頭部の角が削られている。2つ目は舟型墓標である（図4-5）。墓標頭部については、朽木分類のA3型：舟型（形）（額縁なし）に相当する。2基確認できたが、そのうちの1基は、風化より全体的に状態が悪く、紀年銘や法名などは確認できなかった。図4-5は、文化5（1808）年銘で、「早世」と刻まれていることから、子供の墓標だと考えられる。3つ目は墓標頭部が山状の墓標である（図4-6）。明和5（1768）年銘で、「溪道童子」と刻まれていることから、子供の墓標と考えられる。墓標頭部は駒型や花燈型ほど三角形状ではなく、櫛型ほど緩やかな弧を描いていない。紀年銘からも、この墓標は、櫛型への移行期にあたる例だと考えられる。4つ目は円柱形状の墓標である（図4-7）。宝暦3（1753）年銘で、直径9.0cm・高さ35.8cmと背が低い。5つ目は自然石である（図4-8）。宝

永8（1711）年銘で、最大高約90.0cm・最大幅約120.0cm・奥行き約85.0cmであり、幅と奥行きは、本墓地の近世墓標の中で最も大きい。正面に「宝永八〇稔 濃（法の異体字）名釋法圓阿惟 三月朔日」と刻まれている。銘文が刻まれている正面のみ整形され、それ以外は特に加工されていない。6つ目は、長屋のような形をした墓標である（写真4）。大棟に相当する部分に対して、平行な位置関係にあたる片側壁面に「南無阿弥陀仏」と刻まれている。この例については第5項「「かくれキリシタン」墓標の検討」で詳しく述べる。

2) 井出口（出口）

井出口（出口）でみられた主な近世墓標の形態は、妙行寺と同様、櫛型・角柱型・駒型・花燈型であった。こちらも第4項「両墓地における近世墓標の変遷」で詳しく述べる。

笠付墓標については、嘉永7（1854）年銘、安政2（1855）年銘の2基しか確認できず、年代も近かったため、型式組成変遷を確認することはできなかった。法名は、1基につき2人以上刻む。2基と



1. 寛延2 (1749) 年銘 2. 安政3 (1856) 年銘 3. 明和8 (1771) 年銘 4. 宝暦5 (1755) 年銘 5. 寛保3 (1743) 年銘

図5 井出口（出口）墓地の櫛型・角柱型・駒型・花燈型・笠付以外の墓標型式例

も「多観面」であった。

井出口（出口）でも、櫛型・角柱型・駒型・花燈型・笠付以外の型式が6つ確認できた（図5-1～5・写真5）。1つ目は正面観が長方形の墓標である（図5-1）。1基確認した。寛延2（1749）年銘で、最大高35.5cm・最大幅23.5cm・奥行き15.8cmであり、妙行寺の例（図4-1～4）と類似する。2つ目は舟型墓標である（図5-2）。1基確認した。安政3（1856）年銘であり、妙行寺の例（図4-5）と類似する。3つ目は墓標頭部が山状の墓標である（図5-3）。明和8（1771）年銘で、妙行寺の例（図4-6）と類似する。本例も、櫛型への移行期にあたる墓標だと考えられる。4つ目は円柱形状の墓標である（図5-4）。宝暦5（1755）年銘で、妙行寺の例（図4-7）と類似する。風化が激しく法名などは確認できなかった。5つ目は六角柱形状の墓標である（図5-5）。寛保3（1743）年銘であり、墓標頭部については、朽木分類のC1型：尖頭角柱に類似する。スペースの問題からか紀年銘の下に法名が刻まれており、銘文配列も、同墓地内の他の近世墓標と比べ特異である。6つ目は、長屋のような形をした墓標である（写真5）。「南无（無の異体字）阿弥陀仏」と刻まれており、妙行寺の例（写真4）と類似する。この例についても第5項「かくれキリシタン」墓標の検討」で詳しく述べる。

4. 両墓地における近世墓標の変遷

まず、両墓地の墓標型式ごとの基数を年代順に示した（表1・2）。また、両墓地でみられた主な近世墓標の形態は、朽木分類におけるB型：櫛型（形）・C型：角柱型（形）・E型：駒型（形）、そして花燈型である。

妙行寺は元禄10（1697）年銘、井出口（出口）は元禄9（1696）年銘の駒型から始まる。その後、妙行寺では、櫛型が1730（享保15）年、花燈型が1740（元文5）年、角柱型が1747（延享4）年に初出する。井出口（出口）では、花燈型が1706（宝永3）年、櫛型が1736～1741（元文年間）、角柱型が1820（文政3）年に初出する。両墓地ともに1771～1790年頃から櫛型が卓越するようになる（図6）。それだけでなく、1770年以前は、墓標型式や大きさが不統一であったのに対し、1771年以降は、ほぼ同等の大きさの櫛型や角柱型に統一されていく（表1・2）。谷川章雄は、櫛型が発生する以前には、異なる特徴の墓標が盛行しており、一定の地域性があったとしている。しかし、櫛型発生以降は、全国的に墓標型式が斉一化してくることを指摘している（谷川1988：29頁）。櫛型は18世紀前半～中頃に出現し普遍化（三好 2021：220頁）、また、角柱型は18世紀前半頃に発生し19世紀以降に全国的に普及する（三好 2021：216頁）とあるが、両墓地ともに全国的な動向に共通することを明らかにできた。

紀年銘や法名などの銘文については、両墓地とも

表1 妙行寺・型式別変遷

	駒型	花燈型	櫛型	角柱型	笠付	その他	合計
1710以前	2				1		3
1711～1730	2		1		1	1 (自然石)	5
1731～1750		2	1	1	1	2 (正面観が長方形状)	7
1751～1770		1		1	1	1 (写真1) 1 (墓標頭部が山状) 1 (正面観が長方形状) 1 (円柱形状)	7
1771～1790		1	6	1	2	1 (正面観が長方形状)	11
1791～1810			7	3	2	1 (舟型)	13
1811～1830			4	4	1		9
1831～1850			2	4	2		8
1851～1870			1	2	1		4
合計	4	4	22	16	12	9	67

表2 井出口(出口)・型式別変遷

	駒型	花燈型	櫛型	角柱型	笠付	その他	合計
1710以前	1	1					2
1711～1730	2	1					3
1731～1750	3	1	1			1 (正面観が長方形状) 1 (六角柱形状)	7
1751～1770	6					1 (円柱形状)	7
1771～1790	1		5			1 (墓標頭部が山状)	7
1791～1810			6				6
1811～1830			3	2			5
1831～1850			2	1			3
1851～1870			2		2	1 (舟型)	5
合計	13	3	19	3	2	5	45

に、駒型は全て、正面にのみ刻む「一観面」であった。櫛型は、妙行寺は寛政6(1794)年銘、井出口(出口)は寛政2(1790)年銘の墓標以降、「多観面」の例が複数確認できる。花燈型は、両墓地ともに、ほとんどが「一観面」であったが、妙行寺の安永5(1776)年銘の例のみ「多観面」であった。角柱型は両墓地ともに全て「多面観」であった。「一観面」から「多観面」への変遷時期は18世紀中頃(三好 2021:219頁)とあるが、こちらも全国的な動向に共通することを明らかにできた。

ちなみに、寛政4(1792)年銘の墓標が妙行寺で5基(櫛型4基・笠付1基)、井出口(出口)で2基(櫛型2基)の計7基確認できた。1792(寛政4)年は「島原大變肥後迷惑」が起きた年であり、それにより多くの死者が出た。「島原大變肥後迷惑」とは、

雲仙普賢岳の火山性地震と噴火活動、それによる眉山の大崩壊という日本の火山災害史上最大の犠牲者を出したといわれる大災害である。この大災害による島原城下と有明海に面した島原半島東岸域側の死者は約10000人、有明海を挟んだ対岸の肥後(熊本本土・天草諸島)側の死者は約5000人の、計15000人にのぼったと記録されている(山本 2013:187～188頁)。寛政4(1792)年銘の墓標が7基もあることは、この大災害により多数の犠牲者がでたことと関係している可能性がある。

5. 「かくれキリシタン」墓標の検討

1) 「T十字型塚墓」

写真1(妙行寺の例)は、一般的な近世墓標とや

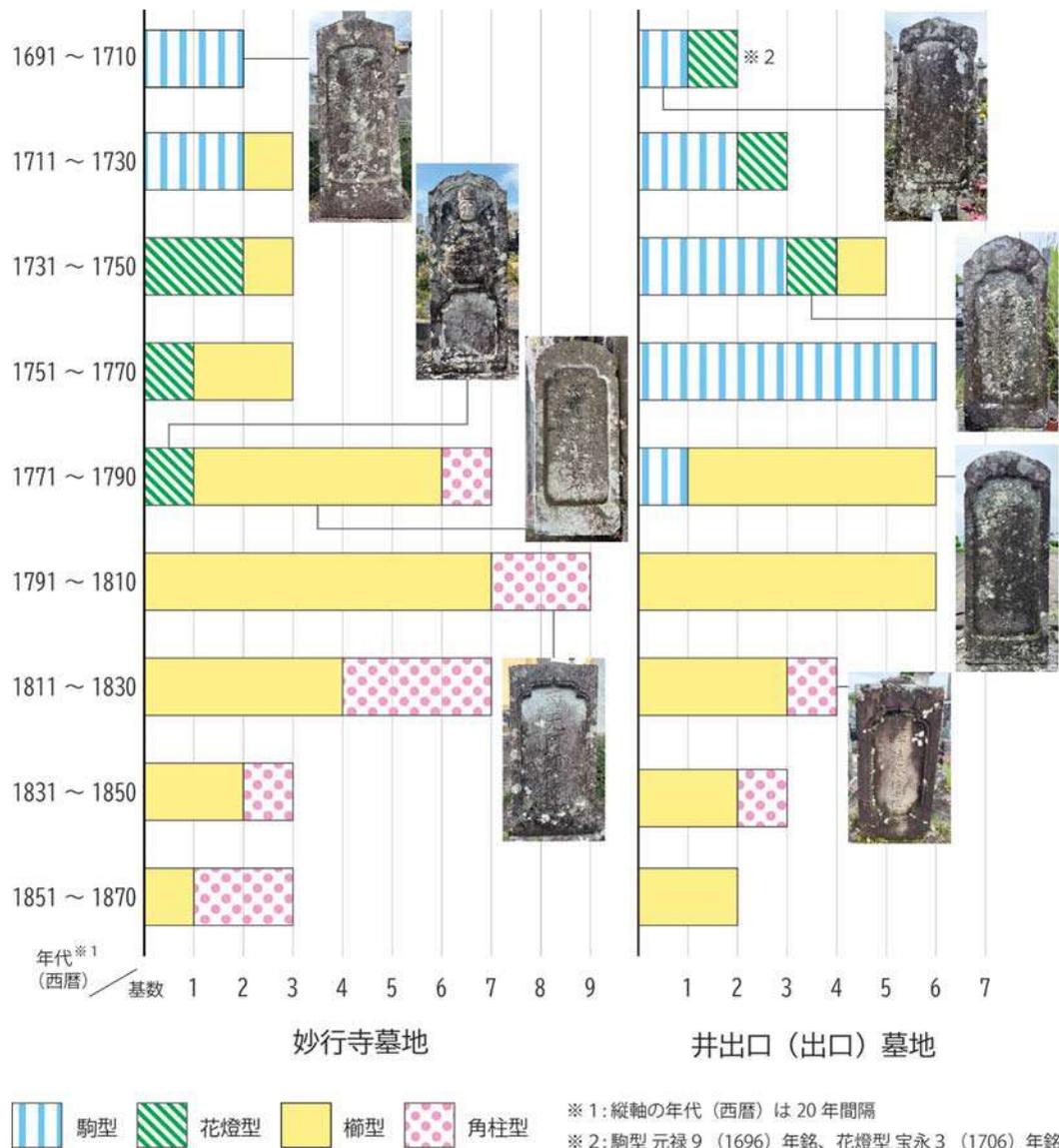


図6 妙行寺・井出口(出口)墓地の駒型・花燈型・櫛型・角柱型の型式組成変遷

や異なる形態だが、一方でおおよそ類似する例が、妙行寺(写真4)と井出口(出口)(写真5)で1基ずつみられる。

写真4は最大高38.0cm・最大幅38.0cm・奥行き46.0cmで、大棟に相当する部分に対して、平行な位置関係にあたる片側壁面に「南無阿弥陀仏」と刻まれている。写真5は最大高39.0cm・最大幅43.5cm・奥行き47.0cmで、こちらも大棟に相当する部分に対して、平行な位置関係にあたる片側壁面に「南無阿弥陀仏」と刻まれている。3基の大きさを比較すると、写真1と写真4・5は最大高(平均40.0cm)・最大幅(平均42.0cm)・奥行き(平均45.0cm)ともに、それぞれ数cm程度の違いである

ことが判明した。さらに、大棟に相当する部分に対して、平行な位置関係にあたる片側壁面に銘文が刻まれるという点で、3基は共通する。また、墓標頭部の屋根状の形態から、寺院建築を意識している可能性がある。写真1のみ、大棟に相当する部分から垂直に分岐して、前方に向かってのびる棟状の表現があるが、これは恐らく向拝こうはいを現していると考えられる。

写真1は、一見すると、図6の変遷に位置づけられないようにみえる。しかし、正面観頭部は、駒型や花燈型と同様に、三角形状になる点で共通する。また、妙行寺の1771年以前の墓標は、不統一な型式や大きさである傾向だが(表1・2)、その点でも共

通する。

ところで、写真1は、高さ・横幅・奥行きが同程度で、上面観が正方形状であるが、その点に関しても九州や大阪府で、おおよそ類似する例がみられる。櫻井成昭によると、大分県豊後高田市香々地かかぢの宗永墓地や、福岡県北九州市小倉北区の永照寺（写

真6）などでは、真宗門徒の墓標として、方柱状で頭部が四角錐または丸みを帯びた升のような低い形の墓標が存在する（櫻井 2004：40頁）という。宗永墓地は1650年代（櫻井 2004：40頁）、永照寺は17世紀末（柴尾編 1994：141頁）で、どちらも櫛型より先行する。



写真4 写真1に類似する墓標（妙行寺）
（筆者撮影）



写真5 写真1に類似する墓標
（井出口 [出口]）（筆者撮影）



写真6 写真1に類似する墓標（永照寺）（筆者撮影）

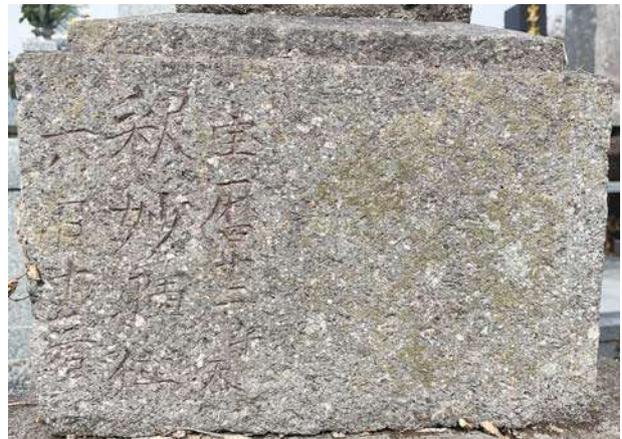


写真7 写真1に類似する墓標（妙行寺）（筆者撮影）



写真8 写真1に類似する墓標（井出口 [出口]）（筆者撮影）

また、大阪府泉佐野市野出町にある野出墓地には、北前船で財をなした豪商の食野家・唐金家の墓所がある。野出墓地は面積約7300m²、墓石が5000基以上ある大規模な墓地であり、その一角に食野家・唐金家の墓石約30基が、口の字に整然と並んでいる（泉佐野市役所 2022:26頁）。両家とも浄土真宗の信徒であり、その墓標は墓標頭部がドーム状や兜形で、高さ・横幅・奥行きに差のない正方形に近い形状を呈している（三好 2021:197頁）。

妙行寺（写真7）や井出口（出口）（写真8）にも高さ・横幅・奥行きにほとんど差のない宗永墓地や永照寺、食野家・唐金家の例とおおよそ類似する例がみられた。写真7は宝暦12年（1762）銘で、墓標頭部は朽木分類のC2型：台状頭角柱に類似する。写真8の墓標頭部は、朽木分類のC1型：尖頭角柱に類似する。紀年銘は風化が激しく確認できなかった。つまり、写真1でみられる高さ・横幅・奥行きが同程度の形態は、西日本における浄土真宗の一形態として捉えるのが妥当である。

2) 十字状の陰刻

「十字は土中に隠して立っていた」（吉田ほか編 1996:16頁）とある。ただ、十字状部分とその他の部分で、風化度合いなどに極端な違いはみられなかった。

また、銘文と十字状の記号の刻線幅を計測すると、銘文は0.3~0.5cm程度であるのに対し、十字状の記号は1.2~1.6cmと1.0cm程度太いことが判明した。同墓地内の他の近世墓標を調査しても、刻線幅が1.0cmを超える例はみられなかった。さらに、銘文は薬研彫りで断面が「V字」状であるのに対し、十字状の記号は断面が「U字」状であった。

本例の十字状の記号はギリシャ十字と類似する。島原半島には131基のキリシタン墓碑が存在し、その中にはギリシャ十字が刻まれている例もある。しかし、島原半島のギリシャ十字は、末端が3方向に分かれ花弁状になるいわゆる花十字紋（森脇 2012:481頁）や、末端が水平方向へ2方向に分かれるパテント・楯木型（しゅもく松田 1975:103頁）に類似す

る例が一般的である。つまり、写真3は後世に刻まれた可能性が示唆される。

6. おわりに

今回の調査で、妙行寺墓地と井出口（出口）墓地の近世墓標の型式と変遷を確認した。その上で「かくれキリシタン」墓標を検討すると、妙行寺の例（写真1）は、西日本における浄土真宗系墓標の一形態の可能性が高い。井出口（出口）の例（写真3）は、刻線幅や断面形態、風化度合いなどから、十字状の記号は後世に刻まれた可能性が考えられる。

ところで、島原・天草一揆では、現在の南島原市深江町域を含む深江村から串山村まで（現在の南島原市全域と雲仙市の一部）の全村民が一揆側として参加した。一揆後、島原藩は住民の過半数を失っており、残った人々もみな困窮していた（南浦編 2018:39頁）。幕府は島原半島復興のために、九州の諸藩や幕領を中心とした西日本各藩³に対して移住令を出した（南浦編 2018:5頁）。こうした歴史的背景からも、南島原市深江町域に在来のキリシタンが残っていた可能性は考えにくい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、多くの方にご協力いただきました。妙行寺・永照寺の近世墓標については、妙行寺三隅智城住職、永照寺村上慈顕住職に、資料調査のご協力とご教示を賜りました。執筆では、指導教員である西南学院大学大学院国際文化研究科教授・伊藤慎二先生、西南学院大学博物館学芸研究員・鬼東芽依氏に、懇切なご指導を賜りました。末筆ながら衷心より御礼申し上げます。

註

- ¹ 本稿は、鬼東芽依編『創られたキリシタン像：排耶書・実録・虚構系資料』に収録されている論考を基に、さらに詳細な調査分析結果全体を示したものである。
- ² 朽木は「形」を使用しているが、型式的特徴によって細分しており、本来は「型式」に相当するため、本稿では「型」を使用する。
- ³ 江戸幕府は、肥後熊本藩、讃岐国小豆島、豊後高松藩・臼

杵藩、肥前佐賀藩、薩摩藩、大隅国種子島、対馬府中藩などに対し、1642（寛永19）年に移住令を出している（南浦編 2018：41～43頁）。

引用・参考文献

- 池上 悟 2003「近世墓石の諸相」『立正大学人文科学研究 所年報40号』15～45頁、立正大学人文科学研究 所
泉佐野市役所市民協働部自治振興課 2022「広報いずみさの 12月号 No.816」 泉佐野市役所市民協働部自治振興課
今野春樹 2003「キリシタン考古学研究の展開」『博望第4号』23～37頁、東北アジア古文化研究所
今野春樹 2013『キリシタン考古学：キリシタン遺跡を掘る』ニューサイエンス社
上田俊之ほか編 1971『深江町郷土誌』深江町
宇土靖之ほか編 2019『島原藩主深溝松平家墓所調査報告書』島原市教育委員会
大石一久編 2012『日本キリシタン墓碑総覧』南島原市教育委員会（世界遺産登録推進室）
鬼東芽依編 2024『創られたキリシタン像：排耶書・実録・虚構系資料』西南学院大学博物館
片岡弥吉 1942「長崎県下キリシタン墓碑総覧」『キリシタン研究第一輯』109～246頁、東京堂
片岡弥吉 1976「キリシタン墓碑の源流と墓碑型式分類」『キリシタン研究第十六輯』115～140頁、吉川弘文館
北前船日本遺産推進協議会 2021「日本遺産 KITAMAE 荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間：北前船寄港地・船主集落 野出墓地」（北前船日本遺産推進協議会ホームページ：<https://kitamae-bune-db.com/db/nodebochi/> 閲覧日：2024年11月20日）
朽木 量 2004『墓標の民族学・考古学』慶應義塾大学出版会株式会社
五野井隆史 2021「潜伏キリシタン図譜・概説」『潜伏キリシタン図譜』20～63頁、潜伏キリシタン図譜プロジェクト実行委員会
坂詰秀一 1981「石造塔婆と墓標」『中山法華経寺誌』日蓮

- 宗大本山法華経寺
櫻井成昭 2004「真宗門徒の墓地と墓碑：西国東郡香々地町宗永墓地について」『大分県立歴史博物館研究紀要5』35～64頁、大分県立歴史博物館
柴尾俊介ほか編 1994『京町遺跡5（Ⅱ-4区の調査）：小倉駅前東地区第一種市街地再開発事業関係』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
白石太郎・村木二郎編 2004「大和における中・近世墓地の調査」『国立歴史民俗博物館研究報告第111集』国立歴史民俗博物館
田中裕介 2012「日本における16・17世紀キリシタン墓碑の形式と分類」『日本キリシタン墓碑総覧』389～406頁、南島原市教育委員会（世界遺産登録推進室）
谷川章雄 1988「近世墓標の類型」『月刊考古学ジャーナル』3月号 No.288』26～30頁、ニュー・サイエンス社
坪井良平 1939「山城木津惣墓標の研究」『考古学第十卷上（1990 復刻版）』310～346頁、示人社
野澤哲朗ほか編 2024『諫早市キリシタン関連遺跡等調査報告書』諫早市
馬場紀聡 2024「南島原市深江町のいわゆる「かくれキリシタン」墓標についての検討」『創られたキリシタン像：排耶書・実録・虚構系資料』56～59頁、西南学院大学博物館
松田毅一 1975『キリシタン研究第二部論考編』風間書房
南浦利早編 2018『島原大移住：戦乱の終わりから復興へ』南島原市教育委員会
三好義三 2021『近世墓標』ニューサイエンス社
森脇あけみ 2012「石の十字架：石造十字架からみたキリスト教信仰の地域様相に関する一考察」『日本キリシタン墓碑総覧』447～490頁、南島原市教育委員会（世界遺産登録推進室）
山本主税 2013「『嶋原大變記』にみる島原藩士の精神と救護活動」『長崎国際大学論叢 第13巻』185～197頁、長崎国際大学
吉田安弘ほか編 1996『島原半島の切支丹文化：かくれ切支丹の遺物と遺跡』島原半島かくれ切支丹研究会

馬場 紀聡（ばば きさと）

西南学院大学博物館学芸調査員

西南学院大学博物館所蔵の キリシタン関係虚構系資料について

鬼東 芽依

1. はじめに

本稿で扱うキリシタン関係虚構系資料とは、1873（明治6）年にキリシタン禁制の高札が撤去されて以降の、キリシタン（南蛮）ブームのなかで創られた・誤認された・偽造された資料をいう。

虚構系資料の存在については、後述の松田毅一の研究（1969）を筆頭に、フーベルト・チースリク（1995）、高倉洋彰（2014）、中園成生（2011a・b、2018、2019a・b・c、2021、2024）、安高啓明（2022）、三輪地塩（2023）などによって研究がおこなわれてきた。なかでも虚構系資料とその問題について、具体例を挙げながら検証を続けているのが中園成生であり、虚構系資料という呼称についてもその著書『かくれキリシタンの起源』（中園 2018）第5章2項『『虚構のかくれキリシタン』の問題』を踏まえたものである。

虚構系資料は、中園によってその成立背景・出自・経済的側面などから分類がされている（中園 2024）。本稿ではまず、虚構系資料の成立過程について述べる。そして、資料の成立背景に基づき、西南学院大学博物館が所蔵しているキリシタン関係虚構系資料の分類をおこないたい。

2. 虚構系資料の成立過程

虚構系資料の成立には、近現代の人々が持っていたキリシタンに対するイメージや、非学術的な関心が非常に大きく関わっている。そしてそのほとんどが、学術的な検証ではなく、「近現代の人が聖書の記載やキリスト教のあり方などを参考にした主観的

な判断に拠って、キリシタン信仰や（禁教期を含む）かくれキリシタン信仰、禁教制度に関するものだと主張している資料」（中園 2024）である。以下、虚構系資料の成立過程を、歴史的背景とともに紹介する。

1) 明治時代 キリシタン遺物の展示

1906（明治39）年に東京帝室博物館の第5回特別展甲部「嘉永以前西洋輸入品及参考品」が開催された。本展は17のテーマで構成されており、そのうちのひとつに「耶蘇教遺物」すなわちキリシタン関係資料が含まれていた。日本国内に現存するキリシタン関係資料がはじめて公の場に展示されたもので、注目を集めた。

本展に出品された「耶蘇教遺物」には、長崎奉行所の旧蔵品が多く含まれる。これらは、現在東京国立博物館が所蔵している「キリシタン関係遺品」である。具体的には、「マリア観音」と呼ばれる白磁観音像や、ロザリオ・十字架・メダイ・踏絵・聖画などが展示されていた。本展をきっかけとして、キリシタンやかくれキリシタンに多くの関心が集まった。また、踏絵をはじめとした偽造品もつくられるようになった（安高 2022：305～306頁）。

このころは、主にお雇い外国人として日本に駐在していた外国人向けの土産物としての側面が強かったと考えられる。大正時代末頃には、「史料研究会」によって12枚組の「長崎史料絵葉書」が発行された。そこには現在東京国立博物館が所蔵する踏絵を掲載した絵葉書も含まれている（図1）。偽造品の制作者は、実際の遺物だけではなく、このような絵葉書も参考資料としていた可能性がある。



図1 「長崎史料絵葉書」より「絵板」(踏絵)の絵葉書

2) 大正時代～昭和時代初期

(1) 南蛮趣味の流行

明治時代末から大正時代にかけて、文壇では南蛮趣味が流行し、キリシタンという存在が文学によっても広まった。代表的な作品として、与謝野鉄幹・平野萬里・北原白秋・吉井勇・木下杢太郎による『五足の靴』(1907〔明治40〕年)が挙げられる。本書は、5名の作家が九州西岸を巡った紀行文・エッセイである。木下杢太郎が旅行に先立って上野の図書館でキリシタンの文献を読みふけり、木下が旅行を牽引したことで、主にキリシタンの遺跡探訪をおこなう旅になったという(中園 2018: 409頁)。北原白秋は旅行の後に『邪宗門』(1909)で多くの異国情緒的な詩を発表した。また、芥川龍之介による「切支丹物」小説群(1916〔大正5〕～1923〔大正12〕年)なども、南蛮趣味やキリシタンブームを後押しした作品として挙げられる(三輪 2024: 50頁)。

(2) 新たなキリシタン遺物の発見

1919(大正8)年2月17日、大阪府茨木市千提寺の東藤次郎家所有のクルス山から、「慶長八年正月十日」銘のある「上野マリヤ」墓碑が発見され、この地域一帯がキリシタンに関係することが判明した。翌年の9月26日、東家の「あけずの櫃」とよばれる箱が開封され、中から「聖フランシスコ・ザビエル像」(現在、神戸市立博物館蔵)をはじめとして数多くのキリシタン遺物が発見された。

東家に続いて、千提寺の中谷家と下音羽の大神家

からは1922(大正11)年以降、原田家などからは1930(昭和5)年以降、貴重なキリシタン遺物が次々と発見された。この新たなかくれキリシタン遺物の発見については繰り返し新聞報道がおこなわれ、日本中が注目した。こうして、「かくれキリシタン」の存在は研究者や教会関係者のみならず、多方面からの注目を集めることとなった。そして一種のキリシタン(南蛮)ブームともいえる状況となり、蒐集家などによって「南蛮物」や「キリシタン遺物」が売買・蒐集されるようになる。

この頃には、千提寺・下音羽地区に骨董屋などの出入りが多くなったことが知られている(茨木市立文化財資料館編 2024)。明治時代には主に外国人向けに「キリシタン遺物」が制作されていたが、茨木キリシタン遺物の発見以降は、国内で販売するために「キリシタン遺物」が制作されていたことが考えられる。こうして、「かくれキリシタン遺物」が全国各地で「発見」されるようになった。

(3) 「キリシタン灯籠」の発見

茨木での発見と同時期に「発見」された代表的な虚構系資料が、「キリシタン灯籠」である。「キリシタン灯籠」は、織部灯籠が「キリシタン遺物」とであると誤認されたものである。「キリシタン灯籠」発見の経緯は次のとおりである。

1922(大正11)年に、ある郷土史家が静岡市内の寺院の「茶室の裏に妙な形の灯籠がある」ことを聞き、寺院を訪れた。そこで、笠の部分に人物が浮き彫りにされた織部灯籠を発見した。その人物が「静岡市横内来迎院の南蛮屏風に描かれている耶穌の宣教師に似ている」ため、パリ外国宣教会に属するカトリックの神父も確認したところ、「たしかにローマのカトリックの聖人像で服装はたしかに古代ローマの法服である」と断定された(松田 1969: 174～175頁、中園 2018: 418～419頁)。

こうして、同様の織部灯籠(図2)は1920年代頃から全国各地で次々と発見され、以下に代表されるような、竿の形態的特徴をもってキリシタン遺物であるとみなされてきた。



図2 織部灯籠の基本的形態 (松田 1969: 図版5)

第1に、植込式四角柱上部で左右に少し張り出した竿の形状が、従木の長いラテン式十字架、またはT字形のエジプト十字架を模している。

第2に、竿の十字交叉点の中央部の陰刻の異形の文字記号を、複雑に変装を凝した欧文文字の組合せの変形文字とみ、それをキリスト教関係の記号 (IHS、FILIIUS、PATOLI など) とみてる。

第3に、竿下方角柱正面の翁状の光背を掘り窪めた中に、陽刻レリーフの人物像がある。それはイエス、パテレン (宣教師)、マリアの各像で、隠れキリシタンが礼拝対象としたものである。

(松本 2000: 50頁)

織部灯籠「キリシタン灯籠」説はその後、石造美術の専門誌『史迹と美術』などにおいて賛否両論の議論がなされた。しかし1930 (昭和5) 年、美術史家の西村貞が雑誌『週刊朝日』に「キリシタン灯籠」を寄稿したことを契機として、「キリシタン灯籠」説に基づく主張が活発となった。西村にヨーロッパ留学の経験があることが肯定要素に繋がったようである。

ただしその後、坂重吉「所謂切支丹潜伏墓標及び切支丹燈籠に就いて」¹⁾によって、「十字形はキリスト教に限られた図像ではないこと、文字記号は欧文文字ではなく古体漢字であること、人物像は仏像であること」などから「キリシタン灯籠」説は明晰な否定がなされた (松本 2000: 51頁)。だが、キリシ

タン灯籠は現代においても一部の間で根強く支持されている。この点については次項でも述べたい。

(4) キリシタン研究の開始

一方で、学術的なキリシタン研究が開始されたのも大正時代である。茨木でのキリシタン遺物発見後、東京帝国大学の新村出、濱田耕作、梅原末治らによってそれらが報告された²⁾。また、東京帝国大学宗教学講座教授の姉崎正治によって『切支丹宗門の迫害と潜伏』(1925)、『切支丹禁制の終末』(1926)、『切支丹迫害史中の人物事績』(1930)、『切支丹伝道の興廃』(1930)、『切支丹宗教文学』(1932) が出版され、のちに「キリシタン五部作」とよばれた。これらの研究活動を嚆矢として、本格的なキリシタン研究が着手されていった (三輪 2024: 50頁)。

3) 昭和時代～現代

排耶運動 (キリスト教排斥運動) は明治時代にもおこなわれていたが、特にアジア・太平洋戦争中はキリスト教徒に対する差別や偏見が一層大きくなり、キリスト教撲滅演説会などもおこなわれていた³⁾。そのような中、キリスト教を表立って信仰することは憚られた。また、自らも差別の対象となることを恐れ、キリスト教徒に対する差別を傍観するしかない状況にあった人々が多くいたことも想像できる。戦後には、それまでの皇国史観からの脱却に伴い、日本各地で多様な地域史・郷土史の詮索と見直しが盛んとなった。そして、「ある種の実感的思い入れとともに」郷土史家による地域のかくれキリシタン新資料探索も進められた。そこには、人々のかくれキリシタンに対する好奇心だけではなく、迫害されていたことに対する同情心や後悔などの思いもあったと考えられる。その結果、キリシタン・かくれキリシタン関係の重要な資料の発見と研究も進んだが、同時に多くの「副産物」も生み出した (伊藤 2024: 55頁)。

(1) 「キリシタン灯籠」説の再興

戦争により一時的に下火になっていたキリシタン墓碑やキリシタン灯籠の「発見」は、戦後再び盛んとなった。戦後、「キリシタン灯籠」説を唱えた代表

的な人物が西村貞、竹村覚、松田重雄である。1948（昭和23）年に西村貞が「切支丹灯笼について一別名『耶蘇灯笼』の研究」（『キリシタンと茶道』に所収）を発表すると、「キリシタン灯笼」説への関心が再び高まった。多くの学術研究者がその編集に関わり、長きにわたってキリシタンに関する基礎文献とされた『切支丹風土記』（1960）においても、「キリシタン灯笼」説が紹介された。日本全国のキリシタン遺物を紹介した『キリシタンの美術』（1961）においても、「キリシタン灯笼」が西村らの解説とともに取り上げられた。

竹村覚は、久留米大学の教授を務めていた人物である。専門は英文学だが、キリシタン遺物の研究もおこなっていた。1964（昭和39）年に『キリシタン遺物の研究』を出版し、そのなかで「キリシタン灯笼」を紹介した。竹村はすべての織部灯笼が「キリシタン灯笼」ではないだろうとしながらも、「しかし、いわゆる織部灯笼の中に、キリシタン信仰と何等かの関係のある灯笼が存していることは事実である」（竹村 1964：10頁）と述べた。

松田重雄は鳥取県の郷土史家で、全国中学校校長会会長、鳥取民俗美術館長などを歴任した人物である。また、鳥取キリシタン研究会、全国かくれキリシタン研究会⁴を設立し、その会長を務めた。『潜キリシタンの信仰と切支丹灯笼』（1966）、『切支丹灯笼の謎』（1976）、『切支丹燈籠の信仰』（1988）などを出版し、「キリシタン灯笼」説を主張しつづけた。以上のような「キリシタン灯笼」説を支持した書籍は、学術研究者やキリスト教関係者も監修や編集などに関わっていたため、「キリシタン灯笼」説が学術的に裏付けられたかのような扱いを受けた。

戦後、「キリシタン灯笼」をはじめとしたキリシタン遺物をめぐる問題に対峙したのが松田毅一である。『切支丹風土記』や、単著『キリシタン：史実と美術』（1969）などにおいて、「キリシタン灯笼」説を明確に否定した。特に『キリシタン：史実と美術』「織部型燈籠の実体」においては、西村貞・松田重雄らに代表される「キリシタン灯笼」説の問題点を指摘し、織部灯笼の意匠を再検討した。さらには、千

提寺・下音羽地区のかくれキリシタン遺物発見を契機としておこったキリシタンブームが「郷土史家を刺激」し、「切支丹屋」が出現したこと、カトリック教会関係者がそれを「歓迎こそすれ、決して冷静、かつ批判的に対処」しなかったことが、「キリシタン灯笼」説の定着につながったと痛烈に批判した（松田 1969：177～178頁）。つまりは本書によって、「キリシタン灯笼」説は改めて完全に・明晰に否定されたのである。

しかし、昭和時代中頃には全国各地で「キリシタン灯笼」が市町村の文化財に指定されはじめた。指定は昭和40年～50年代（1965～1984）にかけて最も多く、松田毅一による「キリシタン灯笼」説の否定が全く取り合われていない状況がうかがわれる。そして「キリシタン灯笼」がある地域には、かつてかくれキリシタンが存在したとされ、現代のキリスト教徒からは「聖地」とみなされることもあった。

平成時代に入っても指定を受けた例が数件あり、新しい例としては福岡県朝倉市の「秋月のキリシタン灯笼」（朝倉市指定文化財、平成21年2月23日指定）がある。そしてその多くが、現在も現地の案内板や自治体のホームページで「キリシタン遺物」として公開されている。近年も「キリシタン灯笼」を題材としたインターネットコラム⁵で、「命を懸けて、工夫して信仰を続ける意志がすごい」と紹介されており、誤った解釈が広まり続けている状態である。

（2）博物館等への収蔵・展示

1950年代以降、博物館法の制定により全国で博物館・美術館・資料館等の設置が盛んになった。そのなかには、キリシタンに関する資料として虚構系資料を収蔵・展示した施設もある。地元の郷土史家や蒐集家が蒐集した「キリシタン遺物」がコレクションの大部分を占める施設もある。現在も一部では真正のキリシタン資料として展示されているが、多くの施設では偽資料と判断され、展示をおこなわずに収蔵庫保管されている。

西南学院大学博物館の開館は2006年で、開館以前に大学に寄贈されたキリスト教関連の学術資料が移管された。また開館以来、教会関係者などから「キ

リシタン遺物」とされるものの寄贈を受けた。虚構系資料と判断されたものは、展示をおこなわずに収蔵庫での保管をおこなっていた。ただ、「マリア観音」とされた白磁観音像（N-a-001）や、「魔鏡」（N-a-002）などは、十分な調査を踏まえずに「キリシタン遺物」であることを示唆するような展示がおこなわれていた。

2021年9月以降、当時の学芸員・下園知弥により、キャプションの変更や展示の撤去などがおこなわれた。2024年12月現在、白磁観音像と魔鏡はキリシタン遺物ではないことを明記したうえで常設展示している。

（3）キリシタン考古学研究的発展

前述のとおり、戦後のキリシタン研究をめぐっては、キリシタンの信仰とは関係のない石造物（灯籠、墓碑など）がキリシタン遺物と判断されており、問題となっていた。一方で、2000年前後からセント・ドミンゴ教会跡（長崎県長崎市）、原城跡（長崎県南島原市）、高槻城キリシタン墓地（大阪府高槻市）、大友府内町跡（大分県大分市）、東京駅八重洲北口遺跡（東京都千代田区）など、考古学的発掘調査によるキリシタン関連の遺跡・遺物の発見が相次いだ。そこで、キリシタン遺物の考古学的検証においては、判断基準を公正化するため、今野春樹（2006、2013）によって以下の四つの観点が示された。

キリスト教学的観点 キリスト教の歴史を含めてキリスト教の教義、信仰の形態に沿ったものであるかを検証する。

歴史学的観点 歴史中においてキリスト教の存在や活動の実態があるか否かを検証する。

美術史的観点 絵画や彫像などの作品において、先例としてキリスト教の事柄がモチーフとして使用されているか、また日本の伝統文化的系統に属さないものであるかを検証する。

考古学的観点 遺物がキリスト教文化の系統に連なるものであるかを考え、かつ形式分類や編年などの作業を通じて論理的に検証する。

以上四つの観点で検証し、積極的に認知できるものをキリシタン遺物として定義する。

（今野 2013：9頁）

以上は、とあるモノが「キリシタン遺物」であるかどうか、客観的に判断するための適切な観点である。

「キリシタン灯籠」とおなじく、キリシタンブームのなかで注目され、その結果真偽の定かではないものが多数「発見」されていたのが「キリシタン墓碑」である。2012年、大石一久によって全国のキリシタン墓碑が『日本キリシタン墓碑総覧』にまとめられた。本書においても、今野が示した四つの観点をもとにして、調査対象とした墓碑が決定された（大石 2012：10～11頁）。また、それまでのキリシタン墓碑研究のなかで生じていた分類の複雑さや語句の不統一などについても、再分類・統一が試みられた（大石 2012：11～12頁）。本書において調査の対象外となった「キリシタン墓碑」とされる墓標については、キリシタン考古学研究と近世墓標研究の観点から改めて「キリシタン墓碑」であるかどうかの再検証が必要である。

（4）現代における虚構系資料

2016（平成28）年に遠藤周作『沈黙』（1966年）を原作とした「沈黙 サイレンス」が公開されるほか、2018（平成30）年には、「潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に登録されるなど、近年はキリシタン・かくれキリシタンの歴史と遺物への注目が増した。一部の施設では現在でも、虚構系資料が真正のキリシタン遺物として展示されており、誤った歴史や解釈を生み出すものとなっている。

虚構系資料のなかでも特に注目されているのは「踏絵」と「マリア観音」とされる観音像ではないだろうか。「踏絵」は、悲劇的なキリシタンの物語とともに禁教制度を代表する遺物と捉えられている。おもに遠藤周作『沈黙』に代表される創作物の影響で、キリシタンは「苦しみながら絵踏みをおこなっていた」というイメージが定着している。さらには、踏絵自体に教徒たちの苦しみや怨念などが籠っている

といった見方までされる。

「マリア観音像」についてはそのイメージだけがひとり歩きしている状況である。「かくれキリシタンが使用していた」という伝承のみを根拠として、かくれキリシタンの信仰とは全く関係のない立体像が「マリア観音」像として博物館等で展示される事例がある。

2020年12月には、日本各地の潜伏キリシタンに関する史資料が集成された『潜伏キリシタン図譜』が刊行された。本書においても、虚構系資料の掲載があることが指摘されている。特に、かくれキリシタンの信仰の存在が認められていない地域で、観音像が「マリア観音」とされる例が数件みられた（中園2021）。直近では、キリシタンの「聖地」とされる場所に、かくれキリシタンの信仰と全く関係のない現代の観音像を新たに設置し、「マリア観音」として公開している例もあり、本質とは離れたイメージ化が進んでいる。

3. 虚構系資料の分類

中園成生によれば、キリシタン関係虚構系資料は、成立の背景によって（1）キリシタン信仰、（2）かくれキリシタン信仰、（3）禁教制度に関連付けられたものに分類することができる（中園2024）。他にも、出自や経済的側面からの分類が可能とされるが、本項では成立の背景から西南学院大学博物館収蔵資料の分類をおこなった（表1）。以下、各資料について解説をおこなう。

1) キリシタンの信仰に関連付けられたもの

(1) 南蛮人文小切（資料番号：N-a-023、図3）

「切支丹小切」と書かれた封筒が付属する。帽子とボタンのついた洋服を着用した人物の文様が施されている。この人物は南蛮人をモデルとしたものと考えられる。16世紀後半に南蛮貿易によってもたらされた輸入品を俗に「南蛮物」という。南蛮物は大正時代の茨木キリシタン遺物の発見を契機としたキリシタン（南蛮）ブームで、蒐集家を中心に注目さ

れた。また、キリスト教の遺物は南蛮物と同じ時代に輸入されていたため、両者は混同されることがある。

本資料も、南蛮風の意匠があしらわれていることから、キリシタンの信仰に関係があるとされたのだろう。資料の状態の良さや、類例する作品が確認できないことから、16世紀後半の「南蛮物」ではなく、販売目的で現代に制作された「南蛮物」であると考えられる。

(2) 中川車紋軒丸瓦（資料番号：N-a-025、図4）

中川家の家紋を施した軒丸瓦である。中川家は、豊後国（現在の大分県の一部）にあった岡藩の藩主を代々務めた。中川家の家紋は、十字架を思わせるような形から別名「中川久留子（中川クルス）」紋とされ、たびたびキリシタンの信仰と関連付けられてきた。初代藩主・中川秀成がキリシタンに改宗したという史料は確認されていないが、沼田頼輔『日本紋章学』（1928）では、中川清秀が熱心なキリシタンで、その子の秀政（秀成の兄）もキリシタンであった⁶とされた。また、西村貞『キリシタンと茶道』（1948）においても、秀成がキリシタンであると推測された（松田 1969：113～128頁）。他にも、この家紋にはイエズス会の紋章「IHS」が隠されているとする説もある。

しかし、中川秀成と代々の藩主がキリシタンであったとする史料や遺物は発見されていない。また、十字文様はキリスト教伝来以前の日本でもよく使用されていた伝統的な文様である。十字文様をキリシタンの信仰と結び付けるためには、日本国内においてキリシタン「しか」十字文様を使わなかったという証明が必要である。

(3) 鐔（N-a-028、図5）

刀鐔のなかには、キリシタンまたはかくれキリシタンが使用していた「キリシタン鐔」とされるものがある。「キリシタン鐔」とされるものには、十字形のもの、十字文様が施されたもの、磔刑などのキリスト教に関連する意匠が施されたものがある。本資料には「花十字文」のようにみえる十字形の透彫があるため、「キリシタン鐔」として当館に収蔵された。

表1 西南学院大学博物館収蔵の虚構系資料

図版番号	資料名	資料番号	制作年／素材・形態	来歴	大きさ (cm)
1) キリシタンの信仰に関連付けられたもの					
3	南蛮人小切	N-a-023	20世紀頃／絹製・金糸	古書店より購入	1. 縦11.0、横28.5 2. 縦10.0、横26.0
4	中川車紋軒丸瓦	N-a-025	17世紀／土製	個人（大学関係者）より寄贈	縦8.5、横6.5
5	鐙	N-a-028	不詳（20世紀か）／鉄製	個人より寄贈	径7.8
6	鐙	N-a-029	不詳（江戸時代か）／鉄製	個人より寄贈	縦6.9、横7.5
2) かくれキリシタンの信仰に関連付けられたもの					
8	白磁観音像	N-a-001	17世紀／磁器	個人（教会関係者）より大学に寄贈、2006年に大学博物館へ移管	高24.0、幅10.5、奥行6.2
9	白磁観音像	N-a-030	17世紀／磁器	不明	高さ17.8、最大幅9.3
10	白磁観音像	N-a-031	17世紀／磁器	不明	高さ22.5、最大幅9.3
11	観音像	N-a-032	不詳／銅製	不明	高さ9.5、最大幅5.3
12	観音像	N-a-033	不詳／木彫	不明	高さ23.7、最大幅10.9
13	魔鏡	N-a-002	20世紀／銅製	個人（教会関係者）より大学に寄贈、2006年に大学博物館へ移管	径21.0
14	染付「まるや」徳利	N-a-012	18世紀頃／染付、徳利	個人（教会関係者）より寄贈	口径3.4、高さ25.4、底径8.0
16	仏像付き十字架	N-a-026	1945（昭和20）～1950（昭和25）年頃／鉄製	個人（大学関係者）より寄贈	縦25.3、横19.5
17	染付十字文壺	N-a-034	20世紀頃／染付、壺	不明	口径9.5、高さ17.8、底径8.1
18	染付草花文皿	N-a-054	17世紀頃／染付、皿	個人（教会関係者）より寄贈	幅20.0、高さ3.0、底径12.9
19	染付十字文鉢	N-a-055	20世紀頃／染付、鉢	個人（教会関係者）より寄贈	幅17.5、高さ5.8、底径11.0
20	大黒天像	N-a-056	20世紀頃／木彫	個人（教会関係者）より寄贈	本体：高さ8.5、最大幅5.0 台座：高さ2.5、幅7.0
3) 禁教制度に関連付けられたもの					
21	踏絵（偽造品）	N-a-010	20世紀／青銅か	2010年の大学6号館解体に伴い、大学博物館へ移管	縦16.5、横11.3
22	板踏絵（偽造品）	N-a-011	20世紀／木、真鍮	個人（教会関係者）より寄贈	縦27.3、横19.5、厚さ3.2
23	紙踏絵（「宗門御改影踏帳（天明四年）」に綴じ込み）	N-b-001-1	20世紀／紙本木版	古書店より購入	縦30.4、横28.1
24	紙踏絵（「宗門御改影踏帳（文化三年）」に綴じ込み）	N-b-001-2	20世紀／紙本木版	古書店より購入	縦31.0、横22.0
24	紙踏絵（「宗門御改影踏帳（文化三年）」に綴じ込み）	N-b-001-2	20世紀／紙本木版	古書店より購入	縦31.0、横22.0
25	紙踏絵	N-b-004	20世紀／紙本木版、墨書	個人より寄贈（東京富岡八幡宮の骨董市で購入されたもの）	縦35.0、横23.0
26	紙踏絵	N-b-005	20世紀／紙本木版、墨書	個人より寄贈（太宰府市の骨董市で購入されたもの）	縦35.0、横25.0



図3 南蛮人文小切



図4 中川車紋軒丸瓦

鍔に武士の信仰の証となる意匠が伴うことは珍しくなかったが、明治時代に土産物用として偽造されたキリシタン遺物も多く、本物と偽造品の判別は専門家でさえ困難である（フーベルト・チースリク 1995：321頁）。本資料の茎櫃なかこびつ（刀身を通した孔）の棟側には、刀身を鍔に固定調整するために補った銅の貴金が残っている（相江 2022）。貴金の縁は、おそらく刀身の重量によって少し摩滅変形しているほか、茎櫃表面の刃先側にはいくつかの小さな剥落痕が観察できる（前掲同）。これらは実際に刀を装着して使用された痕跡とも考えられる（前掲同）。しかし、本資料をキリシタンが使用していたことを示す史料は確認されていない。

（4）鍔（N-a-029、図6）

本資料のような十字形の鍔も、「キリシタン鍔」とされることがあるが、これは近世の鍔として極めて



図5 鍔



図6 鍔

一般的な形である。すなわち、同様の鍔を所有していたからといって、その所有者がキリシタンであったとは言えない。本資料には、キリシタンが使用していたことを示す史料がないため、キリシタン遺物とはみなせない。

2) かくれキリシタンの信仰に関連付けられたもの

（1）白磁観音像（資料番号：N-a-001・N-a-030・N-a-031、図8、9、10）

1856（安政3）年におこった、かくれキリシタンの大量摘発事件「浦上三番崩れ」では、逮捕した信者から多数の立体像が没収された。そのなかには中国福建省・徳化窯で製造されたと考えられる白磁観音像があった。白磁観音像は、長崎・浦上、外海、五島列島などで「ハンタマルヤ」と呼ばれ信仰の対象となっていた。長崎奉行所没収品が東京国立博物館に移管された後は、「マリア観音」像と呼ばれるようになった。東京国立博物館キリシタン関係遺品のなかで「マリア観音」とされる徳化窯製白磁観音像の型式は、大きく立像と坐像に分けることができる。なかでも、懷に幼児を抱いて岩上に座り、両脇に童子が合掌しているタイプの坐像（図7）が最も多く、「マリア観音」像の代表的な型式として理解されている。

崩れでは、徳化窯製白磁観音像以外にも銅製・木製・青磁製・石製の観音菩薩像や大日如来像、毘沙門天像などが「信仰対象」として没収された。また1805（文化2）年の天草崩れにおいても、天草地方のかくれキリシタンから大黒天・弁財天・弘法大師などの立体像が没収されたという記録が残っている。これらを根拠として、来歴不明の白磁観音像や立体像がかくれキリシタンが信仰対象としていた立体像として売買されるようになった。また、それらが博物館・資料館などで展示される例もある。

徳化窯製白磁観音像が、いつ国内に輸入され、どのようにして外海・浦上のかくれキリシタン達に受け入れられたのかは判明していない。しかし近年の研究では、18世紀初頭のイギリス東インド会社によ



図7 マリア観音像（東京国立博物館キリシタン関係遺品、期間管理番号：C-605）

出典：国立博物館所蔵品統合検索システム
(https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/C-605)

るヨーロッパ向けの徳化窯製白磁（Blanc de Chine）の販売記録に「Sancta Maria」という記載があることが判明した。すなわち、白磁観音像は徳化窯で聖母マリア像としてつくられ、それが観音像として長崎に輸入され、外海・浦上のかくれキリシタン達には再び聖母マリア像として信仰されるようになった可能性が浮かび上がった（宮川 2020：38頁）。

N-a-001・N-a-030・N-a-031はいずれも伝「マリア観音」像として当館に収蔵されていた白磁観音像であるが、来歴については不明である。N-a-001（図8）は、東京国立博物館キリシタン関係遺品に最も多く見られるタイプと同型の白磁観音坐像である。長崎・浦上で起こった崩れで没収を逃れたものとして、長崎バプテスト教会関係者から大学に寄贈があったものである。2006年の大学博物館開館時に、キリスト教資料展示室（現在は閉室）から移管された。本資料は来歴が不明なまま、2021年頃まで「マリア観音像」としてかくれキリシタンとの関連があるように展示されていた。

N-a-030（図9）も、東京国立博物館キリシタン関係遺品に最も多く見られるタイプと同型の白磁観音坐像に見える。両脇の童子が向き合っているが、このタイプは東京国立博物館キリシタン関係遺品のなかには確認できない。N-a-031（図10）は、立体



図8 白磁観音像



図9 白磁観音像



図10 白磁観音像

像の約2分の1が蓮華座である点で特徴的である。東京国立博物館キリシタン関係遺品には同様の例がみられない。いずれの観音像も、詳しい来歴の調査がおこなわれるまでは、かくれキリシタンの遺物であるという断定はできない。

(2) 観音像 (資料番号：N-a-032・N-a-033、図11・12)

N-a-032 (図11) は金属で鑄造された観音像である。伝「マリア観音」像として当館に収蔵されていた。光背 (舟形光) の背面に十字が刻まれている。東京国立博物館が所蔵する長崎奉行所旧藏品には、同型の観音像は確認できない。N-a-033 (図12) は木製の観音像である。光背 (舟形光) の上部に十字形の彫り込みがある。こちらも伝「マリア観音」像として当館に収蔵されていた。いずれも来歴は不明で、どのような経緯で「マリア観音」像として伝わったのかが分かっていない。

(3) 魔鏡 (資料番号：N-a-002、図13)

魔鏡とは、光を反射させると鏡背の図柄とは異なる図柄が写し出される鏡である。国内に現存する魔鏡は、そのほとんどがいつ・どこで・誰によって制作されたのかが判明しておらず、さらにその使用状況についても明らかになっていない。ほとんどの魔鏡は二重構造であり、反射で投影したい図柄を鏡背に鑄造した鏡の上に、別の図柄が鑄造された金属板を重ねることで、鏡背 (とする金属板) とは違った図柄が写し出される仕組みになっている。そして現存する魔鏡が写し出す図柄はそのほとんどが仏教に関連するものである。

本資料も、鏡背の縁部分に金属を貼りあわせた痕跡が確認され、二重構造の魔鏡であることがわかる。光を反射させると磔にされたキリストとそれを拝む天使? が写し出されるため、かくれキリシタンが使用していた信仰具とみなされた。本資料と同様の鏡は国内に4面確認されている。検討の結果、おそらく京都で明治時代以降に製作されたものであり、かくれキリシタンの信仰とは関係がない (鬼東2024: 62頁)。

2006年の開館当初、かくれキリシタンの遺物である「キリシタン魔鏡」が展示されるとして、新聞などで大々的に報道された。その後2021年頃まではか



図11 観音像



図12 観音像 (下：光背の十字形の彫り込み)

くれキリシタン関係資料のように展示を続けていたため、現在でも「キリシタン魔鏡」が当館の代表的なキリシタン資料として認識されている。



図13 魔鏡（下：投影される図柄）

（4）染付「まるや」徳利（資料番号：N-a-012、図14）

本資料は当初、「キリシタン壺」として寄贈を受けた。江戸時代後期に肥前で生産された酒徳利と考えられる。酒徳利はその内容量から大中小に分類されるが、本資料は中にあたるか。胴部に描かれた帆船の帆には、丸の中に「や」と書かれる。この図柄を「まるや」すなわち、かくれキリシタンの信仰対象であった「ハンタマルヤ」を指す言葉と解釈することもできる。そのため、キリシタン遺物として認識された可能性がある。

なお、この図柄は江戸時代中期の民謡集『山家鳥虫歌』に収められている、肥前の歌「平戸小せどから舟が三ぞう見ゆる丸に屋の字のほが見ゆる」（図15）から着想を得たものと考えられる。



図14 染付「まるや」徳利

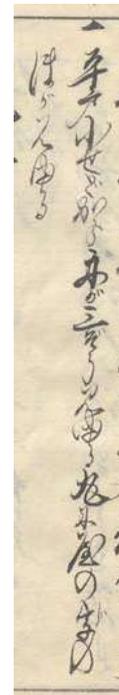


図15 『山家鳥虫歌』（部分、京都大学附属図書館蔵、請求番号：4-29/サ/4）

（5）仏像付き十字架（資料番号：N-a-026、図16）

中央に合掌をした仏像が施された十字架である。数ある虚構系資料のなかでも、制作者・制作地が明らかとなっている珍しい例である。この十字架については、1977年の名古屋切支丹研究会においてキリシタン遺物ではないことが注意喚起された（青山1977）。青山によれば、この十字架は愛知県海部郡美和町の個人によって、1945～1950（昭和20～25）年頃に約300個鑄造されたという。その後、チース

リクによっても『キリシタン史考』第5章「キリシタン遺物のニセモノ」で、「十字架の阿弥陀像」として取り上げられ、偽造品であることが再び説明された（フーベルト・チースリク 2000：316～318頁）。

魚津歴史民俗博物館では、麻柄一志によって仏像付きの十字架がかくれキリシタンとの関連性がないことが再検証され、「展示室から撤去」したとする（麻柄 2003）。当館でも収蔵当初から偽資料として認識されており、展示をおこなわないようにしていた。

ちなみに、このような仏像と十字架、仏具とキリストなどを組み合わせた虚構系資料には様々な種類のもので存在する。これらは、宣教師がいなかった禁教期にキリスト教徒が信仰の形態を変化させていったという「禁教期変容論」を根拠として成立したと考えられる。すなわち、「一部の地域では、キリスト教徒であることの発覚を免れるために、仏像の背や底面、厨子の中に十字架を隠して」信仰が続けられたという具合である。しかし、実際のかくれキリシタン信仰のなかでは、仏教や神道とキリスト教が併存して信仰されることはあっても、それらの意匠を混合して信仰具とした例は確認できていない。

（6）染付十字文壺（資料番号：N-a-034、図17）

全面頸部に十字文様、胴部に「寿」、背面に草花文が施された壺である。色調から酸化コバルトを使用しているように見えるため、明治時代以降に生産

されたものであろう。十字文様の意匠が十字架として解釈されたというよりは、はじめからかくれキリシタンの信仰具として販売するために十字架を施した商品であると考えられる。

本資料のような十字架をモチーフとした陶磁器は、大正時代～昭和時代のキリシタン（南蛮）ブームで盛んに作られたものと考えられる。キリシタンと茶の湯の関係については、織部灯籠「キリシタン灯籠」説とともに有力に支持されており、十字文様が施された茶碗類が一部の蒐集家の間で熱心に蒐集されていた⁷。

わび茶を大成させた千利休は、南蛮貿易の拠点であった泉州堺に生まれ、キリスト教の教義や宣教師たちがおこなっていた儀式に触れる機会が多かったと考えられている（古田織部美術館編 2018：1頁）。また、利休の周りにはキリスト教に入信していた大名や門下の存在もあった（前掲同：1～2頁）。利休自身や利休の家族がキリスト教に入信していたという説もあるが、根拠となる史料は一切残されていない（前掲同：3頁）。

（7）染付草花文皿（資料番号：N-a-054、図18）

17世紀ごろ、肥前で生産されたと考えられる。回転させると図柄の一部分が十字架に見えることから、「かくれキリシタン」が祈る際に使用していたことが想定されていた。皿ではないが、福岡県立美術館久我コレクションのなかに同様の意匠が施さ



図16 仏像付き十字架



図17 染付十字文壺

れた鉢が確認できる(楠井編 1996:11頁)。福岡県内の牧師がコレクションしていたものの一部で、十字文鉢(図19)・大黒天像(図20)と一緒に寄贈された。

(8) 染付十字文鉢(資料番号:N-a-055、図19)

見込みに十字文様が施された鉢。酸化コバルトを使用し、型紙摺りの技法が使用されているため、明治時代以降に生産されたものである。聖水を入れる容器としての使用が想定されていたと考えられる。

(9) 大黒天像(資料番号:N-a-056、図20)

正面から見ると一般的な大黒天像である。本体部分と台座部分(米俵)に分かれており、本体部分の

底面に十字が刻まれている。大黒天像は、熊本県天草市の崎津集落周辺で唯一神デウスに見立てて崇拜されていたとされる。1805(文化2)年に起こった「天草崩れ」では、131件の信仰「異物(異仏)」が代官所に差し出されたという記録があり、その中に大黒天像も含まれていた。それ以外にも、鏡、銭、弁財天像・弘法大師像・地藏などの立体像、アワビの殻、タイラギ貝の殻などが差し出された(平田2021:234~238頁)。しかし、立体像の底面や背面に十字文様が彫り込まれていた例は確認されていない。かくれキリシタン達が実際に仏像とキリスト教の意匠を混ぜて信仰具としていた事実が確認できるまでは、「かくれキリシタン遺物」と断定することはできない。



図18 染付草花文皿



図20 大黒天像(右:本体部分底面)



図19 染付十字文鉢

3) 禁教制度に関連付けられたもの

(1) 踏絵(偽造品、資料番号:N-a-010、図21)・

板踏絵(偽造品、資料番号:N-a-011、図22)

踏絵は小・中学校の歴史の授業でも学習するため、国内では一番有名なキリシタン関係資料ともいえるだろう。江戸時代、キリスト教徒を取り締まるために一部地域で使用されていたもので、板にキリストや聖母マリアのメダイやプラーク(plaque)が嵌め込まれたものと、真鍮製でキリストや聖母マリアの図柄が鑄造されたものが現存し、東京国立博物館に収蔵されている。現存する踏絵はすべて長崎奉行所の旧藏品である。各藩が絵踏をおこなう際には



図21 踏絵（偽造品）



図22 板踏絵（偽造品）

長崎奉行所から貸し出しをする形をとっていた。これに加え、独自に踏絵を所持していた熊本藩・小倉藩や、かつて踏絵をしていた岡山藩と会津藩の踏絵が発見される可能性が残されているが、現在のところ確認されていない（安高 2022：306頁）。

踏絵として制作されたキリストや聖母マリアの図像は、新たな信仰具となりうる恐れがあると考えられていたようである。元々藩内で絵踏をおこなっていた平戸藩では、踏絵を処分する際、平戸・長崎双方の宗門改め役立会いのもとで焼き捨て、その灰までも集めて処理するなど徹底的な管理をおこなっていた（安高・内島 2016：25頁）。これらのことから、真正の踏絵は現在東京国立博物館が所蔵する板

踏絵と真鍮踏絵のみであり、それ以外のものは偽造品といえる。

安高啓明『踏絵を踏んだキリシタン』（2018）では、絵踏が全国的にはなく限られた一部の地域でしかおこなわれていなかったことが改めて解説され、絵踏の形骸化などについてもまとめられた。本書では、キリシタン達が「苦しみながら」踏絵を踏んでいたというイメージと真逆の説が論じられた。一方で、絵踏が一部地域のみでおこなわれていたのではなく、全国的におこなわれていたというイメージが根強い。そのため、地域の資料館などで偽造品の踏絵が「江戸時代にこの地域で実際に使用されていた」という解説を伴って展示されていても、違和感を抱かない人もいる。

（2）紙踏絵（資料番号：N-b-001-1・N-b-001-2・N-b-004・N-b-005、図23～26）

紙踏絵は同じ版元で制作されたと考えられる版が多数確認されており、高倉洋彰によって集成と分類がおこなわれた（高倉 2014：279～312頁）。そこで、紙踏絵はキリシタン資料ではないと結論が出されているが、未だに真正の踏絵として認定されたり販売されたりしているものが確認される。

いずれの資料も、十字架と人物の頭部像・アルファベット筆記体「Christr」・禁制句「一切支丹伴天連ヲ踏マザル者獄門ノ事」が木版で印刷される点で一致している。これは現在確認されているほとんどの紙踏絵に共通する基本要素である（高倉 2014：283頁）。また、類例資料のなかには「マリア観音像版」とされる、「マリア観音像」とアルファベット筆記体「Christr」などが刷られたものも存在する（前掲同：305頁）。

まず、中央の図像に注目する。十字架の縦木先端部分に、男性の首が載せられた（突き刺さった？）図像である。キリスト教の十字架表現のなかに、このようなものは存在しない。この時点で、踏絵としての役割を果たせないことがわかる。たとえ実際のキリスト教の図像が失われていた時代であっても、取り締まろうとする側がここまで杜撰であったとは考えにくい。絵踏が形骸化していた時代であって



图23 紙踏絵



图25 紙踏絵

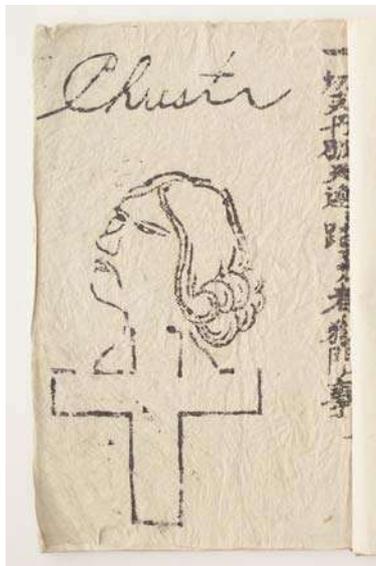


图24 紙踏絵 (表、裏)

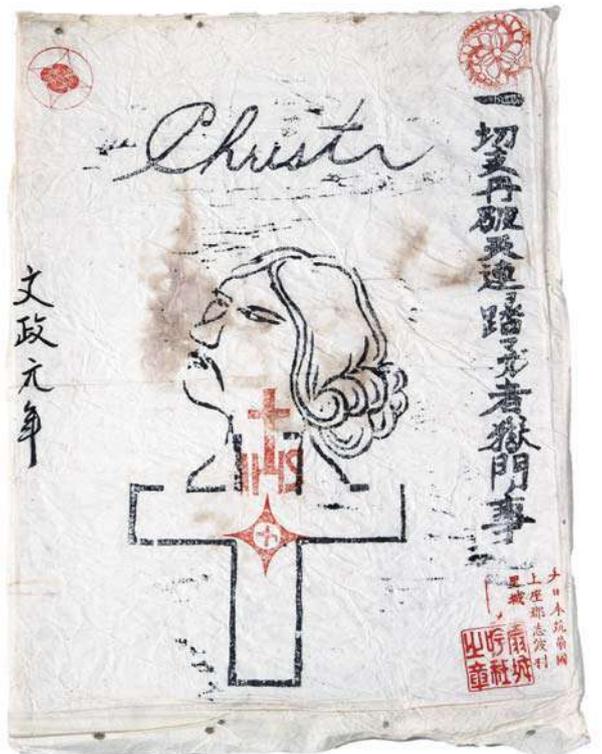


图26 紙踏絵

も、「信仰具（が元になったもの）を踏ませる」という形式は守る必要があったはずであるから、この図像が取り締まりに使用されていた可能性は極めて低い。

男性の首の上には、アルファベット筆記体で「Christr」と記される。英語もしくはフランス語の「キリスト」表記「Christ」の誤表記と考えられる。江戸時代、アルファベットの筆記体は長崎・出島を通じてもたらされた洋書に記されている程度で、一部知識層の間でのみ認識されていた。仮にかくれキリシタンがこの筆記体を見たとしても「キリスト」であると理解できる可能性は低い。そのため、キリシタンを取り締まるという目的の上では、この「Christr」が意味をなさないものであることがわかる。

N-b-001-1とN-b-001-2（図23・24）は、島原藩が作成した「宗門御改影踏帳」の、天明四（1784）年本と文化三（1806）年本に綴じ込まれていたものである。N-b-001-1（図23）は、天明四（1784）年本に綴じ込まれているもので、男性の頭髪が朱で刷られている。料紙の色調などから、宗門改帳の本紙とは別の料紙が使用されている可能性がある。印影が掠れていてほぼ見えないが、右上端に黒田家の家紋である藤巴紋、禁制句の下に七宝木瓜紋がそれぞれ朱で捺されている。左下に墨書の痕跡があり、左側に紙幅が広がっていた可能性がある。N-b-001-2（図24）は、文化三（1806）年本に綴じ込まれているもので、同じ紙に2枚分の紙踏絵が刷られている。これらの紙踏絵が宗門改帳に綴じ込まれたのは、封緘印のズレなどから後世のものであると判断されており、島原藩での使用や使用時期を示すものではないとされる（高倉 2014：283頁）。

N-b-004（図25）とN-b-005（図26）にはいずれも黒田家の家紋である藤巴紋が朱印で捺されている。この踏絵が実際に使用されていたならば、これを踏んだ者は黒田家の家紋も一緒に踏むことになった。N-b-004（図25）には、禁制句の上に横書きで「黒田家之定」と刷られ、左端に「寛文元年」「其旨添候故急調近参地名右（以下不明）」と墨書される。

N-b-005（図26）は、十字架中央部分にイエズス会の紋章である「IHS」の朱印が捺されている。江戸時代まで、朱印は主に将軍・大名による公文書にしか用いられなかった。もしキリスト教を邪教としていたならば、IHSの紋章が黒田家の家紋と同格の朱印で捺されるとは考えにくい。そのため、本資料は少なくとも江戸時代に制作されたものではないことが明らかである。右下には「扇城吟社之章」「大日本筑前國上座郡志波村里城 □」の二種の所蔵者印が朱で捺されている。左上には七宝木瓜紋が朱で捺され、その下に「文政元年」と墨書される。

それぞれ、使い古されたような皺をつける、宗門改帳に綴じ込むなどして、いかにも踏絵として使用されていた状況を表そうとしている。しかし、図像に注目すれば上述のような矛盾点が多く見えてくる。さらには、福岡藩が踏絵をおこなっていたという正式な記録は確認されていない（中禮 2017）。以上のことから、紙踏絵は販売目的で制作された偽資料であることが理解できる⁸。

4. おわりに

2024年は、大阪府茨木市のキリシタン遺物史料館で「茨木のキリシタンイメージ 何を“キリシタン遺物”とするのか」（会期：2024年3月22日～5月13日）が開催され、虚構系資料が展示された。当館の企画展「創られたキリシタンイメージー排耶書・実録・虚構系資料一」（会期：2024年8月23日～10月5日）でも、平戸市生月町・島の館の協力により、多数の虚構系資料を展示することができた。これらの展覧会によって、虚構系資料への関心が高まっている。

2024年は、踏絵に関心が集まった年でもあった。5月には、中学歴史の資料集『学び考える歴史』（浜島書店）で紹介された真鍮踏絵に、「踏めば助かるのに…」というコメントを残すロボットが、「人の心がない」辛辣な発言としてX（旧 Twitter）で話題となり、その後ロボットとその発言がミーム（meme）化した。このコメントのそもそもの意図と

しては、キリシタン禁制に対する客観的な視点を入れることで、考察や議論を生ませる効果を狙っているものであろう。X上では、踏絵に関して「踏んだ後に足を清めていた」「キリスト教は偶像崇拜禁止だから本物の信仰心があれば余裕で踏める」「『沈黙』を読んで欲しい」などの、踏絵に対する様々な解釈を示すコメントがみられた。

10月25日～27日に開催された「神田古本まつり 特選古書即売展」で、「踏み絵」が販売されていたこともX（旧 Twitter）で話題となった。目録を確認してみると、確かに「踏み絵 十字架上のキリスト」が「寛文9年」製、「実際に使用された為摩耗有」として出品されていた。さらに、その前後に「踏み絵 ピエタ聖母像」「クロス 隠れキリシタン」（本稿で扱った「仏像付き十字架」〔図16〕）も販売されていた（2024年『特選古書即売展』目録）。これらの資料は、本稿で紹介したような虚構系資料である。しかし、出品されていたものを真正の踏絵として認識していた人は少なくなかった。さらには、踏絵に対して「キリシタンの怨念がこもっているのではないか」、人気漫画・アニメ作品『呪術廻戦』の用語にかけて「特級呪物⁹である」とポストする人もみられた。現代のキリシタン・かくれキリシタンイメージには、小説や映画などの創作物に登場する禁教期初期の「キリシタン」の姿の影響が大きいのだと再認識させられた。

歴史にはロマンがある。歴史が好きであれば、各々の立場から「こうだったらいい」「こうあって欲しい」という、過去に対する願望も少なからず存在するはずだろう。しかしながら、学術的な検証を踏まえずに、伝承や願望・イメージなどをまるで「史実」のように扱い、歴史を修正してしまうことに問題があるのは言うまでもない。また、かくれキリシタンが「記録を残せなかった」という理由のもとに、様々なものをかくれキリシタンに関連付けるという行為は、歴史学的手法からは外れるものである。そして、「人びとがそれぞれに過去を自分の立ち位置から切り出してくるなかで、切り取られてきたものの妥当性を相互チェックするというのが学問

本来のあり方¹⁰であり、「忖度」や「配慮」のもと、歴史に関する誤った解釈を肯定も否定もしない状況は不健全である。

キリスト教関係虚構系資料は、それらを「キリシタン遺物として扱うこと」に問題がある。そして、単に「混乱や誤解を招いた悪いモノ」として扱うべきではない。近現代のキリシタン（南蛮）ブームやキリシタンイメージの歴史などに関連付けて、日本における「キリスト教の歴史」の一部に取り込み、「実際のキリシタン・かくれキリシタンの信仰とは関係が無い」ことを明示したうえで展示などに活用すべきである。今後、キリシタン関係虚構系資料が、キリシタン・かくれキリシタンイメージ研究や歴史捏造などの文脈で再解釈され、一種の歴史資料として活用されていくことを望みたい。

謝辞

本稿の執筆にあたって、指導教員である西南学院大学国際文化学部教授・伊藤慎二先生にご指導を賜ったほか、多くの方々にご協力をいただきました。

キリシタン関係虚構系資料については、平戸市生月町博物館・島の館館長・中園成生氏に、資料調査のご協力とご教授をいただきました。キリシタン研究史については同志社大学神学部准教授・三輪地塩氏に、キリシタン灯籠については東京大学大学院宗教学研究博士後期課程・服部直美氏に、ご教授とご助言をいただきました。

以上の方々へ、ここに深謝の意を表します。

註

- 『史迹と美術』第89号、39～43頁、1938年。
- 新村出「撰津高槻在東氏所蔵の吉利支丹遺物」／新村出・濱田耕作「京都及其の付近發見の切支丹墓碑」／濱田耕作・梅原末治「切支丹教名合字鞍及南蠻人繪鞍に就て」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第7冊、1923年。
- 西南学院百年史編纂委員会編 2019『西南学院百年史《通史編》』、123頁、学校法人西南学院
- 創立当初は「全国潜れキリシタン研究会」。
- 井口エリ 2023「目黒に隠れキリシタンが信仰した灯籠を見に行く」（デイリーポータルZ、2023年2月7日公開版、

<https://dailyportal.jp/kiji/lanterns-worshipped-by-hidden-Christians-in-Meguro>, 2024年12月20日確認)

- 6 沼田は、クラッセ『西教史』に基づいて清秀がキリシタンであったとするが、そのようなことは記されておらず、高山右近を誤って清秀と解釈したとされる(松田 1969: 122頁)。
- 7 福岡県立美術館が所蔵する、画商・久我五千男が収集した「久我コレクション」には、久我がキリシタン信仰との関連を想定し収集した「キリシタン関係資料」309件がある。内訳は陶磁器・漆工品・金工品・木工品・彫刻・絵画・歴史資料からなる(楠井編 1996: 巻頭)。それらの中に、昭和時代中期以降に制作されたとされる、十字文などが施された茶碗・花器・水差し・香炉・香合などの陶磁器が約120点含まれ(楠井編 1996: 54~76頁)、久我が熱心に収集していた状況がうかがわれる。
- 8 資料の科学分析を含む最新の研究では、紙踏絵の中には江戸時代後期に制作されたものがあり、踏絵として機能していたのではなく、禁教制度のプロパガンダのための道具として機能していたという説もある。ただ、現存する紙踏絵の多くは20世紀に制作されたものとされている(Montanari ほか 2025)。
- 9 芥見下々『呪術廻戦』のなかで、特に呪力が強い呪物を指す用語。
- 10 小野寺拓也・田野大輔 2023『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか?』岩波ブックレット1080、5頁、岩波書店

参考文献

相江なぎさ 2022「所蔵品紹介 十字文鐔」『西南学院大学博物館ニュース』Vol.45、西南学院大学博物館

青山 玄 1977「キリシタン遺物ではない十字架」『名古屋キリシタン文化研究会会報』第1巻、120頁、名古屋キリシタン文化研究会

井藤暁子編 1999『彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第40集、(財)大阪府文化財調査研究センター

伊藤玄二郎編・五野井隆史監修 2021『潜伏キリシタン図譜』潜伏キリシタン図譜プロジェクト実行委員会、かまくら春秋社

伊藤慎二 2024「筑前山家の『キリシタン伝説』と吉原勝」『創られたキリシタン像：排耶書・実録・虚構系資料』西南学院大学博物館研究叢書、52~55頁、花乱社

茨木市立文化財資料館 2018『茨木のキリシタン：信仰を捧げた人びと』茨木市教育委員会

今野春樹 2006「キリシタン遺物の諸相：新発見の可能性に備えて」『キリシタン文化研究会会報』128号、22~45頁、キリシタン文化研究会

今野春樹 2013『キリシタン考古学』考古調査ハンドブック8、ニューサイエンス社

大石一久編 2012『日本キリシタン墓碑総覧』南島原市教育委員会

鬼束芽依 2024「西南学院大学博物館蔵『魔鏡』は『かくれキリシタン資料』といえるのか?」『創られたキリシタン像：排耶書・実録・虚構系資料』西南学院大学博物館研究叢書、60~63頁、花乱社

鬼束芽依編 2024『創られたキリシタン像：排耶書・実録・虚構系資料』西南学院大学博物館研究叢書、花乱社

楠井隆志編 1996『久我コレクション調査目録』第三集、キリシタン関連資料篇、福岡県立美術館

桑野 梓 2024「茨木のキリシタンイメージ 何を“キリシタン遺物”とするのか」茨木市立キリシタン遺物史料館第14回企画展パンフレット、茨木市教育委員会

竹村 覚 1964『キリシタン遺物の研究』開文社

中禮尚史 2017「所蔵品紹介 紙踏絵」『西南学院大学博物館ニュース』Vol.33、西南学院大学博物館

高倉洋彰 2014『行動する考古学』中国書店

東京国立博物館編 2001『東京国立博物館図版目録：キリシタン関係遺品篇』東京国立博物館

中園成生 2011a「鍋山石を用いた石造物：石龕を中心に」『萩市福栄地域における隠れキリシタン調査事業報告書』15~28頁、山口県萩市

中園成生 2011b「山口県下キリシタンの動向と紫福地区におけるかくれキリシタン信仰の可能性」『萩市福栄地域における隠れキリシタン調査事業報告書』29~40頁、山口県萩市

中園成生 2018『かくれキリシタンの起源：信仰と信者の実相』弦書房

中園成生 2019a「変容と併存」『生月学講座』No.176(長崎県平戸市生月町博物館島の館ホームページ、<https://shimanoyakata.hira-shin.jp/index.php/view/239>、2019年12月18日公開版、2024年12月12日確認)

中園成生 2019b「信仰『併存』理解」『生月学講座』No.177(長崎県平戸市生月町博物館島の館ホームページ、<https://shimanoyakata.hira-shin.jp/index.php/view/242>、2019年12月18日公開版、2024年12月12日確認)

中園成生 2019c「『虚構のかくれキリシタン』の問題」『生月学講座』No.179(長崎県平戸市生月町博物館島の館ホームページ、<https://shimanoyakata.hira-shin.jp/index.php/view/244>、2019年12月18日公開版、2024年12月12日確認)

中園成生 2021「『潜伏キリシタン図譜』の検証」『生月学講座』No.216(長崎県平戸市生月町博物館島の館ホームページ、<https://shimanoyakata.hira-shin.jp/index.php/view/327>、2021年6月8日公開版、2024年12月12日確認)

中園成生 2024「キリシタン関係虚構系資料の分類」『生月学講座』No.275(長崎県平戸市生月町博物館島の館ホームページ、<https://shimanoyakata.hira-shin.jp/index.php/view/442>、2024年12月2日公開版、2024年12月12日確認)

平田豊弘 2021「肥後・天草の潜伏キリシタン」『潜伏キリシタン図譜』、228~241頁、潜伏キリシタン図譜プロジェクト実行委員会、かまくら春秋社

フーベルト・チースリク 1995『キリシタン史考：キリシタン史の問題に答える』聖母の騎士社

古田織部美術館編 2018『キリシタンと茶の湯』宮帯出版社

麻柄一志 2003「歴史のなかの嘘：隠れキリシタン十字架調査顛末記」『富山県博物館協会デジタル展覧会・電子紀要』(<http://museums.toyamaken.jp/documents/documents006/>、2024年12月10日確認)

松田毅一 1953『キリシタン研究』第一部、創元社

松田毅一 1969『キリシタン：史実と美術』淡交社

松本 真 2000「織部灯籠：『キリシタン灯籠』の遺品は存在しない」『広島修大論集』第40巻第2号、49~113頁

宮川由衣 2020「サンクタ・マリアとしての白磁製観音像：潜伏キリシタン伝来の『マリア観音』をめぐる」『西南学院大学博物館研究紀要』第8号、29~39頁、西南学院大学博物館

三輪地塩 2023「キリシタン研究の現在：キリシタン・イメージの形成とキリシタン・ブームに関する考察」『基督教研

- 究』第85巻第2号、19～33頁、同志社大学神学部内基督教研究会
- 三輪地塩 2024「キリシタン研究の発展とキリシタン資料・遺物の『発見』史」『創られたキリシタン像：排耶書・実録・虚構系資料』西南学院大学博物館研究叢書、48～51頁、花乱社
- 安高啓明・内島美奈子 2016「絵踏の展開と踏絵の図像：貸借にみる踏絵観」『西南学院大学博物館研究紀要』第4号、25～38頁、西南学院大学博物館

- 安高啓明 2018『踏絵を踏んだキリシタン』歴史文化ライブラリー469、吉川弘文館
- 安高啓明 2022『潜伏キリシタンを知る事典』 柊風舎
- Montanari, Riccardo, Philippe Colomban, Maria Francesca Alberghina, Salvatore Schiavone, and Claudia Pelosi. 2025. "Kami Fumi-e: Japanese Paper Images to Be Trampled On—A Mystery Resolved." *Heritage* 8 (78). <https://doi.org/10.3390/heritage8020078>. (2025年3月6日確認)

鬼東 芽依（おにつか めい）

西南学院大学博物館学芸研究員

西南学院大学博物館研究紀要

第 13 号

発行日 2025(令和7)年3月20日

発行 西南学院大学博物館
〒814-8511 福岡市早良区西新3丁目13番1号

発行 福岡印刷株式会社
〒810-0001 福岡市中央区天神3丁目4番3号
